# 野 上 中 南 遺 跡

— 半島振興道路奥佐々阪井線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

２００５年１０月

財団法人 和歌山県文化財センター

財団法人 岡山県文化福祉センター
年 月 日

# 序　文

海南市東部の野上中地域は、貴志川中流域に展開する野上谷の入口にあたります。古くは野上八幡神社の荘園として開け、江戸時代後期には井沢八惣兵衛らによる用水・溜池の整備が進み、豊かな田園風景が広がっています。近現代は特産品であるシュロ製品の生産などが行われましたが、地域の発展を支えた野上鉄道も時代の波に飲まれ、平成６年に廃線を迎えました。線路の跡地はバイパス道路として今後も地域の発展を支えてゆくことが期待されています。

野上中南遺跡は旧北山駅のすぐ東側に広がる遺跡で、線路跡地約2,000㎡の発掘調査が行われています。当センターでは平成15・16年度に発掘調査を実施し、弥生時代中期前半の集落・墓域と鎌倉時代の集落を確認しました。野上中南遺跡における一連の調査は、平成８年度の海南市文化財研究調査会の試掘調査から平成16年度の和歌山県文化財センターの第２次調査まで実施され、多大な成果を収めています。今回、調査組織の壁を越えて、これらの調査成果を１冊の本として刊行できることとなりました。当報告書が地域史の理解に役立つことを期待してやみません。

最後に、調査・整理にあたり、ご指導・ご協力いただきました関係各位並びに、地元の方々に感謝の意を表する次第です。

平成17年10月31日

財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　　木　村　　良　樹

# 例　言

1．本書は、海南市野上中に所在する野上中南遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、海南市文化財調査研究会の協力を得て、和歌山県文化財センターが編集・発行した。

3．調査は和歌山県海草振興局の半島振興道路奥佐々阪井線道路改良工事に伴うものである。本書に集録した調査の調査組織・調査地区等の内訳は下記のとおりである。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成８年度 | 試掘調査 | 海南市文化財調査研究会 | 試掘１～５地点 | 27㎡ |
| | 発掘調査 | 海南市文化財調査研究会 | Ａ・Ｂ区 | 226㎡ |
| 平成９年度 | 発掘調査 | 海南市文化財調査研究会 | Ｃ～Ｆ区 | 577㎡ |
| 平成15年度 | 発掘調査 | (財)和歌山県文化財センター | １～４区 | 338㎡ |
| 平成16年度 | 発掘調査 | (財)和歌山県文化財センター | ５～８区 | 772㎡ |
| 平成17年度 | 出土遺物整理・報告書編集 | (財)和歌山県文化財センター | | |

4．和歌山県文化財センター事務局

専務理事　岩橋　驍(平成15～17年度)　管理課副主査　松尾克人(平成15～17年度)
事務局長　熊崎訓自(平成17年度)　埋蔵文化財課長　渋谷高秀(平成15～17年度)
〃　次長　松田正昭(平成15・16年度)　〃　技師　丹野　拓(平成15・16年度)調査担当
管理課長　西本悦子(平成15～17年度)　〃　副主査　〃　(平成17年度)整理担当

5．発掘調査は平成８・９年度事業を海南市文化財調査研究会の植田法彦が、平成15～17年度事業を(財)和歌山県文化財センターの丹野拓が担当した。

6．本文執筆及び図版作成は、海南市文化財調査研究会分を植田が、(財)和歌山県文化財センター分他を丹野が担当した。編集は丹野が行った。

7．発掘調査・出土遺物整理に際し、和歌山県教育庁文化遺産課武内雅人・佐々木宏治・仲原知之、海南市教育委員会生涯学習課尾崎正幸・日置智、和歌山市立博物館前田敬彦ほか各氏の指導・協力を得た。記して感謝の意味を表したい。

8．作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は海南市教育委員会及び財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は海南市教育委員会及び和歌山県教育委員会が各々保管している。

# 凡　例

1．遺構の名称は各調査組織でつけていたが、竪穴住居（SH）・掘立柱建物（SB）・井戸（SE）・墓（ST）については、検出された順に、通し番号を振りなおした。溝（SD）・土坑（SK）・柱穴・ピット（SP）については、各組織ごとに番号を振っている。

2．遺物は海南市文化財調査研究会の１次調査出土土器１～55、２次調査出土土器61～97、石器101～177、和歌山県文化財センター分の１～176、計345点を掲載した。

3．調査の基準線は国土座標第Ⅵ系を、標高は東京湾標準潮位（T.P.値）を用いた。

4．土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』を使用した。

# 目　次


第１章　はじめに …… 1
第１節　事業の経緯と経過 …… 1
第２節　地理的・歴史的環境 …… 3
第２章　海南市文化財調査研究会による調査 …… 5
第１節　調査の経緯・経過と方法 …… 5
第２節　試掘調査（第１～５地点） …… 6
第３節　第１次調査（Ａ・Ｂ区） …… 8
第４節　第２次調査（Ｃ～Ｆ区） …… 14
第５節　出土遺物（Ａ～Ｆ区） …… 30
（１）弥生時代の遺物 …… 30
（２）鎌倉時代の遺物 …… 31
第３章　和歌山県文化財センターによる調査 …… 41
第１節　調査の経緯・経過と方法 …… 41
第２節　第１次調査（１～４区） …… 42
（１）１区 …… 42
（２）２区 …… 42
（３）３区 …… 46
（４）４区 …… 49
第３節　第２次調査（５～８区） …… 50
（１）５区 …… 50
（２）６区 …… 56
（３）７区 …… 65
（４）８区 …… 68
第４節　出土遺物（１～８区） …… 69
（１）弥生時代の遺物 …… 69
（２）鎌倉時代の遺物 …… 74
（３）包含層・その他の遺物 …… 78
（４）第４・８区堆積土（東側段丘面整地土）の遺物 …… 78
第４章　総括 …… 80
（１）弥生時代の野上中南遺跡 …… 80
（２）鎌倉時代の野上中南遺跡 …… 83
（３）まとめ …… 83

# 挿図目次


図1　野上八幡宮出土 軒平瓦 ……3
図2　周辺の地形と遺跡 ……4
図3　調査区配置状況 ……4
図4　調査地点周辺の小字名と試掘位置 …5
図5　海南市文化財調査研究会　第1次調査地区割図 ……6
図6　試掘地点土層図 ……7
図7　A区北壁断面図とB区平面図･断面図 …9
図8　B区土坑SK01平面図・断面図 ……10
図9　B区掘立柱建物跡SB01 ……11
図10　B区出土 軒平瓦の顎部 ……11
図11　海南市文化財調査研究会　第2次調査地区割図……12
図12　第2次調査 基本土層と各地区平面図 …13
図13　C区平面図……14
図14　D区平面図……17
図15　E区平面図……21
図16　F区平面図……24
図17　溝(SD04･07)と土坑(SK10･12～22･35)…27
図18　掘立柱建物跡（SB02～07）……28
図19　竪穴住居跡（SH01～05）……29
図20　A・B区出土遺物①……33
図21　A・B区出土遺物②……34
図22　C～F区出土遺物①……35
図23　C～F区出土遺物②……36
図24　C～F区出土遺物③……37
図25　C～F区出土遺物④……38
図26　C～F区出土遺物⑤……39
図27　和歌山県文化財センターによる第1・2次調査区配置図・土層柱状図……41
図28　1・2区平面図 ……43・44
図29　1～3区 遺構 ……45
図30　3区 遺構 ……46
図31　3・4区平面図 ……47・48
図32　5区平面図 ……51・52
図33　5区 竪穴住居跡SH07 ……53
図34　5区 掘立柱建物跡SB09・06 ……54
図35　5区 掘立柱建物跡SB11他 ……55
図36　6区平面図 ……57・58
図37　6区 竪穴住居跡SH09・01 ……59
図38　6区 竪穴住居跡SH08・10 ……60
図39　6区　掘立柱建物跡SB03･11、柱列SA05･06 ……61
図40　6区 溝SD605 ……62
図41　7区平面図 ……63・64
図42　7区 周溝墓状遺構ST03・04 ……65
図43　7区 掘立柱建物跡SB12、井戸SE01･02…67
図44　8区平面図・北壁土層断面図……68
図45　弥生時代の遺物①（1～3区）……69
図46　弥生時代の遺物②（5区SH07）……70
図47　弥生時代の遺物③（5・6区）……71
図48　弥生時代の遺物④（6区SH08）……72
図49　弥生時代の遺物⑤（6区SH09）……73
図50　鎌倉時代の遺物①（2・3・7区）…74
図51　鎌倉時代の遺物②（7区SE01）……75
図52　鎌倉時代の遺物③（7区SE02）……76
図53　包含層・その他の遺物……77
図54　4･8区堆積土(東側段丘整地土)の遺物…79
図55　各時代の遺構分布状況……81・82


# 表目次


表1　調査・整理の工程 ……2

# 写真図版 目次


PL 1　遺跡全景・海南市文化財調査研究会 試掘第 1 地点
PL 2　試掘第 2 地点
PL 3　試掘第 3 地点
PL 4　試掘第 4・5 地点
PL 5　海南市文化財調査研究会第 1 次調査 A区全景
PL 6　B区SK01①
PL 7　B区SK01②
PL 8　B区完掘状況・土層
PL 9　B区遺物出土状況
PL10　海南市文化財調査研究会第 2 次調査 調査区全景
PL11　D～F区試掘溝
PL12　C区全景
PL13　C～F区掘削状況
PL14　D区全景
PL15　D区SB07、SD05・07
PL16　D区全景他
PL17　E区SH01
PL18　E区SH05
PL19　E区SH04、SB03･04他
PL20　E区SK10
PL21　E区SK12・18・19
PL22　F区全景・SB05・06
PL23　F区SH02・03
PL24　F区SH03、SK21・22
PL25　海南市文化財調査研究会第1次調査出土中世土器
PL26　海南市文化財調査研究会第2次調査出土弥生土器等
PL27　海南市文化財調査研究会第2次調査出土弥生土器
PL28　海南市文化財調査研究会第2次調査出土弥生･中世土器
PL29　海南市文化財調査研究会第 2 次調査出土石器①
PL30　海南市文化財調査研究会第 2 次調査出土石器②
PL31　海南市文化財調査研究会第 2 次調査出土石器③
PL32　海南市文化財調査研究会第 2 次調査出土石器④
PL33　和歌山県文化財センター第 1 次調査 1 区全景
PL34　1 区SK129・151・175
PL35　2 区全景
PL36　3 区全景
PL37　3 区ST01・02、SK303
PL38　3 区SX342、SB08、SK375
PL39　4 区全景・野上鉄道の盛土
PL40　県文化財センター第 2 次調査 5 区全景
PL41　5 区SH07
PL42　5 区SB06・09・10
PL43　6 区全景
PL44　6 区SH08・09
PL45　6 区SH01・09・10
PL46　6 区SB03・11、柱列05・06
PL47　7 区全景
PL48　7 区ST03・04、SB12
PL49　7 区SE01・02
PL50　7 区SE02
PL51　8 区全景・土層堆積状況
PL52　1～4 区出土遺物
PL53　5 区出土遺物
PL54　5 区・6 区出土遺物
PL55　6 区出土遺物
PL56　6 区・7 区出土遺物
PL57　7 区出土遺物
PL58　7 区・8 区出土遺物

# 第１章　はじめに

## 第１節　事業の経緯と経過

### （１）発掘調査の経緯

海南市日方駅から野上町登山口駅まで、野上鉄道という私鉄が走っていた。大正５年から81年間に渡り、地域の交通・産業を支えつづけた路線であったが、鉄道利用客の減少に歯止めがかからず平成６年をもって廃線とされた。

野上鉄道の跡地は鉄道のレール等が撤去され、しばらくは地元で里道のように使われていたが、海南市から野上町を抜け龍神・高野山方面へ抜けるための主要なルートを通っていたため、交通路線として利用が図られることとなった。海南市市街地についてはサイクリングロードとして整備され、主に地元の学生の通学路として賑わいを見せている。貴志川を渡り野上八幡神社を抜ける区間については、これと平行する県道奥佐々阪井線の幅員が狭く、朝晩の渋滞が懸念される状況であったため、バイパス道路として整備されることとなった。また、これに先立ち道路計画地内の南側に基幹排水路を埋設する計画が立てられた。これら一連の工事は弥生時代の遺跡として『平成７年度和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に登録されていた野上中南遺跡の北隅を通過していたため、遺跡の範囲を確認することとなった。

調査の経緯については第２・３章でも触れるが、ここでは事業全体の概略について述べておくことにする。

平成８年度には海南市教育委員会の指導のもと、海南市文化財調査会が試掘・確認調査を実施した。西から順に１～５地点を設定し、調査を行った。旧北山駅の西側の地形が一段落ちた第３地点で中世の遺構・遺物を確認したため、範囲をやや拡張して調査が行われた（Ａ・Ｂ区）。

平成９年度には、引き続き西側隣接地に東から順（調査順）にＣ～Ｆ区を設定し発掘調査が行われ、弥生時代の遺構・遺物を確認した。

平成10年から数年かけて用地の取得等が行われたのち、残存部分を和歌山県文化財センターが調査を行うこととなった。

平成15年には、和歌山県教育委員会の指導のもと、和歌山県文化財センターが発掘調査を実施した。調査範囲は道路の北側溝を埋設する範囲であり、約1.8～2.0ｍ幅で延長185ｍと狭い範囲を調査することから、発掘作業員を直接雇用して調査にあたった。調査区は西から順に１～４区を設定し、１～３区西半では弥生時代の遺構・遺物を、３区東半から４区では鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。

平成16年度には、道路本線部分の調査を行った。調査区は西から順に５～８区と設定し、５～７区西半では弥生時代の遺構・遺物を、７区東半から８区では鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。

平成８～16年度の調査では、農業用の水路を残したまま調査区を設定し、調査を行っている。一連の調査を終了した後、この農業用水路を土管に交換する工事が行われるに及び、県教育委員会による立会調査が行われている。工事に伴う遺構の簡単な図化と遺物収集であるが、各調査区の間をつなぐ部分のデータであり、本報告でも参考とした。

## （２）整理作業・報告書刊行に至る経緯

各調査で出土した遺物や資料類は組織ごとに整理を行っていた。

海南市文化財調査会の調査資料は、海南市内海小学校に保管され、資料整理が進められた。平成16年度末までに基本的に整理作業が終了し、17年度に本文執筆を行っている。

和歌山県教育委員会の調査資料は、和歌山市湊に所在する県教育庁文化遺産課の文化財資料室に一時保管され、遺物の洗浄と図面整理が行われている。

和歌山県文化財センターの調査資料は、和歌山市岩橋の整理事務所に保管され、応急作業として遺物の洗浄が行われている。

平成16年度に、これらの調査は本来一連の事業であり、遺跡の内容が分かりやすい報告書を刊行することが望ましいことから、調査成果を合わせて１冊の本とすることが県教育委員会から指導された。平成17年度事業として当センターで報告書を刊行するに及び、各組織の担当者間で協議・調整を行い本文執筆・図版作成の分担を決めたうえで、報告書を刊行する運びとなった。関係者各位の協力に感謝する次第である。

**海南市文化財調査研究会**

| | 1996年 | | | 1997年 | | | | | | | | | | | | 1998年 | | | 2005年 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 試掘 | | ■ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| １次調査（Ａ・Ｂ区） | | | ■ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ２次調査（Ｃ～Ｆ区） | | | | | | | | | | | | | | | | ■ | ■ | ■ | | | | | | | |
| 遺物整理・原稿執筆 | | | | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | ▒ | | |

**和歌山県文化財センター**

| | 2003年 | | | 2004年 | | | | | | | | | | | | 2005年 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| １次調査（１～４区） | | ■ | ■ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ２次調査（５～８区） | | | | | | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | | | | | | | | | | | | |
| 遺物整理事業 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ■ | ■ | ■ | ■ | | |
| 報告書編集・刊行 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ■ | ■ |

表１　調査・整理の工程

## 第２節　地理的・歴史的環境

### （１）周辺の遺跡分布

海南市には山地を走る水系の区分により４つの地域が設定できる。紀伊水道に注ぎ込む亀の川・日方川・加茂川は、下流域に形成された沖積地に遺跡を形成し、小文化圏を作り出している。

亀の川流域の主要な遺跡には、弥生時代の大規模な集落である岡村遺跡・亀川遺跡と高地性集落・滝ヶ峯遺跡がある。これらの集落では縄紋時代晩期から古墳時代まで遺跡が形成されている。紀伊水道に程近い山上には、室山古墳群と山崎山古墳群が展開している。

日方川流域では、縄紋時代の鳥居遺跡と弥生時代の大野中遺跡の調査が実施されている。また、大野城跡のほか、多数の中世城館跡が存在している。

加茂川流域は旧下津町にあたる範囲である。下流域の下遺跡（下津二中校庭遺跡を含む）では、縄紋時代晩期から鎌倉時代までの各時代の遺構が確認された。

野上中南遺跡は紀ノ川最大の支流である貴志川水系に所在する。高野山西側の花坂に源を発し谷筋を西流し、野上中南遺跡の南で90度向きをかえ紀ノ川に向かって北上する。

縄紋時代遺跡は上流域にサヌカイト剥片・石鏃散布地が多数分布しているほか、山中には有舌尖頭器が出土した山畑遺跡や異形部分磨製石器（トロトロ石器）が出土した雨山遺跡などがある。縄紋時代後期～晩期の集落として野上中南遺跡のすぐ南にある溝ノ口遺跡のほか、土偶の出土で知られる東野遺跡、平東遺跡が知られている。

弥生時代の遺跡は、野上中南遺跡の周辺に集中している。溝ノ口遺跡では弥生時代前期・中期前半の集落であり、松菊里型住居が検出されたほか、多数の石器が出土している。野上中遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が出土している。野上中地域より東に17km上流の笹瀬遺跡では、手焙り形土器が４点出土した。また、野上中地域より北に７km下流の北（楠田）遺跡では、弥生時代中期後半～後期の遺物が出土している。

古墳時代には、貴志川町域に古墳が散在している。中期の丸山古墳や後期の平池古墳群などの発掘調査が行われているが、野上中地域より上流では古墳がまったく確認されていない。

奈良・平安時代の遺跡としては、北方約７～８kmに北山廃寺と最上廃寺があるが、その他の遺跡の様相は不明である。鎌倉・室町時代の遺跡としては、多数の城館が点在する。野上八幡神社境内遺跡や蓮花寺遺跡では鎌倉時代の軒瓦が表採されている。集落遺跡としては東方2.5kmに下佐々Ⅲ遺跡、同５kmには福田遺跡が知られている。

また、周囲には江戸時代に井沢八惣兵衛らにより造られた水路や池が所在している。

図１　野上八幡宮出土　軒平瓦

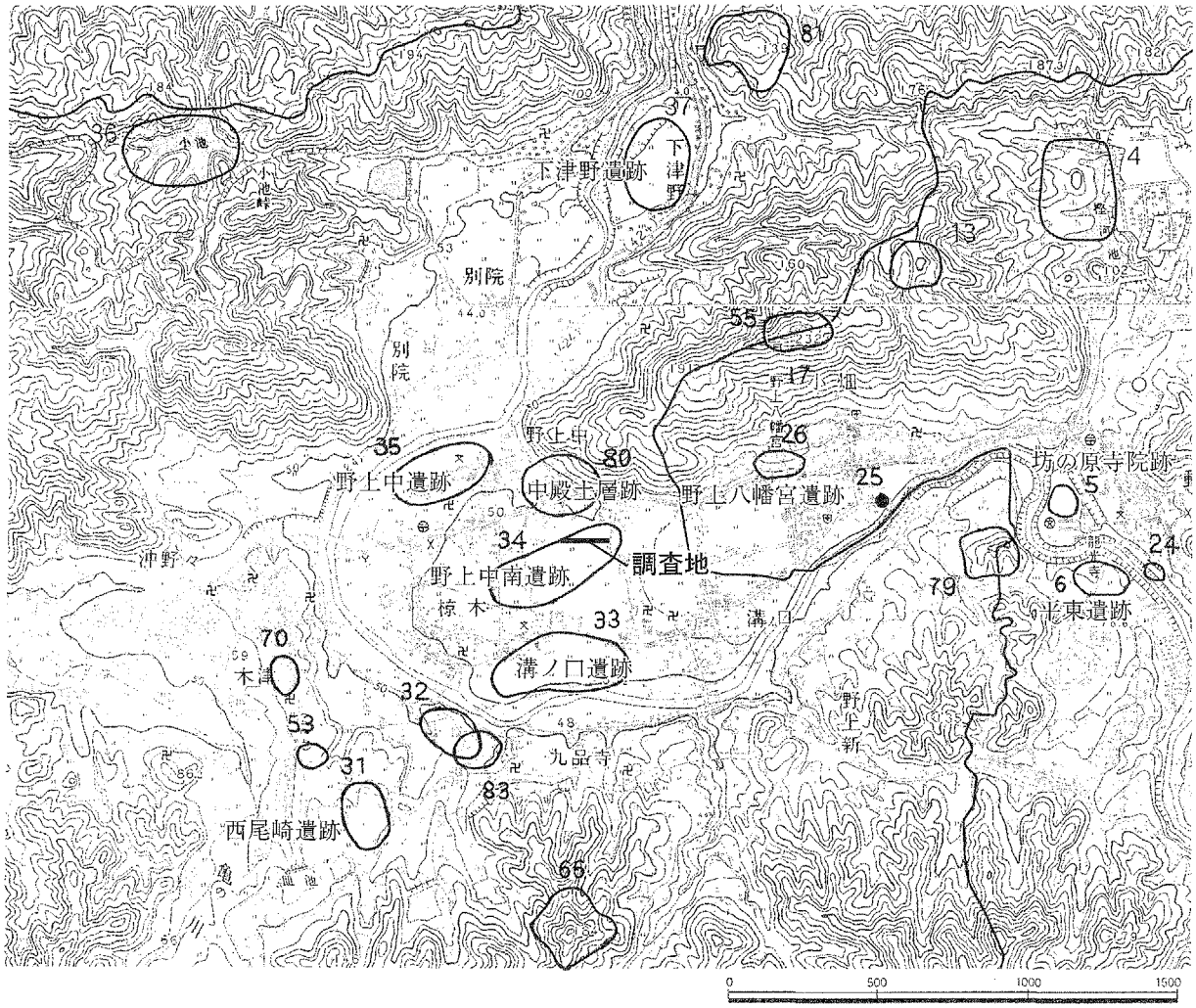



図２　周辺の地形と遺跡

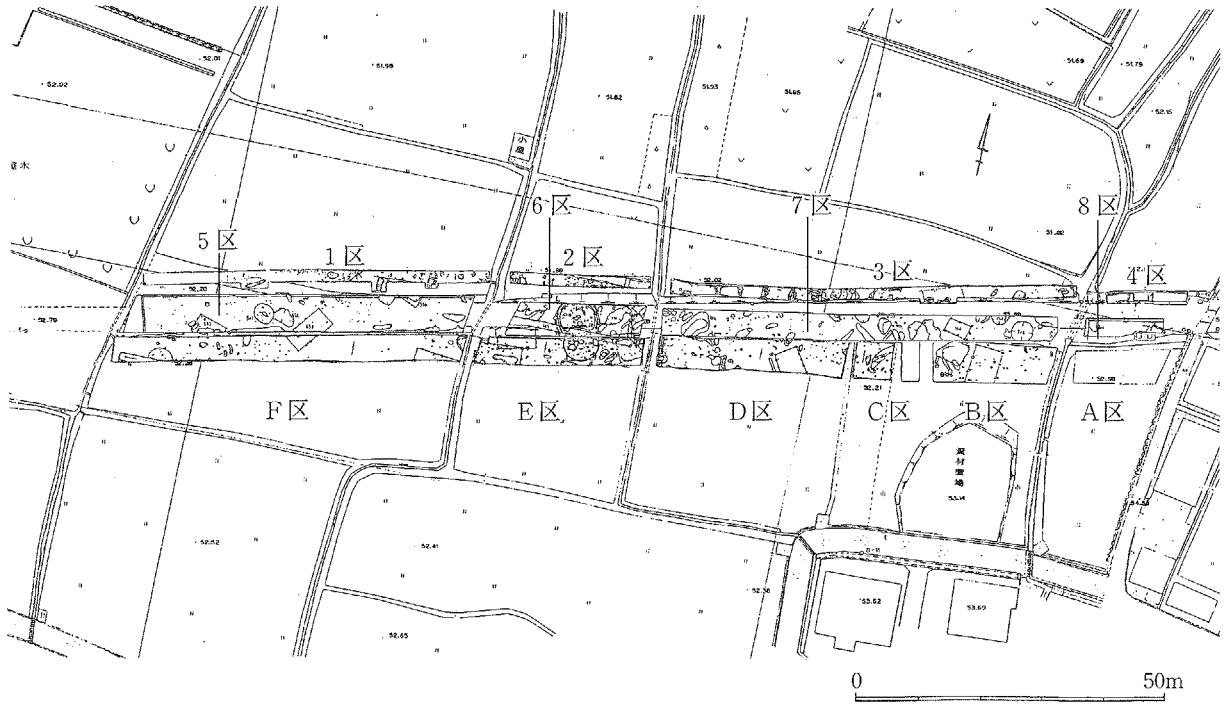



図３　調査区配置状況

# 第２章　海南市文化財調査研究会による調査

## 第１節　調査の経緯・経過と方法

日露戦争前後のシュロ業の盛況と貴志川流域の野上谷の経済の発展は、野上谷と海南市街地を結ぶ鉄道の敷設をうながした。こうして野上町の中心地から海南市日方までの5.5ｋｍ間に野上軽便鉄道が開通したのは、大正５年２月のことである。のちに「野上電気鉄道」と社名を変更して、路線をさらに東方の生石口（オイシグチ）にひろげて、野上谷の経済の発展に寄与してきたが、モータリゼーションの進転にともない、平成６年３月に81年間の歴史に幕をとじた。その後旧野上鉄道の路線跡は、片道１車線の県道奥佐々阪井線として生まれかわろうとしている。

県道としての工事計画は、野上中―北山―八幡馬場（いずれも旧駅名）間の高低の少ない区間から実施されることになり、工事予定地内で買収の完了した個所について海南市教育委員会の委託を受けた海南市文化財調査研究会が試掘調査を実施した（図４・６）。その結果、周知の遺跡である野上中南遺跡内で出土遺物や遺構が検出された。そのため関係諸機関が協議の上、今回の発掘調査を実施することになった。なお買収の完了していない個所については、買収完了後に調査を実施することになった。

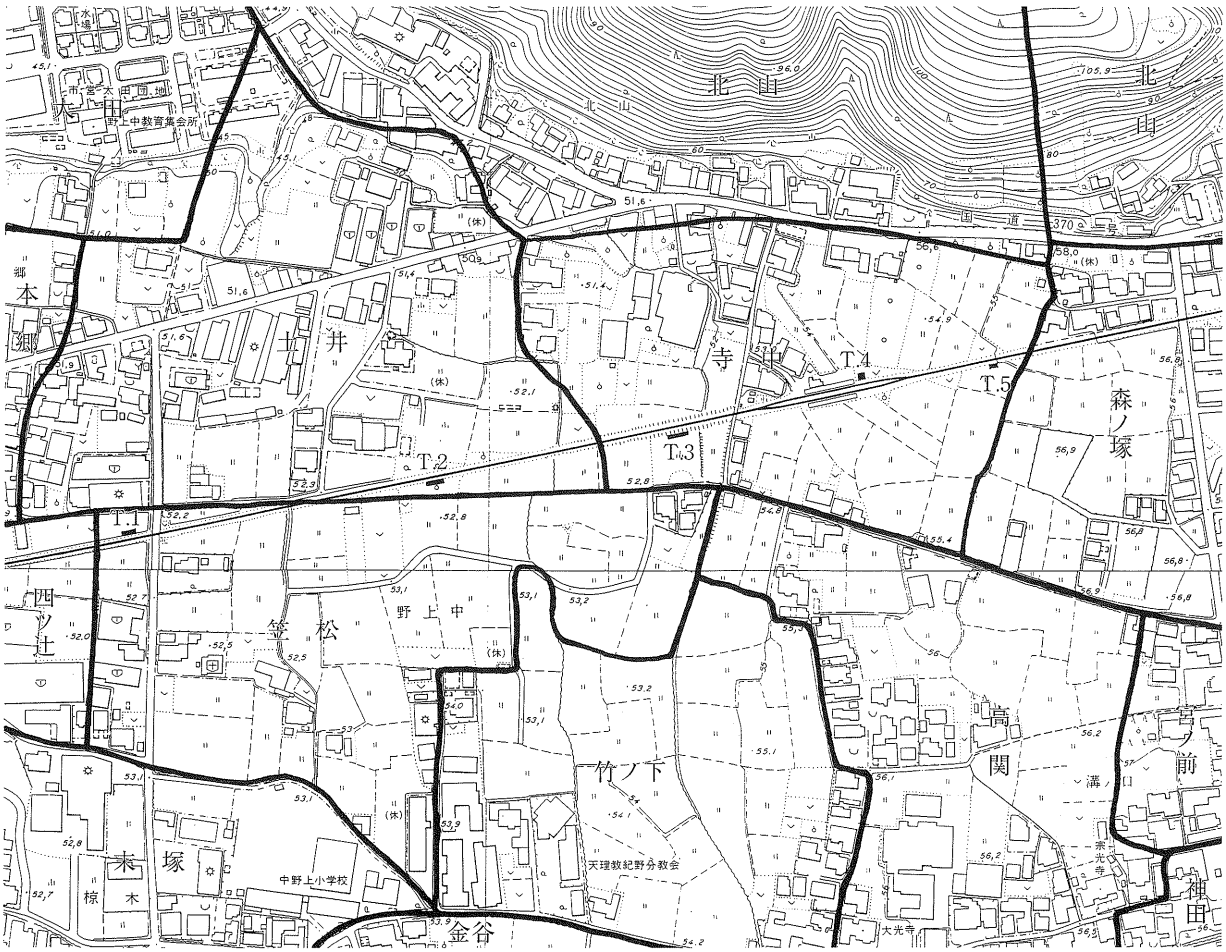



図４　調査地点周辺の小字名と試掘位置

試掘調査は、買収の完了した地区内に、ほぼ等間隔に5箇所の地点を設定した。第1層･第2層にあたる耕作土と床土を重機で除去した後、人力による調査をすすめた。このことは後の発掘調査でも同じ方法を採用している。

## 第2節　試掘調査（第1～5地点）（図4・6、PL1～4）

試掘調査は図に示した個所で5箇所実施したが、第3地点以外では遺構・遺物等は何らみとめられなかった。5箇所の試掘トレンチは、西方から第1地点・第2地点～第5地点と呼称している。第1地点では遺跡から離れているからか、地山層と考えられる第5層の明茶褐色砂質土が直ぐに現れた。第2地点は栗を栽培している畑地で、土質改良のため何度も土を入れ替えている。そのために地山層である第5層に掘り込まれた茶褐色砂質土は遺構ではないと判断した。

第4地点は、北山駅の東側で、第1～3地点より約2.5m高くなっている。駅の周辺は耕作土の下の土質は黄褐色砂質土で、これはこのあたりの地山層である。第5地点は、海草郡野上町との堺に接する地点で、このあたりは水田地帯のため土質もはっきりとはしない。

第2地点の東側の水田から、第3地点の西側の水田に至る4枚の水田は、当時まだ買収が完了していなかったので、今回の試掘調査では除外した。

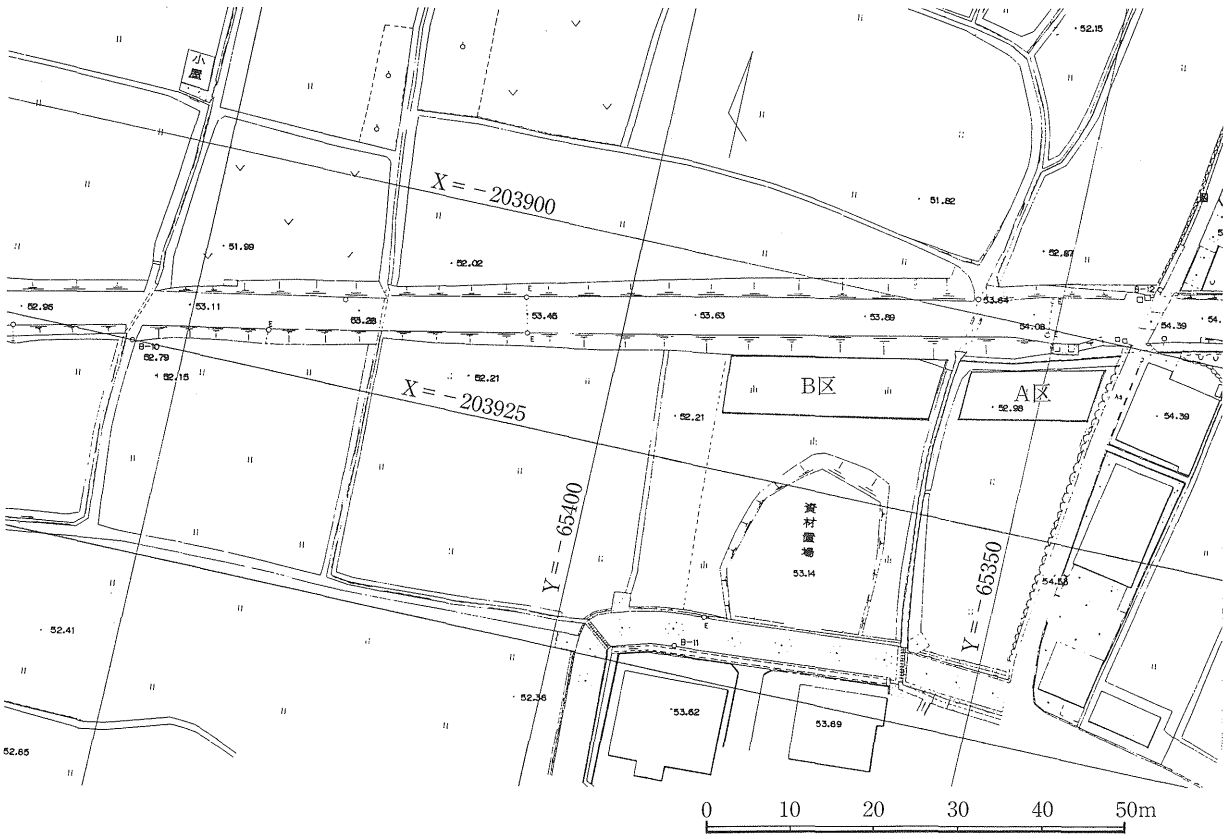



図5　海南市文化財調査研究会　第1次調査地区割図

第２～３地点の間、試掘調査の地点が、旧線路跡の南側に限ったのは、旧線路跡のすべてを発掘調査するのではなく、旧線路跡の南側に設置される、幅約２mの水路が、現水田面下、約2.3mに達するため、遺構が破壊される可能性が認められる地点のみが、今回の調査対象地点であると協議されていたので、試掘地点は旧線路跡の南側に限られたのである。

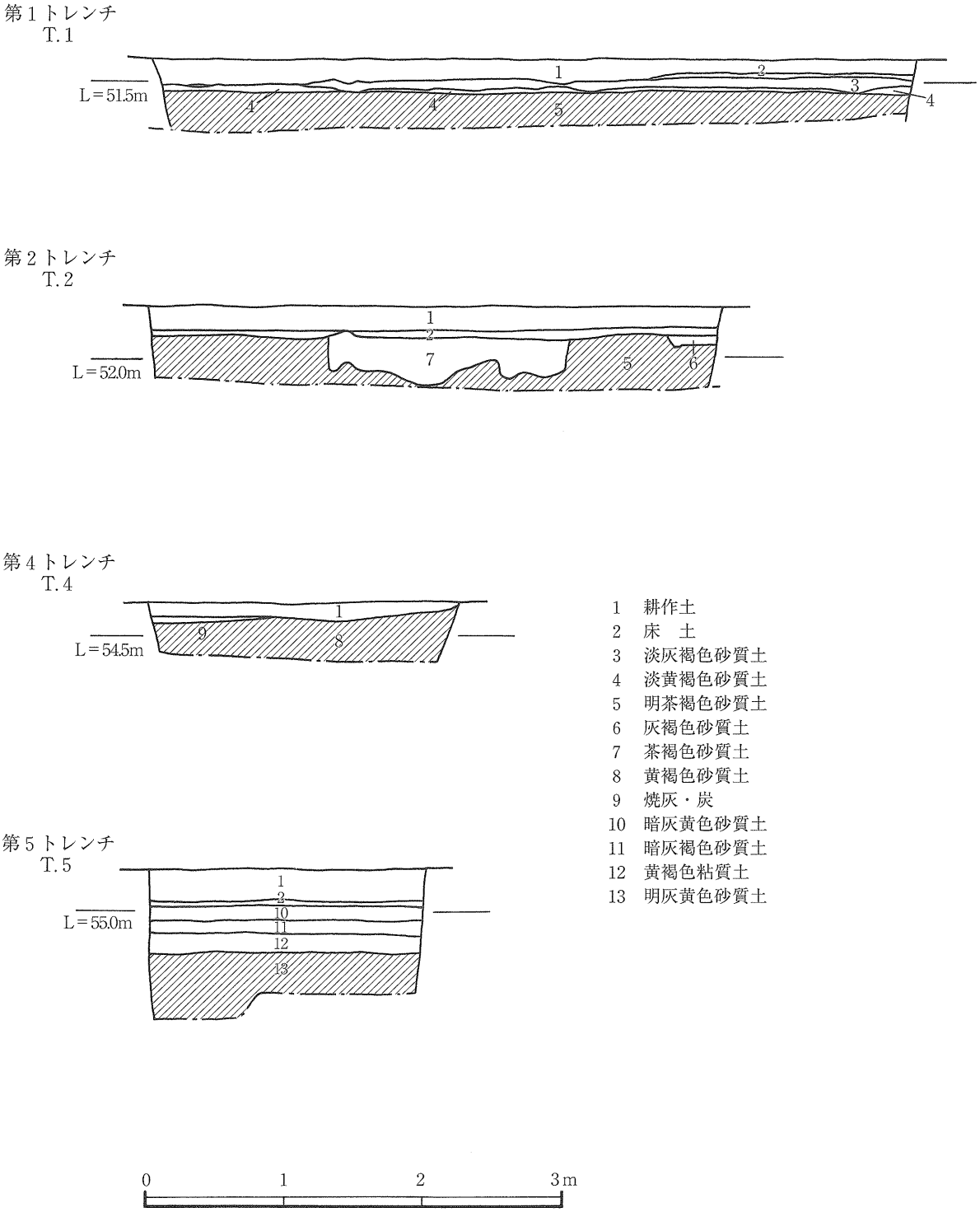



図６　試掘地点土層図

## 第3節　第1次調査（A・B区）（図5・7～10、PL5～9）

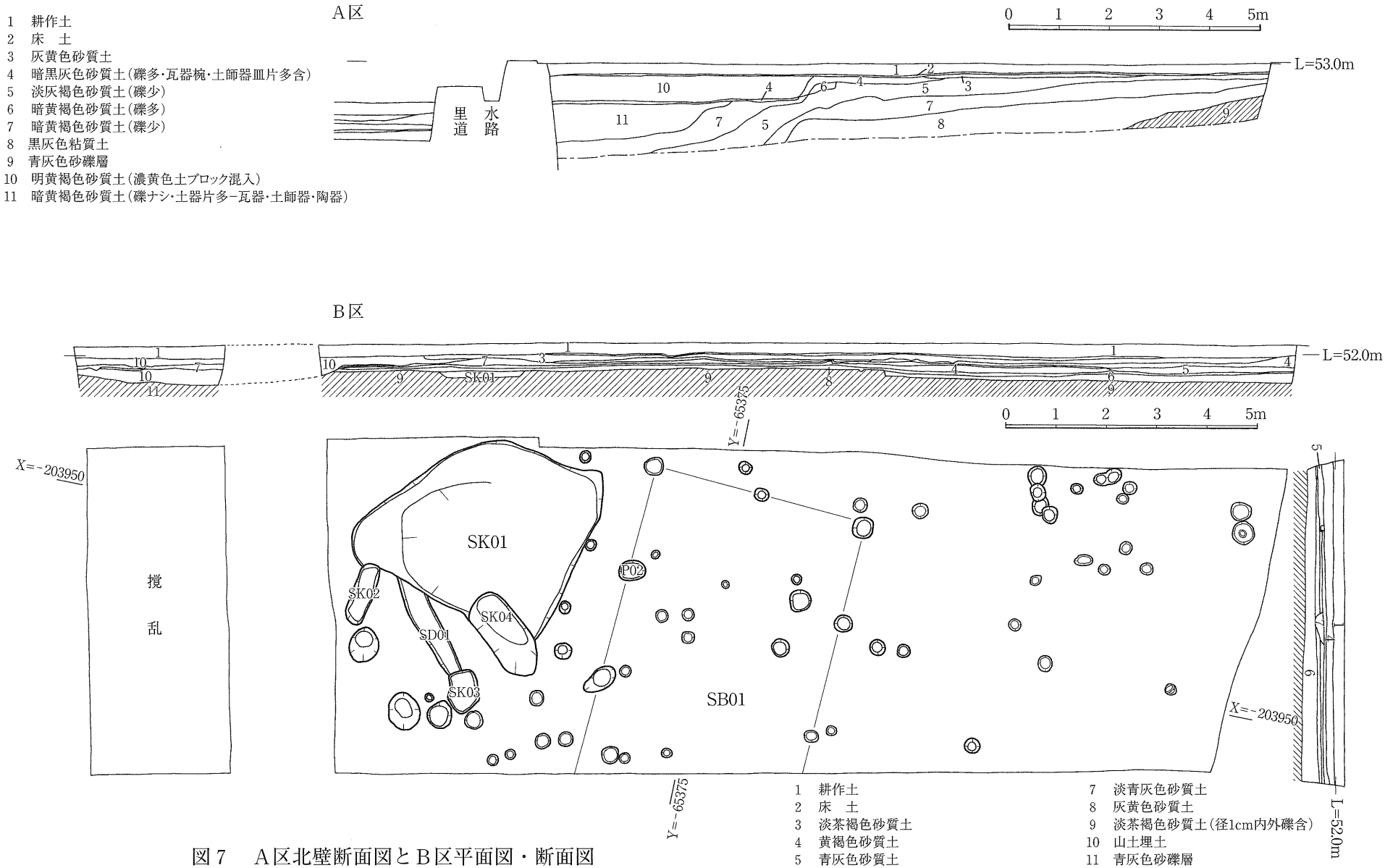
5箇所の試掘調査の結果、ただ1箇所で遺構と遺物が検出された第3地点を中心にして、全面調査を実施した。ただ第3地点の東側の水田はわずかに高くなっているし、さらにその東方は約2.5mの段差をもって高くなって第4地点につながっているので、そうした段差をもつ土地の成り立ちを調べるために第3地点の東側の水田も発掘調査の対象とした。そのために東から順にA区B区と呼称した（図5）。

A区では、第2層の床土を除去すると、赤褐色の土師器小皿を多く含む層とまったく含まない層が不規則にあらわれた。少しずつ土砂を除去していくが、そのつど土質と遺物（土師器小・中皿、青磁碗、滑石製石鍋、瓦器碗、瓦器小皿）の現れる場所がかわるだけで、遺構はまったく検出されない。およそ1.8m掘り下げたがその様子に変わりはない。しかし北壁の精査でその理由が判明した（図7）。鎌倉時代に野上八幡神社の荘園を拡大するにあたって、このあたりを造成したときに、A区とB区、特にA区を造成するとき東方から土砂を流し込んだことが明らかになった。そのために北壁の土層は、東から西に斜めに堆積しているのであろう。A区の最下層の土質は青灰色砂礫土であることは所々の精査で確認している。これらのことは、A区で多く出土する土師器小皿と中皿、瓦器碗やB区から多く出土した瓦器碗の示す年代に矛盾しない。これらのことからA区の東方の地点の土層の確認が要請されたが、当時はまだこの周辺の買収が完了していなかったので、これの確認は今後の問題と連絡してA区の調査は終了した。

B区はA区より低く、その差はおよそ0.78mである。B区の土層はA区のそれと大きく異なり、土層を示す線はほぼ水平である。その異なる理由を調べようとしたが、A区とB区のあいだには用水路と里道が通っているので、調査を断念した。B区の基本的な土層は

第1層　耕作土
第2層　床　土
第3層　淡茶褐色砂質土
第4層　黄褐色砂質土
第5層　淡青灰色砂質土
第6層　灰黄色砂質土
第7層　淡茶褐色砂質土
第8層　地　山（淡黄褐色砂質土）

となっている。第7層の淡茶褐色砂質土が、いわゆる遺物包含層で、B区では瓦器片や土師器片が多く含まれていた。地山面の高低は、西高東低となっており、その差は31cmである。といっても遺物包含層がはっきりしているのは、東半の低い部分であって、西半の高い部分では、部分的に認められるに過ぎない。




1 耕作土
2 床　土
3 灰黄色砂質土
4 暗黒灰色砂質土(礫多・瓦器椀・土師器皿片多含)
5 淡灰褐色砂質土(礫少)
6 暗黄褐色砂質土(礫多)
7 暗黄褐色砂質土(礫少)
8 黒灰色粘質土
9 青灰色砂礫層
10 明黄褐色砂質土(濃黄色土ブロック混入)
11 暗黄褐色砂質土(礫ナシ・土器片多−瓦器・土師器・陶器)

1 耕作土
2 床　土
3 淡茶褐色砂質土
4 黄褐色砂質土
5 青灰色砂質土
6 茶褐色砂質土(瓦器椀・土師器小皿片含)
7 淡青灰色砂質土
8 灰黄色砂質土
9 淡茶褐色砂質土(径1cm内外礫含)
10 山土埋土
11 青灰色砂礫層
12 地山

図7　A区北壁断面図とB区平面図・断面図

B区では、弥生時代・古墳時代の遺物包含層や遺構・遺物はまったく検出されてはいない。検出されている主な遺構は、土坑SK01と掘立柱建物跡SB01と柱穴である。土坑SK01の南側には、3基の土坑と1本の溝が切りあっている。

**土坑　SK01　（図8、PL6～9）**

東西4.99m、南北3.95m、深さ0.19mを測る大きな土坑である。深さは、現在0.19mを測るが、上部を削られているのであろう。もとは、もっと深かったと考えられる。土坑の内部は、大小さまざまな、不規則な形の割り石が散布していた。割り石の下や石の間には瓦器片や土師器片、捏鉢片が挟み込まれていた。この土坑の南側はB区では最も高く、標高は51.04mである。この部分に土坑SK01を切るような形で土坑SK02とSK03がある。

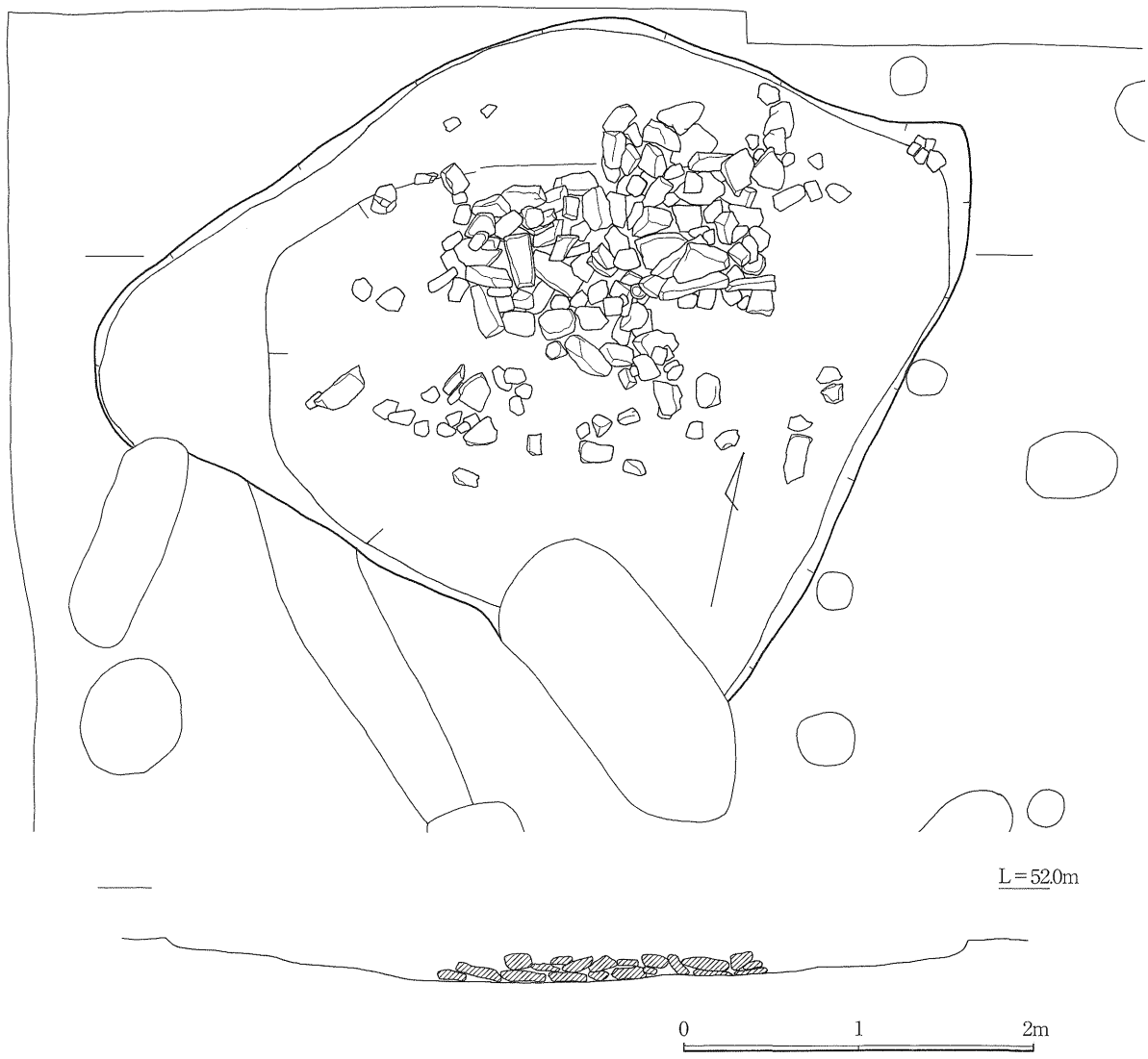



図8　B区土坑SK01　平面図・断面図

掘立柱建物跡　SB01　（図９、PL８・９）

土坑SK01の東側で検出された、ほぼ南北に立つ掘立柱建物跡である。南端部は調査区外に延長するため規模は想定であるが、桁行３間　梁間２間の建物跡で、柱間寸法はおよそ2.15～2.24ｍである。柱穴は円形で、深さは10.2cm～16.7cmである。建物跡の西北、北から２つ目の柱穴（SP02）から、細かい暗茶褐色砂質土に混入して完全な形の瓦器碗（33）が出土した。

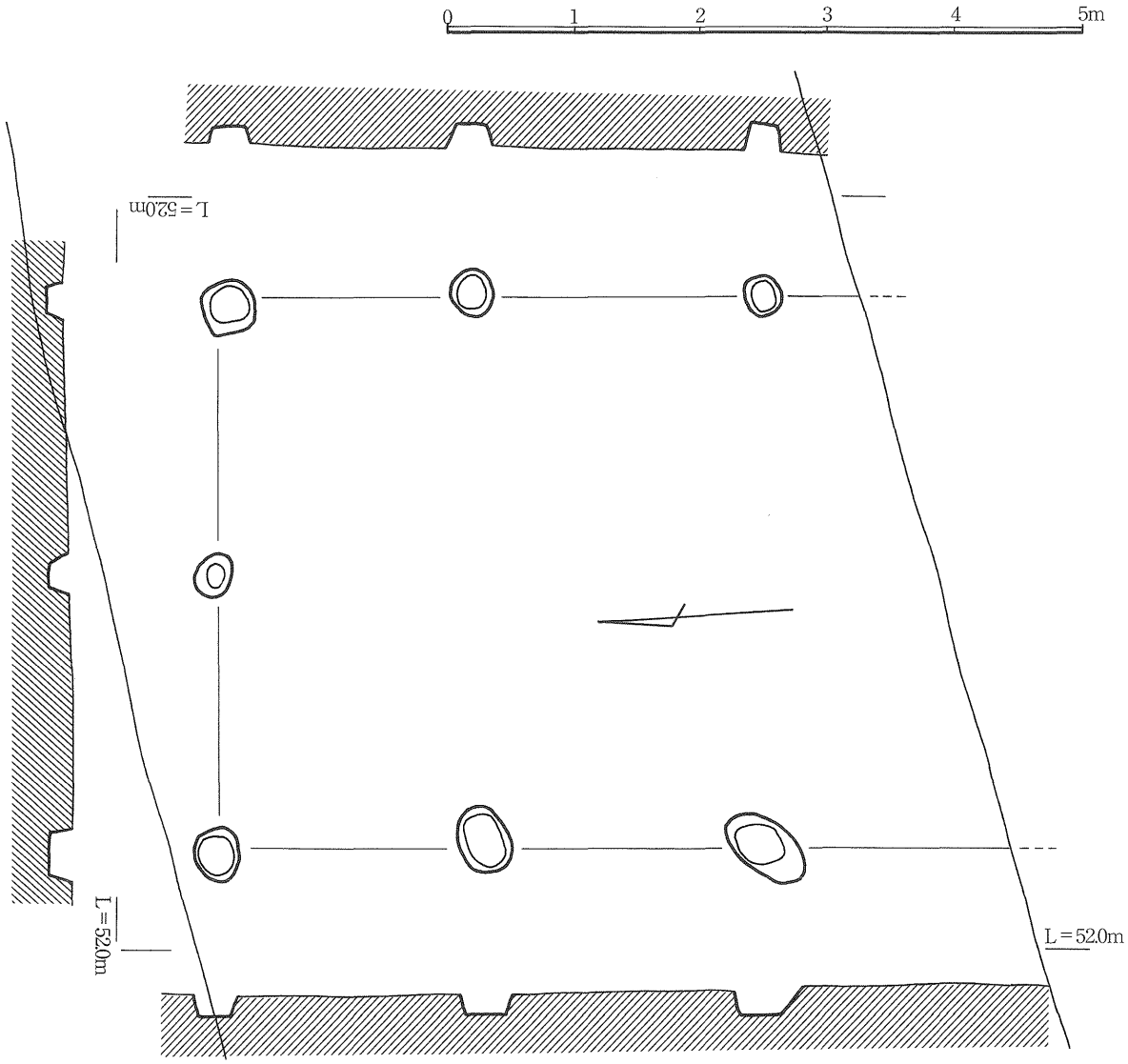



図９　Ｂ区掘立柱建物跡SB01

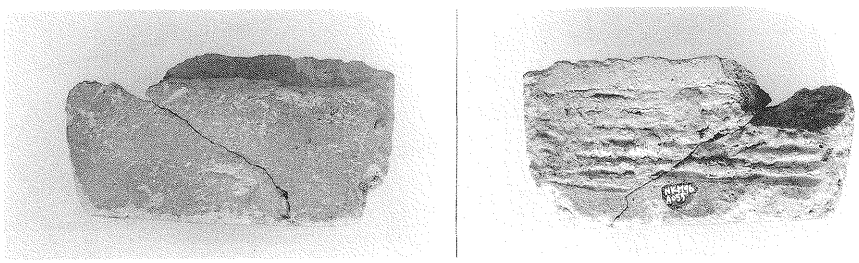
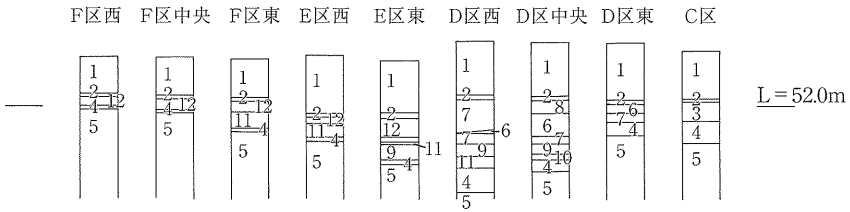


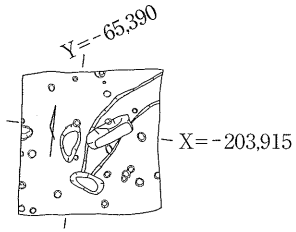
図10　Ｂ区出土軒平瓦の顎部

図11　海南市文化財調査研究会　第２次調査地区割図

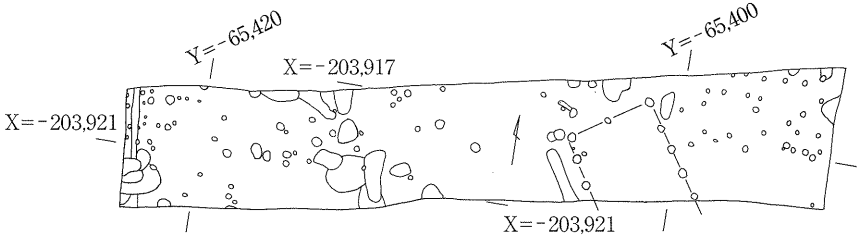



1　各調査区基本土層図

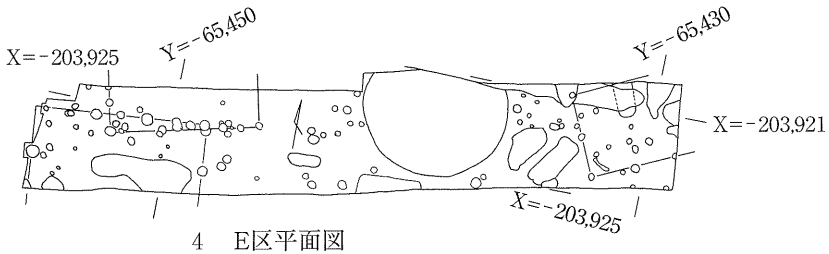
1　耕作土
2　床　土
3　黄褐色砂質土
4　暗茶褐色砂質土
5　明黄灰色砂質土（地山）
6　灰褐色砂質土
7　明黄褐色砂質土
8　明茶褐色砂質土
9　灰黄色砂質土
10　黄灰色砂質土
11　黄褐色砂質土
12　灰色砂質土



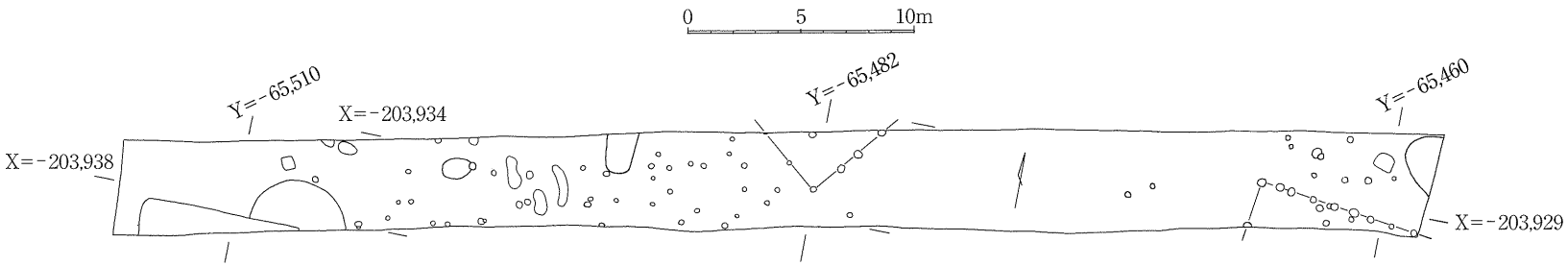

2　C区平面図




3　D区平面図




4　E区平面図




5　F区平面図

図12　第２次調査　基本土層と各地区平面図

## 第４節　第２次調査（C～F区）（図11～26、PL10～24）

旧野上鉄道線路跡の南側への拡張工事に先立つ発掘調査が、A・B区で完了した年の暮れ、残っていた４枚の水田の買収が完了した。そのためこの水田全体に、幅1.3mの試掘のためのトレンチをいれた。その結果、土坑４基、溝２条、竪穴住居跡１基、柱穴23個が検出された。このことによって残っていた４枚の水田すべてを発掘調査することに決定した。東から順次C・D・E・F区と呼称した（図11）。

**C区**は、A区～F区の調査区では一番小さく、一辺がおよそ６mの四角形である。この区の基本的な土層は、第１層　耕作土

第２層　床　土

第３層　黄褐色砂質土

第４層　暗茶褐色砂質土

第５層　地　山（淡黄褐色砂質土）

である。第４層の暗茶褐色砂質土が遺物包含層である。A・B区と大きく異なる点は、この地区からF区までは、中世の遺物が少なくなって、弥生時代の遺物と遺構の量が多くなることである。B区の中世遺構検出面は、標高51.04mであったが、C区での遺構検出面の標高は51.82mである。この約0.8mの高さの違いが各時代の遺構・遺物あるなしを意味するのではなく、これらの土地のそれぞれの利用の仕方に問題があったのであろう。

C区からは、弥生時代の土坑、溝と26個の柱穴が検出されている。しかし弥生時代の石器はまったく出土していないし、わずかに出土している弥生時代の土器も細片である。

**土坑SK06　（図13、PL12）**

C区のほぼ中央部で検出された細長い形の土坑である。溝SD02を切っている。その規模は、長さ2.09m、幅0.85m、深さ0.69mを計る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は暗茶渇色砂質土である。遺物は、堆積土中から弥生土器が出土しているが、細片のため図示することができなかった。

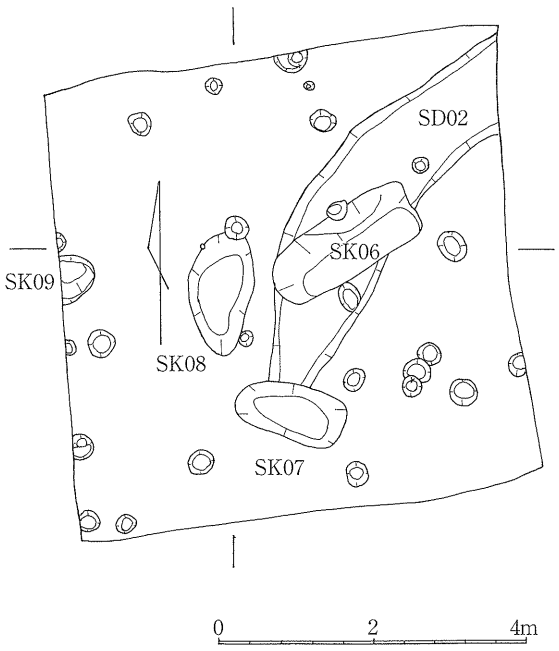



図13　C区平面図

土坑SK07　(図13、PL12)

C区の南端に近く検出された楕円形の土坑である。溝SD02の南端を切っている。長径1.5m、短径0.72m、深さ0.66mを測る。堆積土は暗茶褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

土坑SK08　(図13、PL12)

C区のほぼ中央部、土坑SK06の西で検出した土坑である。南北に細長く、長さ1.68m、幅0.84m、深さ0.37mを測り、断面形は逆台形である。堆積土は暗茶褐色砂礫土である。

土坑SK09　(図13、PL12)

C区の西壁の北よりで検出された土坑である。西半分は調査区外へ延びているが、検出長0.49m、幅0.69mを測る。堆積土は2層に分けられる。上層は砂礫を含んだ暗茶褐色砂質土で遺物は少なく弥生土器の小片である。下層は砂礫のない、目の細かいきれいな暗茶褐色砂質土である。この下層からは遺物は出土しなかった。

溝SD02　(図13、PL12)

C区の北東隅から中央部南よりに流れる浅い溝である。東端は調査区外へ延びているし、南端は土坑SK07に切られているので、全形は把握できないが、検出したその規模は、長さ約5m、幅1.60m、深さは浅く0.16mを測る。堆積土は暗茶褐色砂質土である。遺物は弥生土器の細片が出土した。

D区は、長さ30.6m、幅5.9mの元水田である。D区の基本的な土層は、中央部では次のとおりである。　第1層　耕作土

第2層　床　土

第3層　明茶褐色砂質土

第4層　灰褐色砂質土

第5層　明黄褐色砂質土

第6層　灰黄色砂質土

第7層　茶褐色砂質土

第8層　地　山(淡黄褐色砂質土)

第4層と第6層に中世の瓦器や土師器、青磁の碗や小皿の細片が含まれる。第6層の灰黄色砂質土が中世の包含層であると考えられる。この層からの出土遺物に土師器小皿(91・92)、瓦器小皿(93)、青白磁皿(94)、白磁小皿(95)、擂鉢(96)等がある。中世の遺構は検出されなかった。地山面の標高は、51.65mである。

土坑SK31　(図14、PL14)

D区の東壁で検出された土坑である。東方の調査区外へ延びているために土坑の形は三角形を呈している。検出の長さ0.67m、幅1.24m、深さ0.29mを測る。堆積土は暗茶褐色砂質土であ

る。堆積土中から弥生土器の細片が出土した。

**土坑SK32　（図14、PL15）**

D区の東壁中央部で検出した土坑で、さらに東方の調査区外へ延びているために不定形な形状を呈している。検出した長さ1.61m、幅1.27m、深さ0.22mである。堆積土はわずかに砂礫を含む淡茶褐色砂質土である。堆積土中から弥生土器の細片が出土している。

**土坑SK33　（図14、PL15）**

D区の北東隅で検出した土坑である。北方の調査区外に延びているために、形状ははっきりとしないが規模は小さく、長さ0.46m、幅0.45m、深さ0.19mを測る。柱穴SP254に切られている。

**土坑SK34　（図14、PL15）**

D区の北東部で検出した土坑である。北側のほとんどは調査区外へ延びているが、半円形の形状を呈する。検出長0.22m、幅0.45m、深さ0.29mを測る。堆積土中から弥生土器の細片が出土している。

**土坑SK35　（図14・19、PL14・15）**

D区の中央東で検出された土坑で南北に長い形状である。長さ1.17m、幅0.47m、深さ0.22mを測る。堆積土は灰茶褐色砂質土である。堆積土中から弥生土器（81）が出土している。

**土坑SK36　（図14、PL14・15）**

D区の中央東寄り、土坑SK35の西に、北壁に接して検出された土坑である。北側のほとんどが調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、西側の掘り込みは柱穴になるのかもしれない。深さは、西側で0.27m、東側で0.17mを測る。堆積土は分層できなかった。遺物はまったく出土しなかった。

**土坑SK41　（図14、PL14・15）**

D区の中央寄りに、土坑SK41から土坑SK50までの10基の土坑が集中している。SK40はそうした土坑群の南壁に沿って検出された。ほとんどが南側の調査区外に延びるため、現在の形状は三角形を呈している。長さ0.53m、幅0.92m、深さ0.586mを測る。堆積土は黒褐色砂質土でわずかに礫を混入する。堆積土中から弥生土器の細片が出土している。

**土坑SK42　（図14、PL14・15）**

土坑SK41の北西で検出された土坑である。長さ0.81m、幅0.51m、深さ0.336mを測る。堆積土は、細礫を含む暗茶褐色砂質土である。遺物は、堆積土中から弥生土器の細片が出土している。

**土坑SK43　（図14、PL14・15）**

土坑SK41の西で検出された土坑である。他の遺構との重複関係はSK44とSK49に、大きく切られて構築されている。平面形は不明であるが溝状である。幅1.11m、深さ7㎝を測る。堆積土は暗茶褐色砂質土である。遺物は全く出土しなかった。

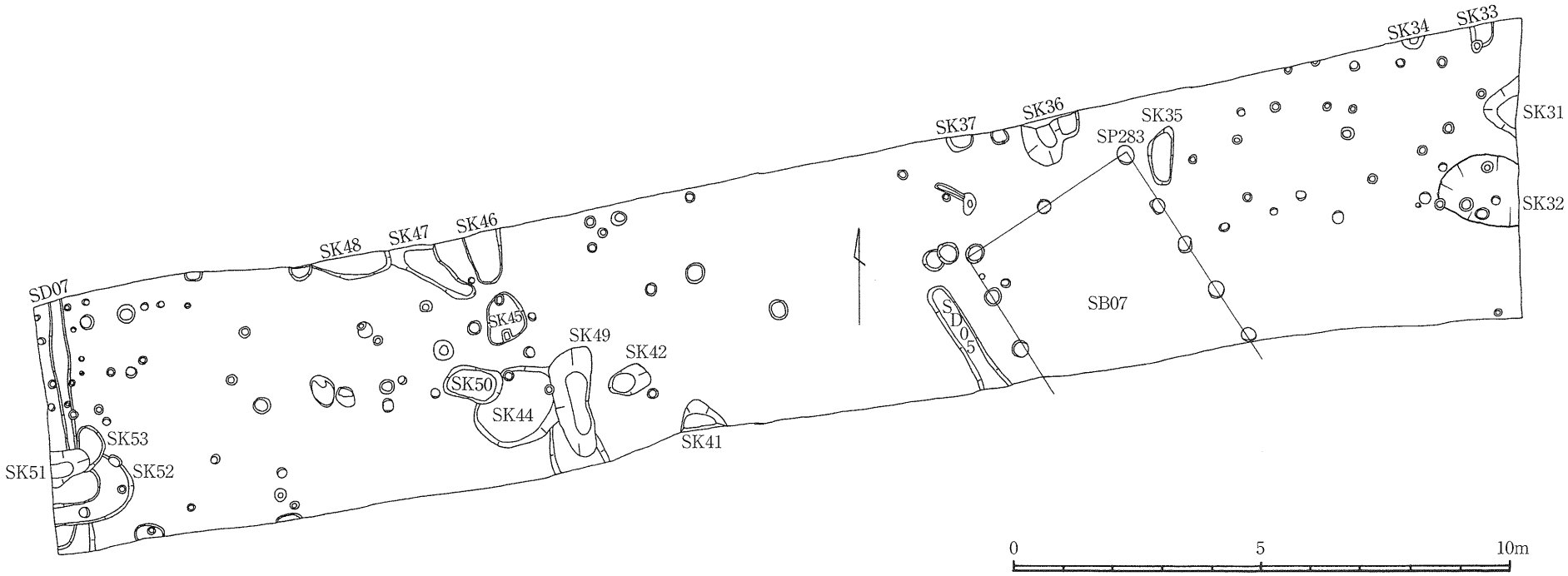

SK34
SK33
SK31
SK32
SK37
SK36
SK35
SP283
SB07
SD05
SD07
SK48
SK47
SK46
SK45
SK49
SK42
SK50
SK44
SK41
SK53
SK51
SK52
0
5
10m

図14　D区平面図

土坑SK44　(図14、PL14・15)

土坑SK43を切り、SK49とSK50に切られて構築されている土坑である。ほぼ円形に近い形を呈し、径1.54m、深さ19.2cmを測る。堆積土は礫を含む淡黒褐色砂質土である。堆積土中から弥生土器の細片が出土した。

土坑SK45　(図14、PL14・15)

土坑SK44の北側で検出された土坑である。他の遺構との重複関係はない。平面形は不整形を呈し、長さ1.01m、幅0.79m、深さは3.5cmと浅い。堆積土は暗茶褐色砂質土で、遺物は全く出土しなかった。

土坑SK46　(図14、PL14・15)

土坑SK45の北側で検出された土坑である。北壁に接しており、大部分が北方の調査区外へ延びているため全体の平面形は不明である。検出長さ1.03m、幅0.69m、深さは6cmと浅い。堆積土は暗茶褐色砂質土で、遺物は全く出土しなかった。

土坑SK47　(図14、PL14・15)

土坑SK46の西にあってSK48に切られて構築されている土坑である。大部分が北方の調査区外へ延びている。規模は長さ1.75m、幅約1m、深さ50.5cmを測る。堆積土は暗茶褐色砂質土で遺物は全く出土しなかった。

土坑SK48　(図14、PL14・15)

土坑SK47を切って構築された土坑である。大部分が北方の調査区外へ延びている。規模は長さ1.59m、幅0.37m、深さ16cmを測る。遺物は堆積土中から出土した3片の弥生土器と2片のサヌカイト剥片である。

土坑SK49　(図14、PL14・15)

土坑SK43とSK44を切って構築された土坑である。平面形は南北に細長い形状で、長さ2.15m、幅0.67m、深さ0.56mを測る。堆積土は黒褐色砂質土である。遺物は、土坑底面や堆積土中から弥生土器の細片が出土した。

土坑SK50　(図14、PL14・15)

土坑SK44を切って構築された土坑である。平面形は長方形を呈し、長さ1.15m、幅0.63m、深さ21cmを測る。堆積土は礫混入の灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

土坑SK51　(図14、PL14・15)

D区の西南隅には、3基の土坑がそれぞれ切りあって構築されている。この土坑はSK53を切って構築された土坑である。そのほとんどが西方の調査区外に延びている。検出長0.78m、幅0.69m、深さ0.481mを測る。堆積土は黒褐色弱粘質土である。遺物は堆積土中から弥生土器の細片が出土した。

**土坑SK52　（図14、PL14・15）**

土坑SK53に切られて構築された土坑である。平面形は、幅は一定で細長く先が曲がっている形で、あるいは溝になるのかもしれない。幅0.67m、長さ2.1mで、深さは6.1cmと浅い。堆積土は細礫の多い灰褐色弱粘質土である。遺物は全く出土しなかった。

**土坑SK53　（図14、PL14・15）**

土坑SK52を切り、SK51に切られて構築された土坑である。平面形は歪んだ楕円形を呈し、長径0.93m、短径0.52m、深さ9.7cmを測る。堆積土は暗茶褐色砂質土で、遺物は全く出土しなかった。

**溝SD05　（図14、PL14・15）**

D区の中央部東より、掘立柱建物跡SB07の北西に位置している。平面形は北から南に一直線に延び、南方の調査区外に延びている。その規模は、長さ2.47m、幅0.47m、深さ14.5cmを測る。堆積土は暗茶褐色砂質土で、遺物は弥生土器の壷片（83）が出土している。この遺構はSB07にともなう雨落溝とも考えられる。

**溝SD07　（図14・19、PL14・15）**

D区の西端で検出した溝である。他の遺構との重複関係は土坑SK50・51・53に切られている。平面形はD区の北端から南端に直線的に延びている。その規模は長さ4.98m、幅19～39cm、深さ5.8cmを測る。堆積土は灰褐色砂質土である。堆積土中に弥生土器の細片が出土した。

**掘立柱建物跡SB07　（図14・20・23、PL14・15）**

D区の中央東寄りで検出された建物跡の遺構である。遺構は南方の調査区外に延びているので完全な形は不明であるが、おそらく桁行5間、梁間2間の南北棟の建物跡であろう。その規模は、東側の柱間の距離は、（1.2m）－（0.93m）－（1.1m）－（1.12m）、北側の柱間の距離は、（1.83m）－（1.95m）を測る。柱掘方はすべて円形である。建物跡の西側には、この建物に付属すると考えられる雨落溝（溝SD05）があった。この建物跡の北東の柱穴（SP283）から弥生時代の甕の口縁部（82）が出土している。なお土坑SK35はこの建物跡に関連するのかもしれない。

**E区**は、D区よりもわずかに高くなっているし、ベースの土質も大小の礫を含まず、きれいな明るい黄灰色土となる。地山面は、西方に行くにしたがって、わずかであるが上昇する。そして、西端近くでは中世の遺物包含層は消滅する。E区の大きさは長さ25.8m、幅4.37mである。
この区の基本的な土層は次のとおりである。

| 東端 | | 西端 |
|---|---|---|
| 耕作土 | 第1層 | 耕作土 |
| 床　土 | 第2層 | 床　土 |
| 灰色砂質土 | 第3層 | 灰色砂質土 |
| 黄褐色砂質土 | 第4層 | 黄褐色砂質土 |
| 暗灰黄色砂質土 | 第5層 | 暗茶褐色砂質土 |
| 暗茶褐色砂質土 | 第6層 | 黄灰色砂質土（地山） |
| 黄灰色砂質土（地山） | 第7層 | |

暗灰黄色砂質土が中世土器を含む包含層である。この層から弥生時代の土器、中世瓦器、須恵器、青磁碗の破片が出土している。暗茶褐色砂質土は弥生時代の遺物包含層で、この層からは弥生時代中期の土器片とサヌカイトの細片が多く出土する。地山面の標高は、東端で51.70m、西端で51.81mである。検出された遺構には、掘立柱建物跡は3棟と竪穴住居跡が3棟と多くの柱穴がある。いずれも弥生時代中期前半のものである。とくに竪穴住居跡（SH01）では、住居の床面の凹凸をならすために貼床をしているが、その貼床にしている土や床面から多くのサヌカイトの細片と石鏃、石錐が出土している。いずれも未製品や完成品がある。また下層で検出された竪穴住居跡（SH05）は中央部に炉跡をもつ小さな小判形の住居跡である。

**土坑SK10　（図15・17、PL16・17・20）**

E区の東北端で検出した土坑である。中央部は撹乱でなくなっており、大部分が北方の調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、平面形は細長い四角形をしていたと考えられる。規模は長さ1.48m、幅0.78m、深さ13cmを測る。堆積土は2層に分かれる。西北端の一部は灰黄色砂質土で、ほとんどは灰黄茶褐色砂質土で、ここからは多くの弥生土器（61）～（65）が出土している。サヌカイトの石鏃（160）1点出土している。

**土坑SK12　（図15・17、PL16・21）**

E区の東方で検出した土坑である。平面形は長四角形を呈している。規模は長さ2.34m、幅1m、深さ0.394mを測る。断面形は逆台形である、堆積土は暗茶褐色砂質土で、弥生土器片（66）とサヌカイト材の石鏃（161～163）が含まれている。

**土坑SK15　（図15、PL16・17・21）**

E区の東方、土坑SK12の西隣で検出した土坑である。平面形は歪んだ楕円形を呈している。規模は長径2.01m、短径1.14m、深さは0.681mを測る。堆積土は茶褐色砂質土で、サヌカイト材の石鏃（164）が1点出土した。

**土坑SK18　（図15・17、PL16・19・21）**

E区の西端近くで検出した土坑である。平面は不整形で東西に長い。南側は調査区外へ延びて

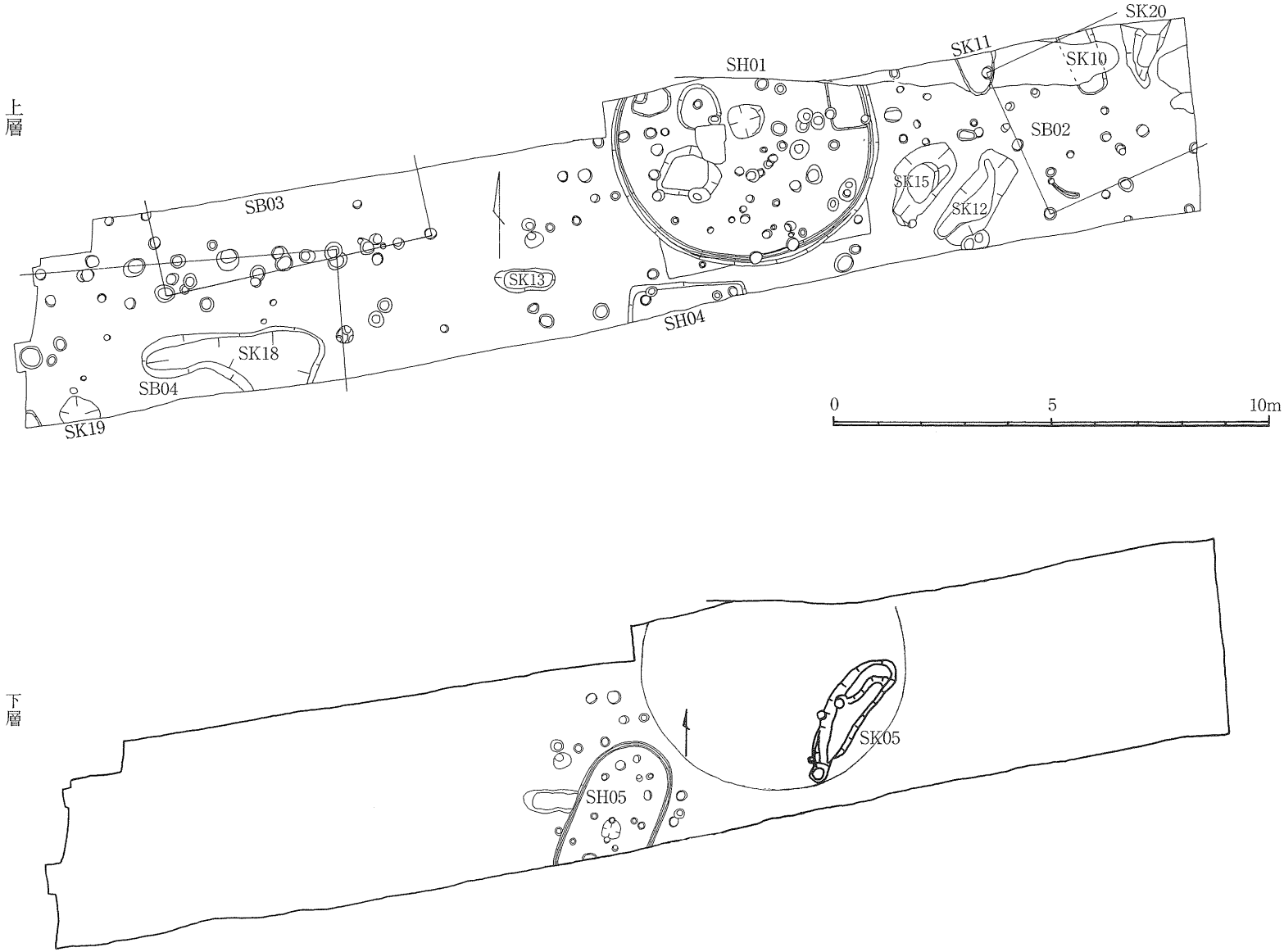

上層
SK20
SK11
SH01
SK10
SB02
SB03
SK15
SK12
SK13
SH04
SK18
SB04
SK19
0
5
10m
下層
SK05
SH05

図15　E区平面図

いる。規模は東西の長さ4.27m、南北の検出長1.39m、深さ0.38mを測る。坑底は西から東に緩く傾斜している。坑底には握手大の丸石が散在していた。それに混在して弥生時代中期の土器（67）～（73）が出土した。堆積土は東方の大部分は暗褐色砂質土であるが、西方の浅いところは3層に分かれる。上層の一部は黄褐色砂質土、ほとんどの中層は暗茶褐色砂質土、下層の両端は灰茶褐色砂質土である。堆積土中からも弥生土器やサヌカイト材の石鏃（165～168）4点と石錐（169・170）2点が出土している。

**土坑SK19　（図15・17・22、PL16・19・21）**

土坑SK18の西方にあって、南壁に接して検出された土坑である。南側の調査区外へ延びているが、平面形は楕円形であろう。長径0.93m、検出短径0.56m、深さ13.2cmを測る。堆積土は暗茶褐色砂質土である。坑底に接して中期の弥生土器（74・75）が出土した。

**土坑SK20　（図15、PL16）**

E区の北東隅で検出した土坑である。北側の調査区外へ延びているので、全形は不明であるが、南北に長い三角形の形状を呈する。南北長さ1.42m、東西長さ1.13m、深さ0.887mを測る。堆積土は2層に分けられる。上層は暗茶褐色砂質土で遺物は出土しない。下層は暗茶褐色砂質土に黄色土がブロック状に混入している土層で、弥生土器片やサヌカイト剥片が出土した。

**土坑SK05　（図15）**

E区の竪穴住居跡SH01の下層で検出した土坑である。SH01では床面の凹凸をならすために貼床をしているが、その貼床を取り除いたさいに検出した。平面形は細長い、歪んだ楕円形を呈する。規模は長径3.23m、短径0.93m、深さ53.1cmを測る。堆積土は濃茶褐色砂質土である。堆積土中から弥生土器片やサヌカイト剥片が出土している。坑底面は凹凸がある。南端と中央部に、それぞれ1個ずつの円形の柱穴を持っている。

**溝SD04　（図15・17、PL17・20）**

E区の西端近くで検出した溝である。他の遺構との重複関係は4個の柱穴である。平面形はE区の北端から南端に直線的に延びている。規模は長さ4.30m、幅0.60～0.63m、深さ5.4cmを測る。堆積土は淡灰褐色砂質土である。堆積土中に弥生土器の細片とサヌカイト剥片が出土した。

**掘立柱建物跡SB02　（図15・18、PL16）**

E区の東端で検出した建物跡である。東側と北側の調査区外に延びているので全体の形状は不明であるが、遺構は桁行5間×梁間2間の東西棟の建物であろう。その規模は、西側の梁間柱列の距離は、（1.65m）－（1.83m）、南側のそれは（1.43m）－（1.78m）－（x）－を測る。柱の掘方はすべて円形である。

**掘立柱建物跡SB03　（図15・18、PL16・19）**

E区の西北端で検出した建物跡である。このあたりは柱穴がたてこんでいるし、北側の調査区

外に延びているので、全体の形状は不明であるが、桁行3間、梁間2間の建物跡である。

**掘立柱建物跡SB04　(図15・18、PL16・19)**

E区の西南端で検出した建物跡である。南側と西側の調査区外に延びているので、全体の形状は不明であるが、桁行5間、梁間2間の建物跡である。

**竪穴住居跡SH01　(図15・19・23・24・25、PL16・17)**

E区の中央部東側で検出した住居跡である。北側は調査区外にあり、東の一部が撹乱で破壊されているが、平面形は円形を呈すると考えられる。直径6.11m、周壁と周溝は、すべてで残っている。周壁の高さは2.8～7.3cmである。周溝は幅11～13cm、深さ4.5～4.7cmを測る。中央から西の部分に径0.83～1.36m、深さ12.7～30.1cmの4基の土坑がある。堆積土はいずれも炭や黒灰の混入した黒褐色砂質土である。おそらく炉跡であろう。こうした炉跡や柱穴の配置から、床面を拡張することなしに、何度か建て替えがあったと考えられる。住居跡の東壁際にベッド状の遺構が検出された。北側は撹乱されているので長さは不明であるが、残っている部分の長さは0.95m、幅0.75m、高さ3.8cmを測る。住居跡の床面の凹凸をならすために、また建て替えた後の床面の整備のため、貼り床をしている。そのために床面は炭片や黒灰混じりの黒褐色土（ブロック状に黄色土が混入）に覆われていた。その厚さ2～3cmの貼床を除去すると土坑SK05が現れた。覆土や床面、検出した土坑・柱穴から弥生土器（85・86)、紡錘車（84)、凹石（97)、石鏃（101～149)、石錐（150～156）が出土している。石鏃には未製品や完成品がある。サヌカイト剥片のとくに多いことは石鏃を製作していたのかもしれない（註1)。

**竪穴住居跡SH04　(図15・19、PL16・19)**

E区の竪穴住居跡SH01の南側で、一部分が検出された四角形の住居跡である。ほとんどが調査区外にあるので全体の形は不明であるが、一辺2.73mの四角形であろう。周壁の高さは7cmで、周溝はない。堆積土は、茶褐色砂質土である。遺物はサヌカイト剥片のみである。

**竪穴住居跡SH05　(図15・19・23、PL16・18)**

E区の竪穴住居跡SH01とSH04の西の下層で検出した住居跡である。SH01とその西方を、およそ4～6cm下げたところで検出した。その一部が南側の調査区外へ延びているが、平面形は小判型の住居跡である。規模は検出長さ2.73m、短径1.99mである。長径は4m以上あったと考えられる。幅10～12cm、深さ5.7cmの溝で周囲を画している。周壁らしいものは認められなかった。建物跡のほぼ中央部に円形の炉跡を設け、その南北両端に柱穴をうがっている。柱穴の深さは6.1cmと8.3cmである。中央の炉跡の断面形は皿状で深さは5.9cmである。炉の堆積土は2層に分けられる。上層は赤焼け土に黒炭灰がブロック状に混入している層で、下層は黄褐色土に黒炭灰がブロック状に混入している層である。建物跡の堆積土は茶褐色砂質土である。遺物は建物跡床面や中央炉跡のどちらからもサヌカイト剥片と堆積土中で弥生土器（90）が出土

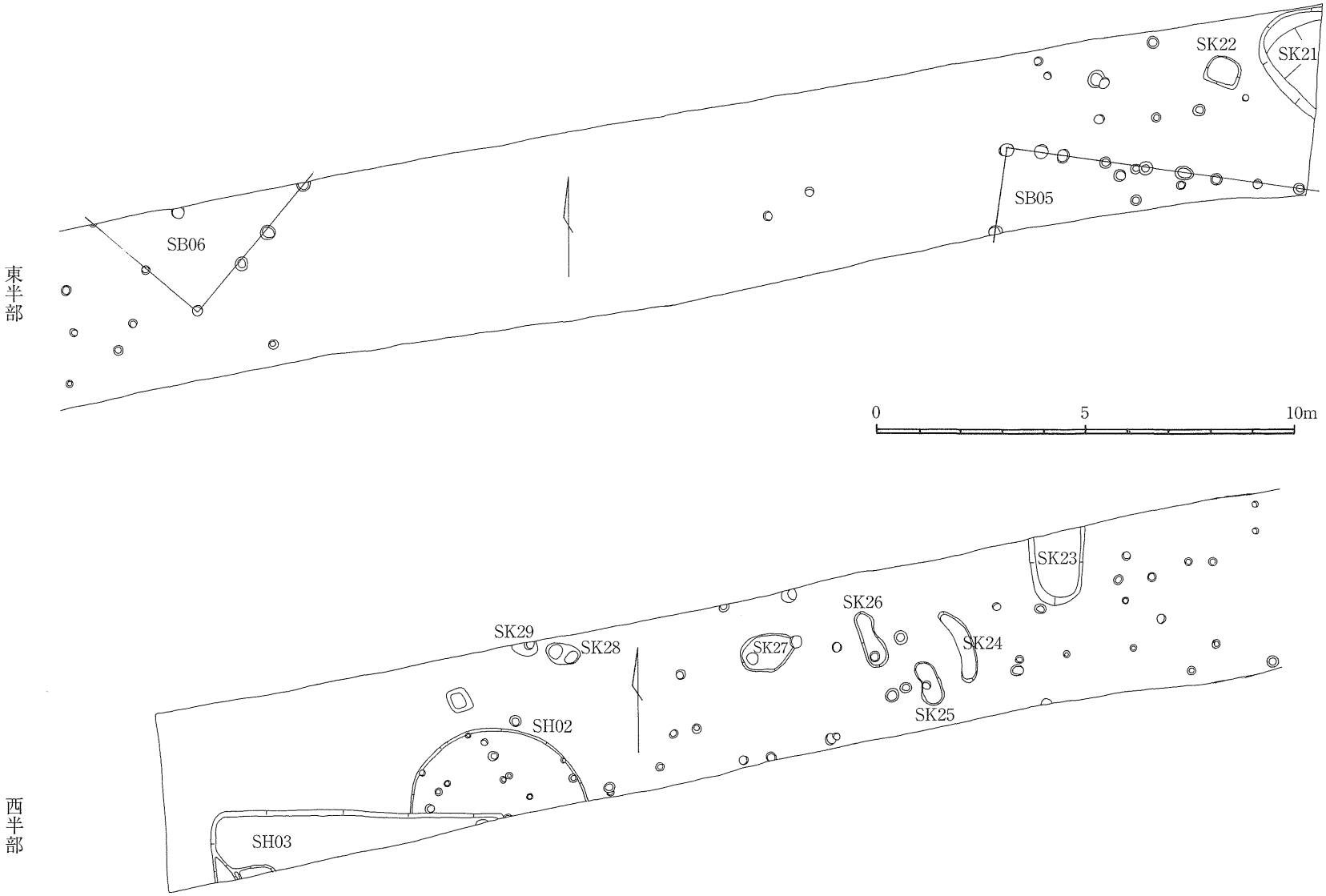

東半部
SB06
SB05
SK22
SK21
0
5
10m
西半部
SK29
SK28
SK27
SK26
SK24
SK23
SK25
SH02
SH03

図16　F区平面図

している。周溝のあるのを問題にしなければ『松菊里型』住居である（註２）。

**F区**では中世の遺物包含層や遺構はみられず、弥生時代のものだけとなる。地山面は西方へ行くにしたがって、わずかであるが高くなっている。地山面で土坑９基、掘立柱建物跡を２棟、竪穴住居跡を２棟検出している。柱穴は少なくなる。円形の竪穴住居跡SH02は火災にあっており、黒焦げになった建築材が散布していた。主柱が見られないところから廃棄家屋の焼却跡かもしれない。F区の大きさは長さ57.8m、幅4.28mであり、その基本的な土層図は次の通りである。

| 東端 | | 西端 |
|---|---|---|
| 耕作土 | 第１層 | 耕作土 |
| 床　土 | 第２層 | 床　土 |
| 灰色砂質土 | 第３層 | 灰色砂質土 |
| 黄褐色砂質土 | 第４層 | 暗茶褐色砂質土 |
| 暗茶褐色砂質土 | 第５層 | 黄灰色砂質土（地山） |
| 黄灰色砂質土（地山） | 第６層 | |

第３層の灰色砂質土は旧耕作土で床上げされていたことが分かる。暗茶褐色砂質土が弥生時代の遺物包含層である。地山面の標高は、東端で51.88m、西端で51.98mである。

**土坑SK21　（図16・17・22、PL22・24）**

F区の東端で検出した土坑である。東方の調査区外に延びるため、平面形は三角形を呈している。規模は南北2.66m、東西1.45m、深さ0.32mを測る。堆積土は２層に分けられる。上層は明茶褐色砂質土であり、下層は暗茶褐色砂質土である。遺物は弥生土器（76・77）サヌカイト剥片で、下層から出土した。

**土坑SK22　（図16・17・23、PL22・24）**

F区の東端近く、土坑SK21の西隣で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形を呈している。その規模は長軸0.45m、短軸0.7m、深さ0.46mを測る。坑底は平らで10～30cmの礫石が散布していた。堆積土は炭混じりの暗茶褐色砂質土である。遺物は堆積土中から弥生土器（78）～（80）が出土している。

**土坑SK23　（図16）**

F区の中央西寄りで検出された土坑である。北側の調査区外に延びている。平面形は隅丸長方形を呈している。本来の規模はあきらかでないが長軸1.74m以上、短軸1.33m、深さ18cmを測る。坑底は平らである。堆積土は灰黒色弱粘質土で、焼土と炭化物が混入している。遺物は全く認められなかった。

**土坑SK27　(図16)**

F区の西方で検出した土坑である。他の遺構との重複関係は柱穴SP222に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径1.36m、短径0.89m、深さ6cmを測る。坑底に円形の柱穴がある。堆積土は暗褐色砂質土である。

**掘立柱建物跡SB05　(図16・18、PL22)**

F区の南東隅で検出した建物跡である。そのほとんどが南側の調査区外へ延びている。遺構は梁間2間の東西棟の建物跡である。

**掘立柱建物跡SB06　(図16・18、PL22)**

F区の中央部で検出した建物跡である。そのほとんどが北側の調査区外へ延びている。遺構は掘立柱建物跡と考えられる。

**竪穴住居跡SH02　(図16・19、PL23・24)**

F区の西端で検出した住居跡である。他の遺構との重複関係は、竪穴住居跡SB03に切られて構築されている。また南側の調査区外へも延びている。平面形は円形を呈する。直径4.25m、周壁の現在高は6cmを測り、周溝は巡らせていない。堆積土は暗茶褐色砂質土である。住居跡の床面に接する部分には焼けた木材がたくさん散材していた。この部分の堆積土は、焼け土・炭・灰が混入した暗茶褐色砂質土で、床面の所々は赤褐色に焼けていた。焼け落ちた木材は、ほとんどは規則正しく並んでいた。しかし主柱が見られないところから廃棄した家屋を焼却した跡であるのかも知れない。中央炉は調査区外にあるため検出できなかった。遺物は、焼けた木材と、弥生土器(87～89)とサヌカイト剥片である。

**竪穴住居跡SH03　(図16・19、PL23)**

F区の西端で検出した住居跡である。他の遺構との重複関係は、竪穴住居跡SH02を切って構築されている。またほとんどは南側の調査区外へ延びている。平面形はほぼ正方形であると考えられる。一辺7mを測り、周溝は巡らせていない。堆積土は2層に分けられる。上層は薄く暗茶褐色砂質土で、下層は茶褐色砂質土に黄色土がブロック状に混入している。遺物は弥生土器の細片である。

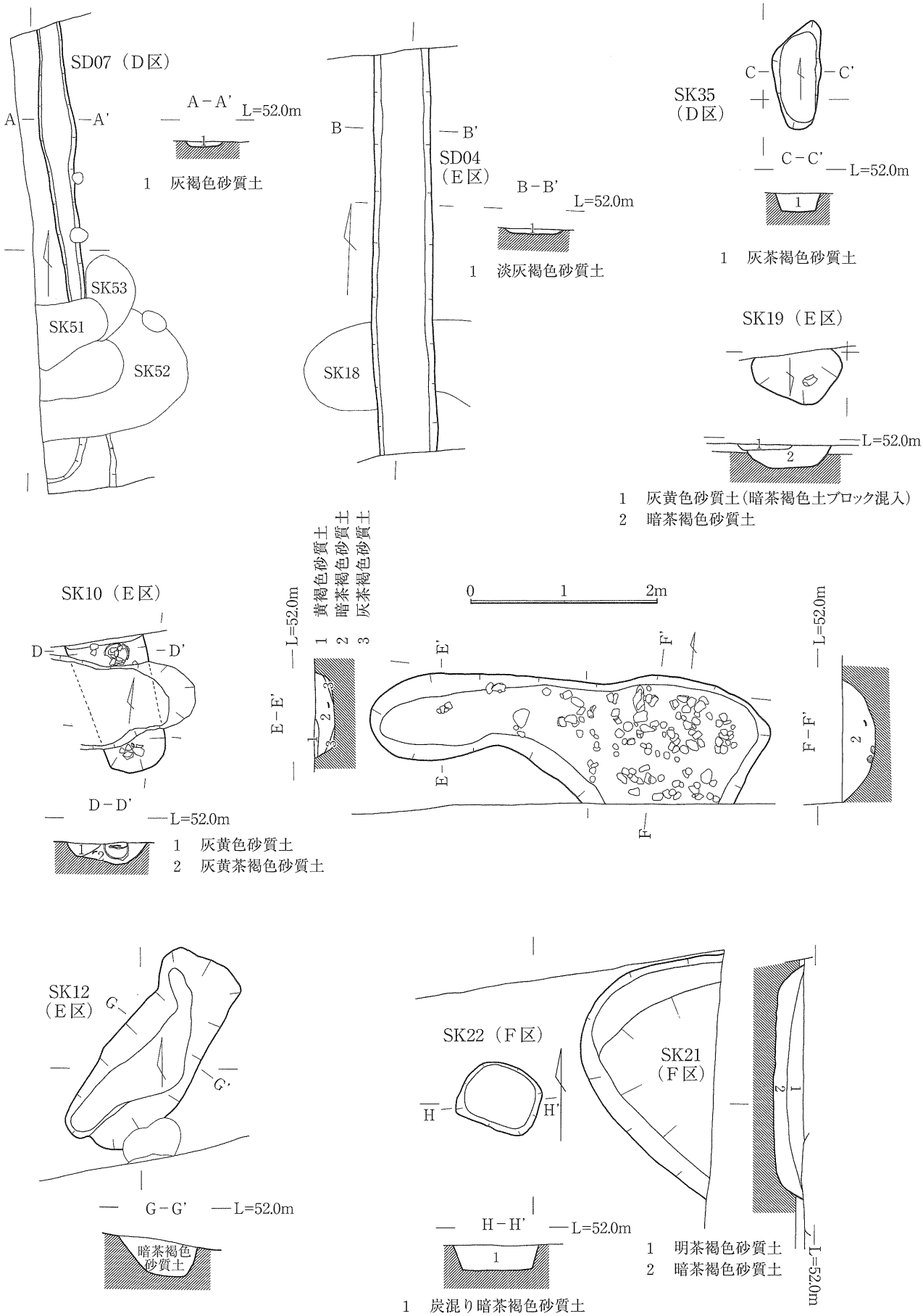



図17　溝（SD04・07）と土坑（SK10・12～22・35）

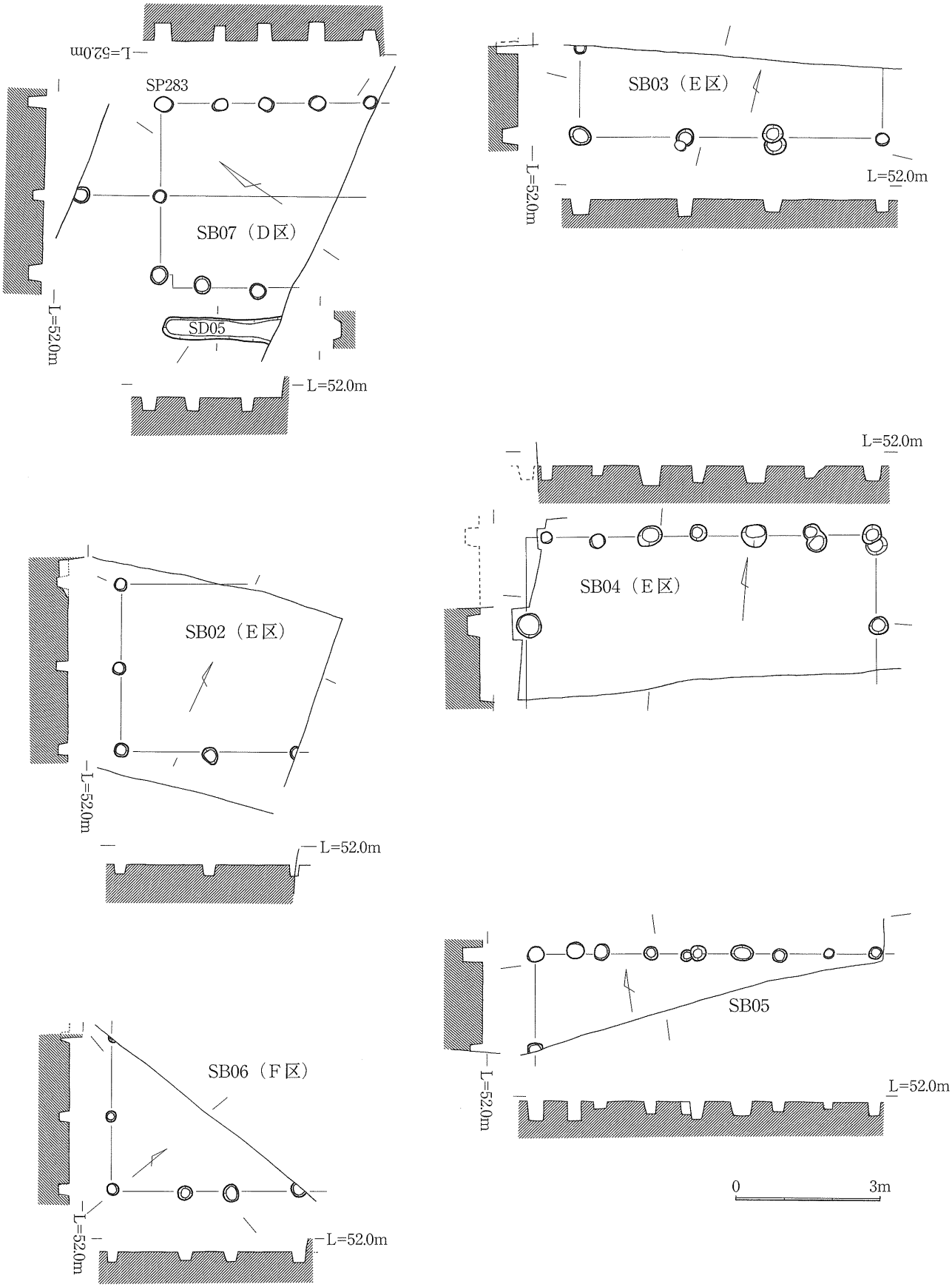



図18　掘立柱建物跡（SB02～07）

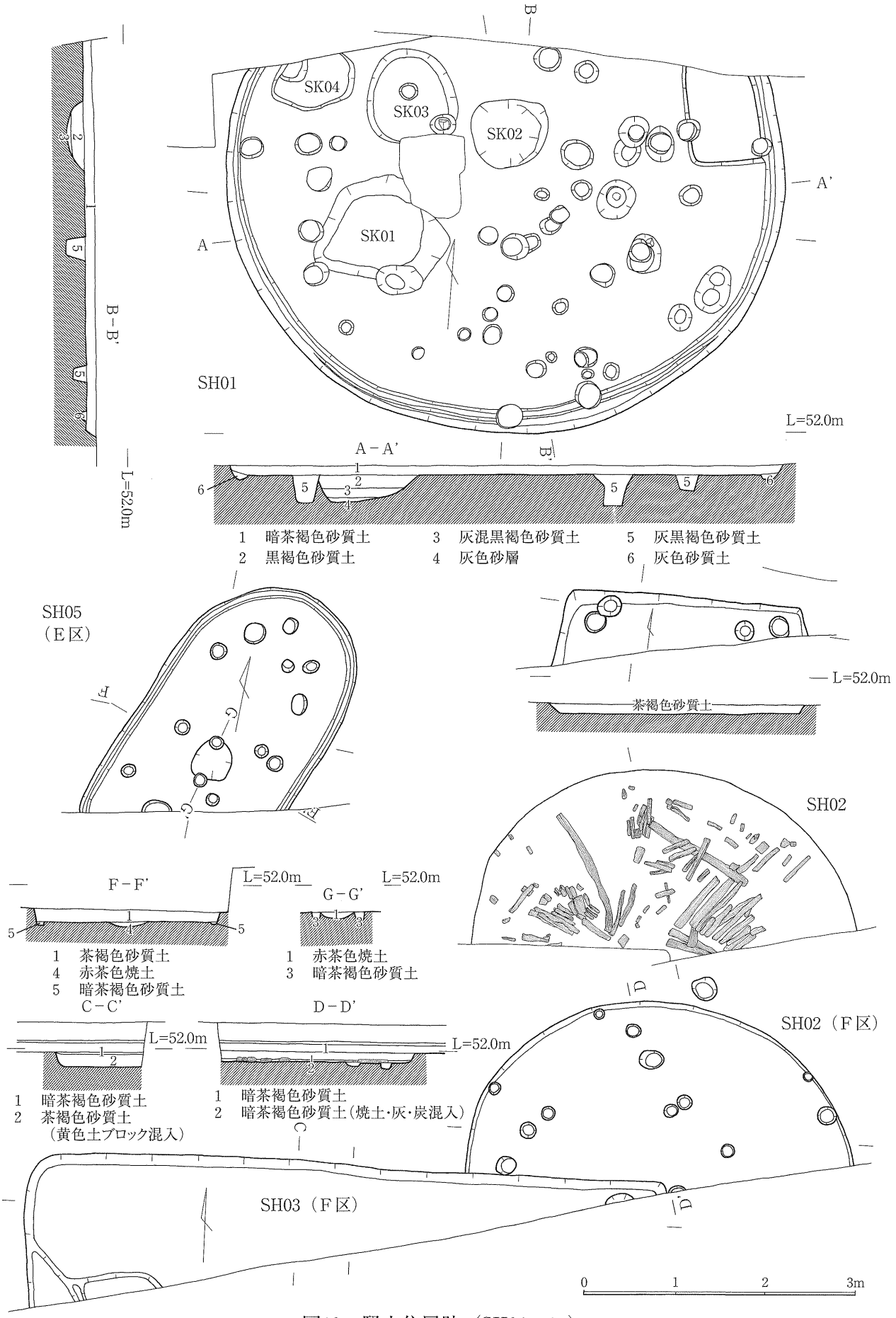



図19　竪穴住居跡（SH01～05）

## 第５節　出土遺物（Ａ～Ｆ区）

今回の調査において、弥生時代と鎌倉～室町時代の遺物が出土した。しかしその数量は、他の遺跡に比べてきわめて少なく、また質にしても特に弥生土器では完形品はなく、外面・内面はすべて剥離・摩滅していた。そのためにほとんどの土器について調整の方法は不明である。鎌倉時代の土師器、瓦器等もわずかながら出土している。以下に図示した遺物を時代順に紹介したい。

### （１）弥生時代の遺物（図22～25、PL26～32）

**E区土坑SK10**からは５点出土している。（61）は壺の肩部である。４条の櫛描直線紋が３帯見られる。外面の調整はナデである。（62）は甕形土器の上半部で口縁端部は肥厚しないものである。復原口径17.6cmを測る。口縁部外面と内面はヨコナデ調整で、外面には煤が付着している。（63）は壺形土器である。直立する筒状の頸部から斜め上方に外反する口縁部を持つ。頸部には２条の低い断面三角形の突帯を持っている。復原口縁径９cmを測る。（64）は甕形土器の底部である。（65）は壺形土器の底部である。いずれも摩滅が著しい。**E区土坑SK12**から（66）壺形土器の口頸部である。ほぼ直立ぎみに外傾する口頸部を持っている。口縁部に３条の凹線紋を巡らせる。口頸部は内側に拡張する。**E区土坑SK18**からは７点の土器が出土している。（67）は壺形土器の肩部である。６本１単位の櫛描直線紋が２条巡っている。（68）はミニチュア土器の鉢である。（69）は壺形土器の口縁部である。復原口径17.8cmを測る。（70）は甕形土器の口縁部である。紀伊型甕である。復原口径25.0cmである、（71・72・73）は土器の底部である。**E区土坑SK19**からは２点出土している。（74）は壺形土器の肩部である。櫛描直線紋を巡らせているが、摩滅が著しい。（75）は底部である。外面はヘラケズリで、内面はナデ調整である。**F区土坑SK21**からは２点出土している。（76）は甕の口縁部であろう。（77）は鉢形土器である。復原口径16.4cmを測る。内外面とも摩滅のため調整不明であるが、一部外面にナデ調整が残っている。**F区土坑SK22**からは３点出土している。（78）は壺形土器の口縁部である。復原口径16.3cmを測る。摩滅が著しく調整は不明であるが、口縁部外面にヨコナデ調整が残っている。（79）は甕形土器の口縁部である。‘く’の字形に口縁部が外反するものである。（80）は鉢形土器の口縁部である。復原口径は18.7cmを測る。**D区土坑SK35**からは土器の底部（81）のみである。外面はナデ調整である。**D区の掘立柱建物跡SB07**の北東の柱穴SP283出土の土器底部（82）は、内面は摩滅しているが外面にタテヘラミガキ調整が残っている。底部径7.4cmを測る。このSB07の西側の雨落溝から出土した（83）は甕形土器の口縁部である。体部は内外面ともナデ調整、口縁部は強いヨコナデ調整である。口縁部に煤が付着している。**E区の竪穴住居跡SH01**からは土器３点、石器57点出土している。（84）は西側炉内出土の土器片利用の紡錘車である。平面形は楕円形で、長径3.5cm、短径2.9cm、厚さ0.5cmを測る。中央に径0.25cmの穴を穿っている。（85）は北東部の堆積土から出土の、広口の壺形土器の頸部である。４条の貼り付け突帯を巡らせ

ている。(86) は北西隅の土坑SK04で出土した甕形土器である。口縁部外面のヨコナデ調整は確認できるが、ほかは摩滅が著しい。復原口径12.0cmを測る。(97) は砂岩製の叩き石である。直径8.2cm、厚さ2.5cmの平たい円形を呈する。周囲が叩いた部分、円の中央が擦った部分である。(101～149) は石鏃である。石材はサヌカイトである。この住居跡から出土した49点の石鏃は、SH01の住居床面や住居内の土坑・柱穴から出土したものすべてである。その中には完成品、未完成品も含まれる。出土した石鏃は、凸基と考えられるもの21点、平基は20点、凹基は8点である。(150～156) はサヌカイト材の石錐である。他に多量のサヌカイト剥片が出土している。竪穴住居跡SH01以外で出土したサヌカイト材の石鏃・石錐については次の通りである。D区の柱穴SP290からは石鏃 (159) 1点が、E区では柱穴SP97から石鏃 (158) 1点が、土坑SK12から3点 (161～163)、SK15から1点 (164)、SK18からは6点 (165～170)、F区では柱穴SP212からは1点 (157) が出土している。しかし、これらの土坑、柱穴ではサヌカイト剥片は、まったく出土していないから、SH01での出土の状況は、特異と言うほかはない。(171～177) の7点は、各区の遺物包含層から出土したものである。石鏃と石錐がある。

**F区の竪穴住居跡SH02**からは3点の土器が出土している。(87) は甕形土器の口縁部である。(88) は壺形土器の底部である。摩滅が著しい。(89) は甕形土器の上半部である。口縁部の内外面はヨコナデ調整である。復原口径19.2cm、体部径22cmを測る。**E区の竪穴住居跡SH05**からは (90) が出土している。無頸の壺形土器の口縁部と体部上半部である。体部上部内面は板状工具によるナデ調整である。肥厚した口縁部の下に4条のヘラ描き沈線を巡らせる。さらにその下に櫛描き波状紋を巡らせている。復原口径13.2cm、を測る。

## (2) 鎌倉時代の遺物 (図20・21・23、PL25・28)

A区の各堆積土層からは27点の土器が出土している。(1～9) は土師器小皿である。口径7.6～8.8cm、高さ1.1～1.7cmを測る。ほとんどは内外面ともに強くナデているが、板状工具による板目痕をもつもの (3・8) もある。(10～17) は土師器中皿である。口径9.6～13.8cm、高さ1.8～3.3cmを測る。口縁部は内外面ともに強いヨコナデ調整をしている。体部内面はすべての土器でナデ調整であるが、体部外面はナデ調整のもの (10・11・12) と、指で押えたのちにナデ調整をしているもの (13・14・15・17) に分けられる。(18～23) は瓦器埦である。口径13.8～14.0cm、高さ3.8～3.9cm、高台径4.1～5.2cmを測る。高台は低く、断面三角形である。口縁部内外面と高台部はヨコナデで、体部外面は指で押えたのちにナデている。(24～27・55) は青磁碗である。(24) の断面は灰色で、かけられている釉は草緑色を呈する。このほかに図示していないが滑石製石鍋の破片がある。B区の包含層出土品は (28～32) の5点である。(28) は土師器中皿である。口縁内外面はヨコナデで仕上げている。復原口径9.6cmを測る。(29) は土師器皿で

ある。口縁内外面はヨコナデで、底面と内底面はナデて仕上げている。体部外面には指頭痕をもっている。復原口径は11.8cm、高さ3.1cmを測る。(30) は瓦器埦である。高台部は指押えの後ナデている。高台径5.4cmを測る。(31) は須恵器系の坏である。内外面は回転ナデで仕上げている。底部は回転糸切り痕である。(32) は軒平瓦の顎部である。顎部の接合部分にカキ目が残っている。顎貼り付け段顎であることが分かる。顎裏面はヨコナデで仕上げており、また面取りは見られない。B区の遺構で出土のもの (33) は**掘立柱建物跡SB01**の柱穴SP02からのものである。口縁部内外面と高台貼り付け部分はヨコナデで仕上げている。体部外面は指で押えた後ナデて仕上げている。口径15.1cm、高さ4.4cmを測る。**土坑SK01**では土坑中の割り石の間の土器と、割り石除去後の土器に分けた。(34～38) は割り石の間で出土の土器である。(34) は土師器小皿である。口径8.7cm、高さ1.3cmを測る。口縁部は強いヨコナデで、ほかはナデている。(35) は須恵器の坏である。内外面は回転ナデで仕上げている。底部外面は回転糸切り底である。(36～38) の3点は瓦器埦である。いずれも口縁部内外面と高台貼り付け部はヨコナデで仕上げている。体部外面は指で押えた後ナデている。復原口径は、それぞれ14.2・14.6・14.8cmを測る。高さは4.0～4.3cmである (39～54) は土坑の底部から出土した土器である。(39～43) は土師器小皿である。いずれも口縁部内外面は強いヨコナデで、ほかはナデている。復原口径は、7.1～9.1cmで、高さは1.1～1.5cmである。(44～52) は瓦器埦である。いずれも口縁部内外面と高台貼り付け部はヨコナデで、体部外面は指で押えた後ナデて仕上げている。復原口径は13.8～16.0cmで、高さは3.5～4.5cmを測る。(53) は捏ね鉢である。口縁部内外面はヨコナデで、ほかはナデて仕上げている。胎土に直径1㎜以下の砂粒が多量に含まれている。復原口径23.4cmを測る。(54) は須恵器の大型鉢である。口縁端部は僅かに外に拡張する。薄い灰色を呈している。内外面は回転ナデで仕上げている。底部内面の摩滅が著しい。胎土には直径3㎜以下の礫がわずかに混入している。復原口径30.0cm、高さ10.7cmを測る。(91～96) の6点はD区の中世遺物包含層の西半部から出土したものである。(91・92) は土師器小皿である。口縁端部の内外面はヨコナデで仕上げている。復原口径は8.4cmと9.0cmを測る。(93) は瓦器小皿である・口縁端部の内外面はヨコナデで、ほかはナデて仕上げている。復原口径7.6cmを測る。(94) は青白磁皿である。復原口径12.1cmを測る。(95) は白磁小皿、(96) は擂鉢の口縁部である。

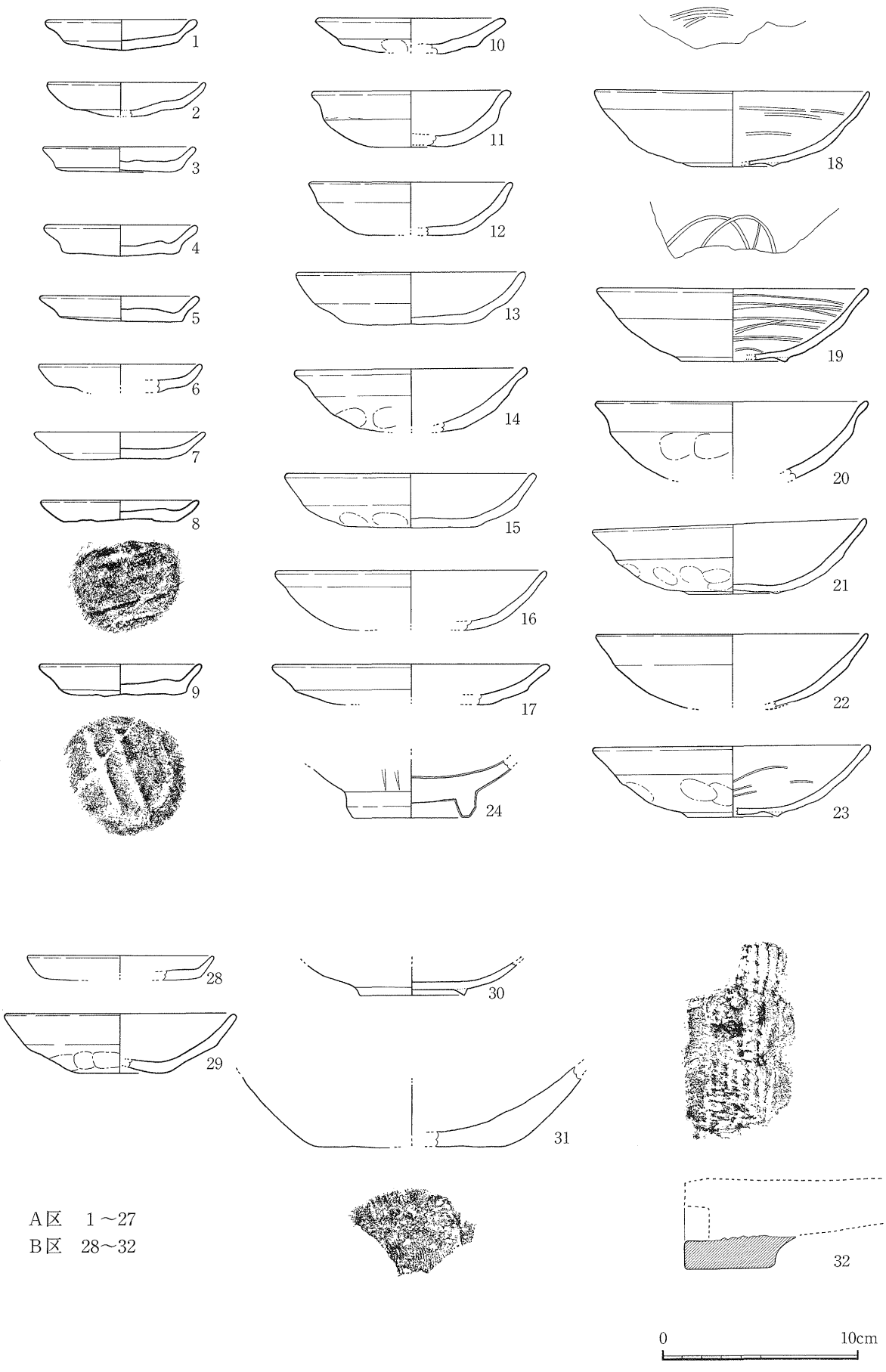



図20　A・B区出土遺物①

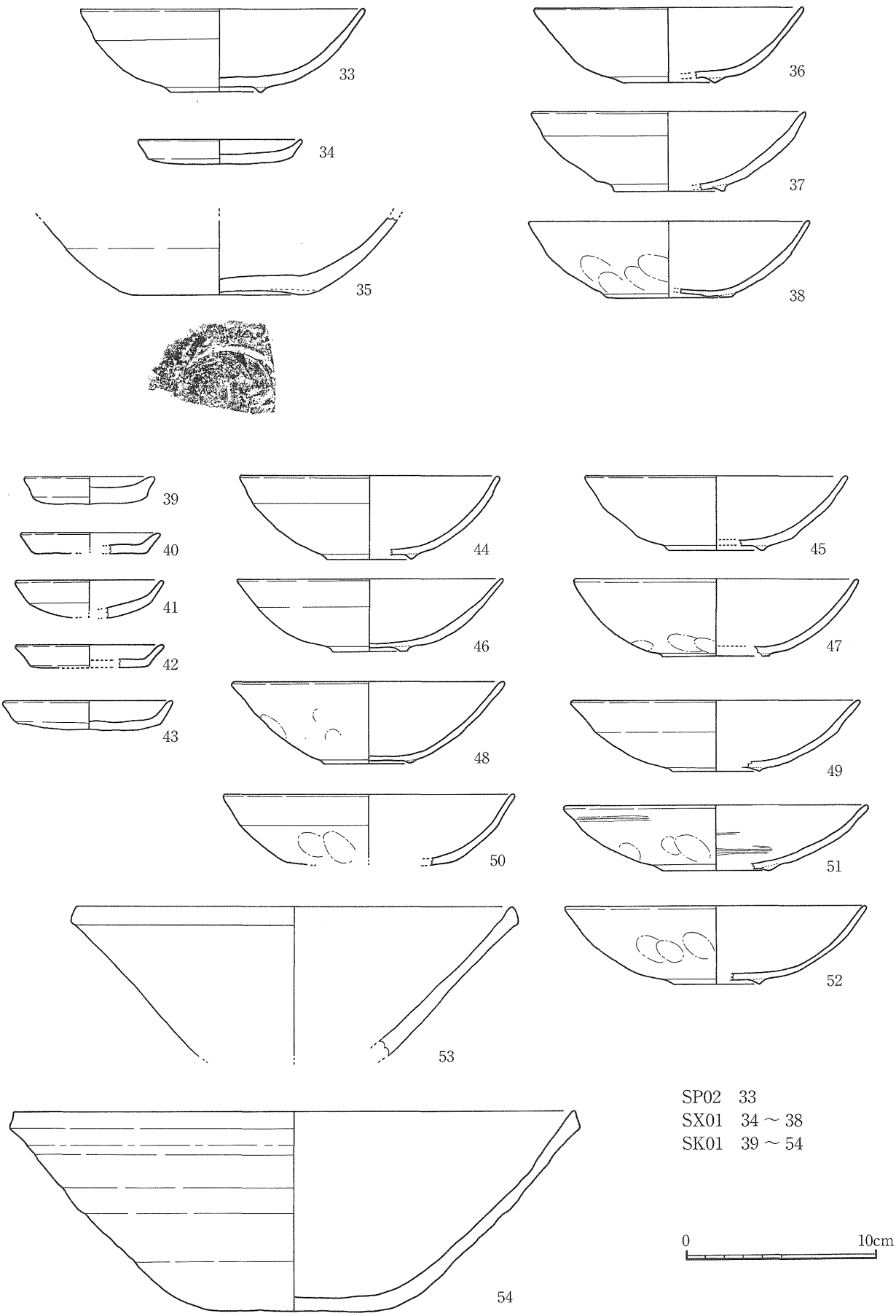
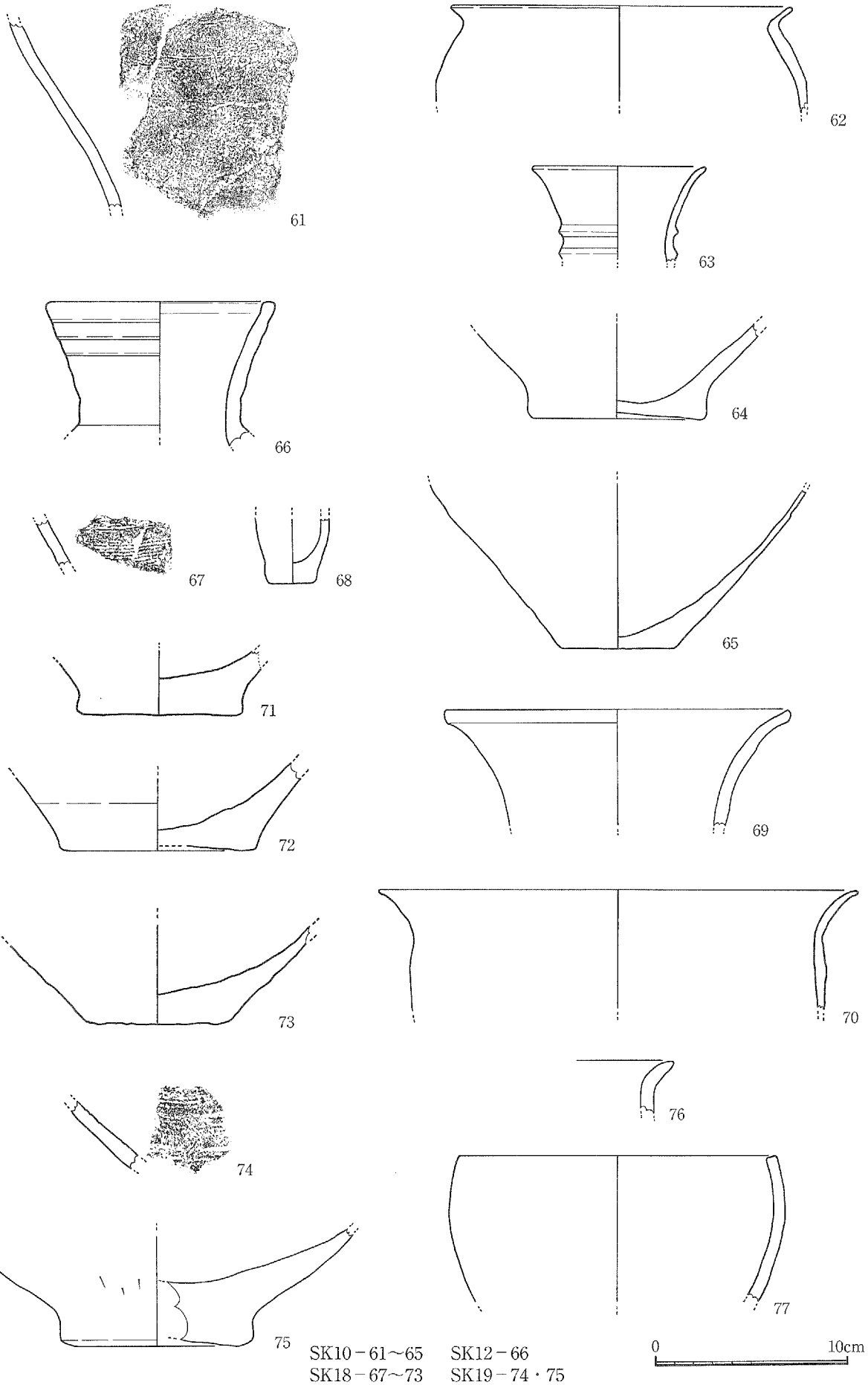
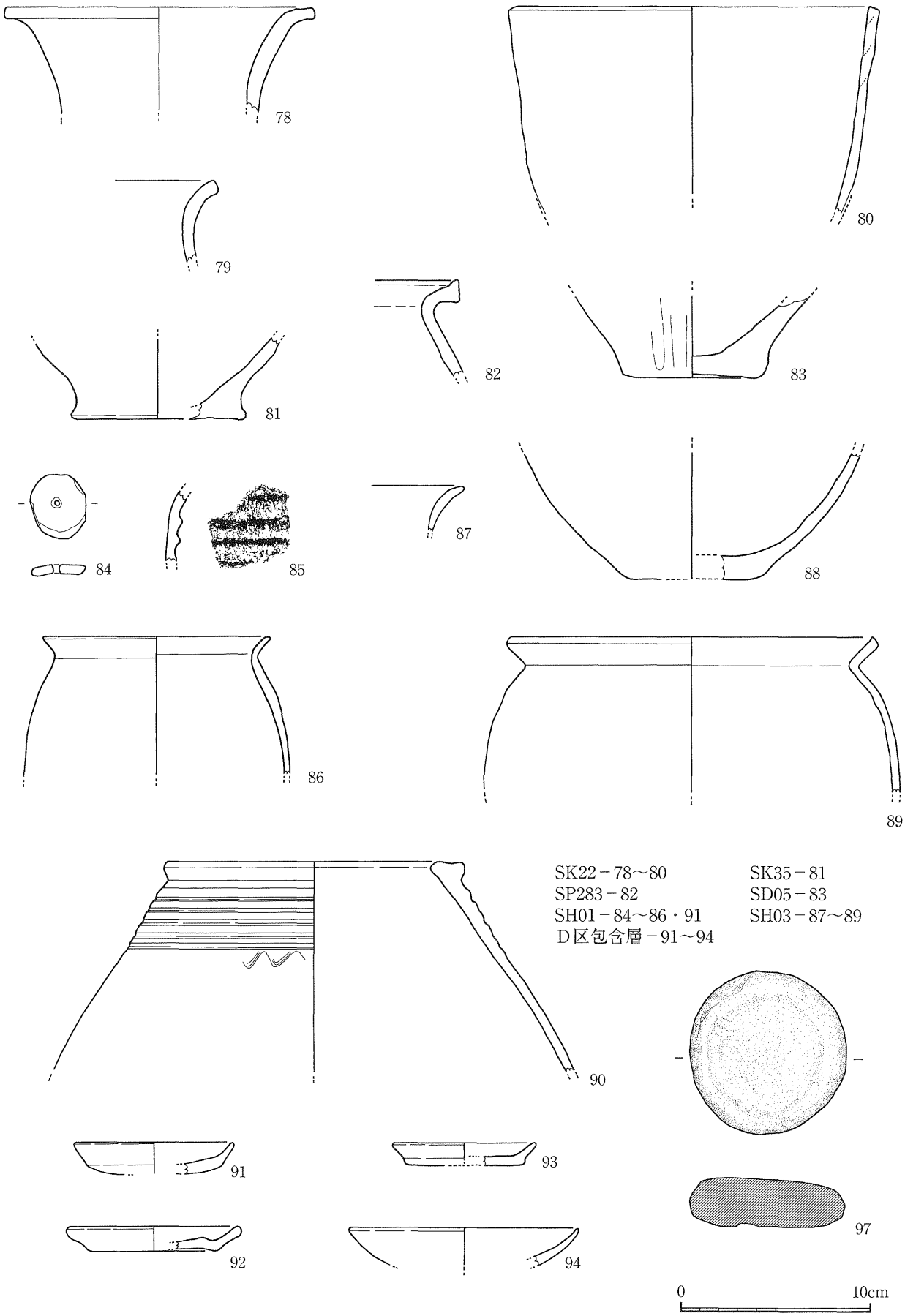



図21　A・B区出土遺物②




SK10－61～65　SK12－66
SK18－67～73　SK19－74・75
SK21－76・77

図22　C～F区　出土遺物①




SK22－78～80
SP283－82
SH01－84～86・91
D区包含層－91～94
SK35－81
SD05－83
SH03－87～89

図23　C～F区　出土遺物②

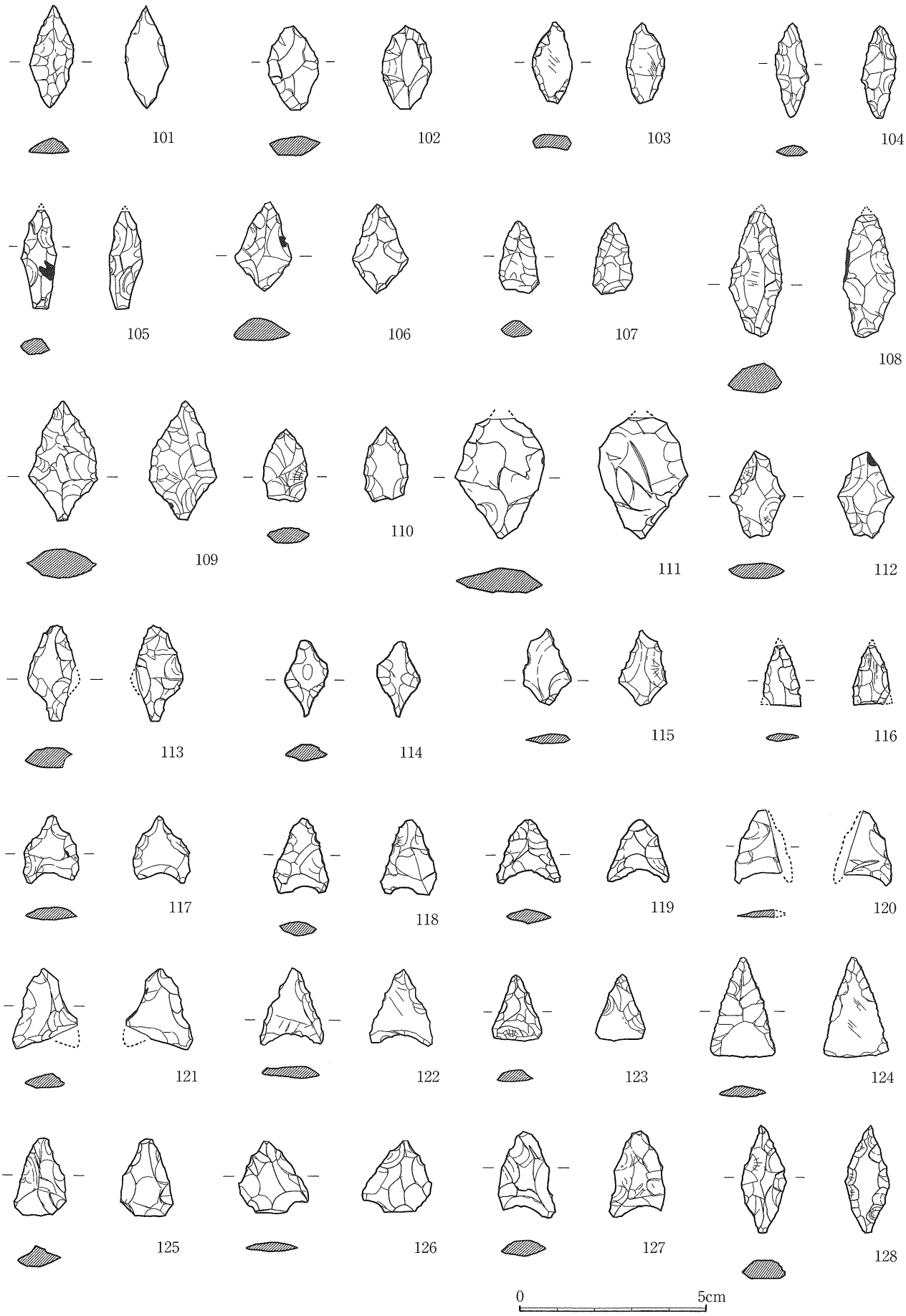



図24　C～F区　出土遺物③

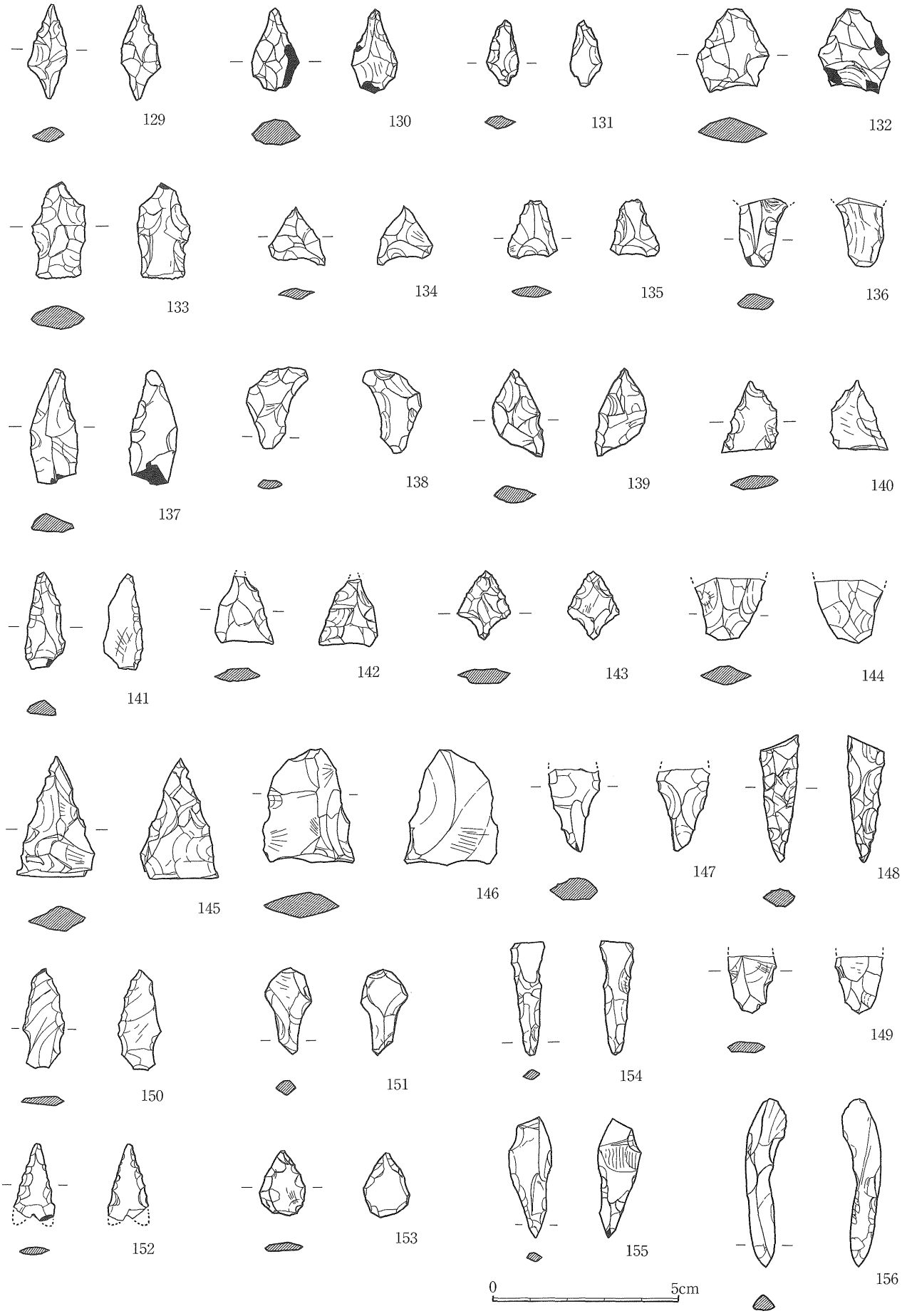
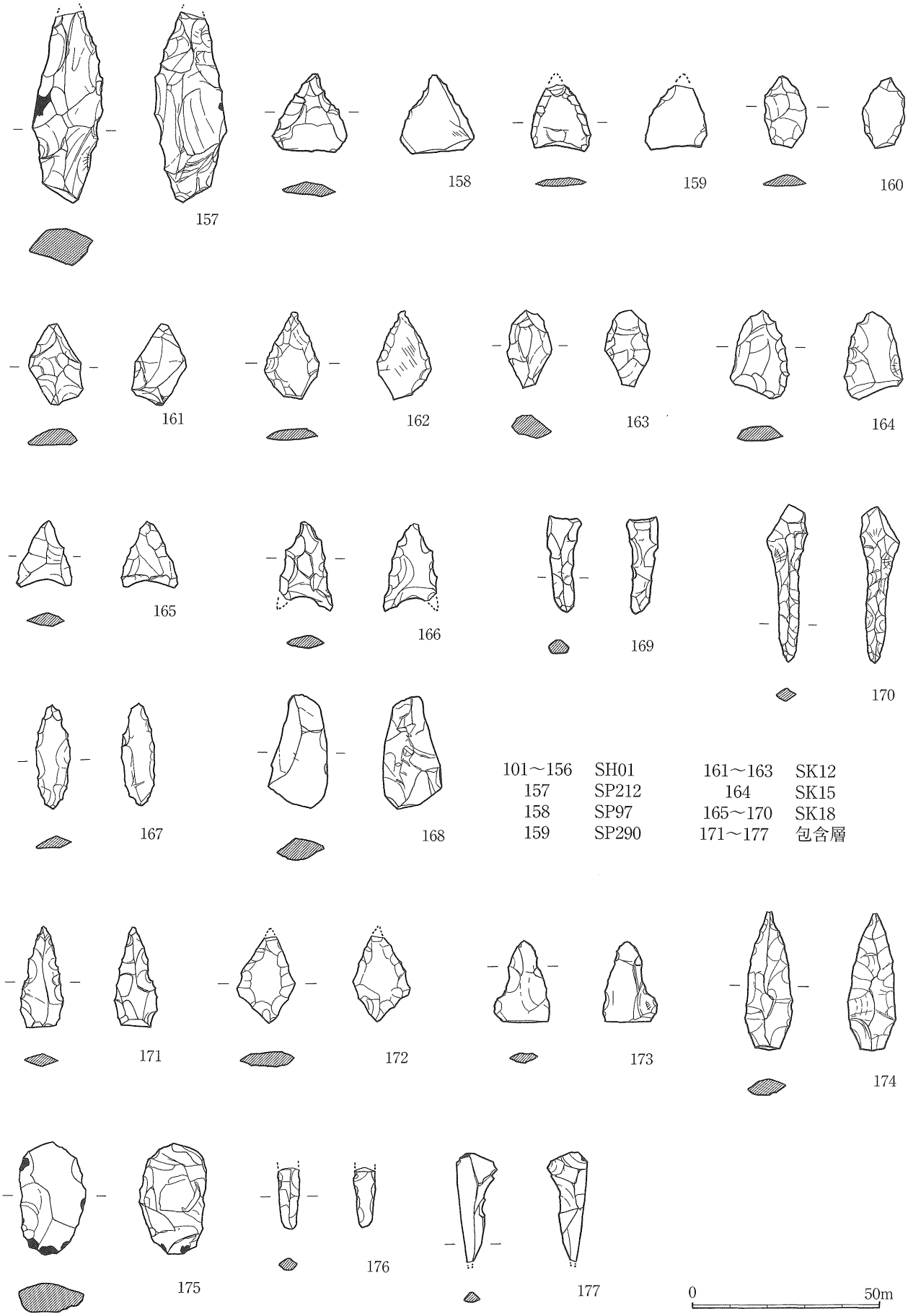



図25　C～F区　出土遺物④




| | | | |
|---|---|---|---|
| 101～156 | SH01 | 161～163 | SK12 |
| 157 | SP212 | 164 | SK15 |
| 158 | SP97 | 165～170 | SK18 |
| 159 | SP290 | 171～177 | 包含層 |

図26　C～F区　出土遺物⑤

（註１）　今回の竪穴住居跡SH01の調査にあたって出土したサヌカイト剥片は多量であるが、どの部分からの出土が、どれくらいであったかは、その数値は以下の通りである。

| | 北西 | 南東 | 北東 | 南西 | 北半 | 北半床面 | 南半床面 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 出土重量 | 46ｇ | 131ｇ | 79ｇ | 75ｇ | 82ｇ | 51ｇ | 252ｇ |
| 出土個数 | 49片 | 166片 | 231片 | 85片 | 95片 | 104片 | 151片 |

包含層と床面から出土した分は以上の通りであるが、これ以外にSH01の土坑から出土した分は次の通りである。南隣のSH04からの数量もあげておく。

| 土坑1 | 土坑2 | 土坑4 | SH04 |
|---|---|---|---|
| 38ｇ | 17ｇ | 17ｇ | 79ｇ |
| 46片 | 19片 | 15片 | 81片 |

岡村遺跡Ｊ地点の弥生時代の３棟の竪穴住居跡からも多くのサヌカイト剥片が出土している。それぞれの住居跡からの出土の重量は以下の通りである。

| | SH01 | SH03 | SH04 |
|---|---|---|---|
| 埋　土 | 435ｇ | 666ｇ | 882ｇ |
| 床　面 | 241ｇ | 196ｇ | 310ｇ |

剥片の大きさは大小さまざまあって、大は３cmから小は１㎜に満たないものがある。

中央炉の周囲が特に多く、炉との関係をうかがわせるものに海南市内では、亀川遺跡第５次調査でのSB54、第14次調査でのSH01等がある。

前田敬彦・植田法彦　『亀川遺跡Ⅴ』

海南市教育委員会・海南市文化財調査委員会　1985.3.

植田法彦　『亀川遺跡第XIV次調査報告』　海南市教育委員会　1999.12.

（註２）　海南市には、このような竪穴住居跡は多く見られる。南となりの遺跡である溝ノ口遺跡（２例）、亀川遺跡（３例）、大野中遺跡（１例）に見られる。ただ亀川遺跡の２例は周溝を持っていないが、他のものは周溝を持っているという根本的な違いがみられる。

# 第３章　和歌山県文化財センターによる調査

## 第１節　調査の経緯・経過と方法

（財）和歌山県文化財センターでは、平成15・16年度に第１・２次調査を行った。

第１次調査は平成15年11月４日～12月12日に、計338㎡を発掘した。道路北側溝部分のトレンチ調査であり、水路を挟んで西から順に１～４区として調査を行った。耕作土と床土（第１・２層）及び近世の遺物包含層（第３層）は機械で掘削し、中世（第４・４ｂ層）と弥生時代（第５・５ｂ層）の遺物包含層は人力で掘削した。遺物の取り上げは、遺跡北東にあたる国土座標第Ⅵ系のX=-203,800、Y=-65,300を基点とし、南西側に100ｍの大区画と４ｍの小区画を組み、西方向へ数字、南方向へアルファベットで標記する方式を採用した。大区画は大文字、小区画は小文字を用いて、１A12ｘ、２B25ｆのように表示している。

第２次調査は平成16年７月20日～10月８日に、計772㎡を発掘した。調査地は道路の本線部分にあたり、西から順に５～８区として設定し、同様の手順で調査を進めた。なお、第１次調査は作業員を直接雇用する方式、第２次調査は業者による工事請負方式で作業を進めている。

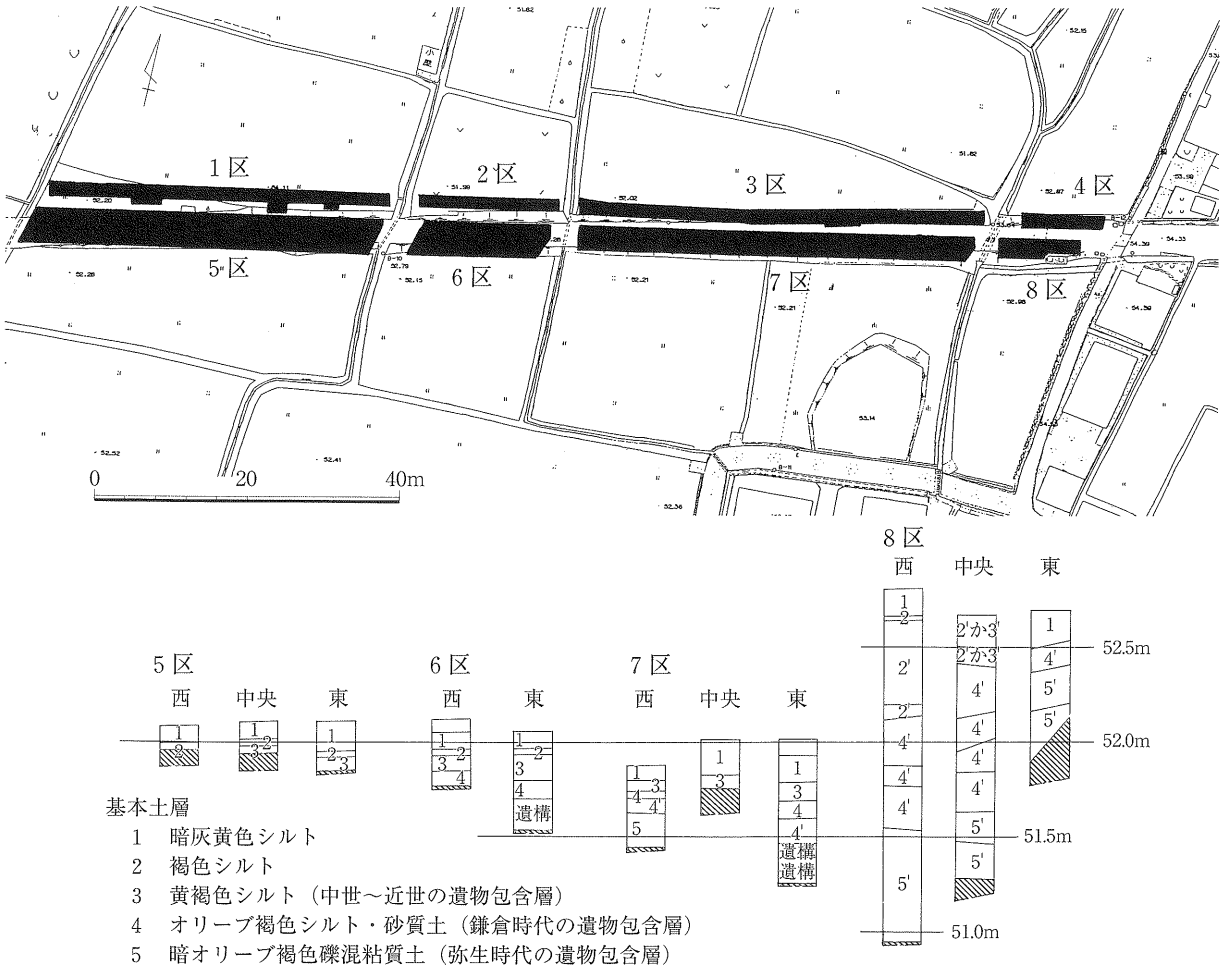



図27　和歌山県文化財センターによる第１・２次調査区配置図・土層柱状図

## 第２節　第１次調査（１～４区）

遺構面は２面あり、上面では鎌倉時代等、下面では弥生時代の遺構を確認した。遺構総数は245基で、１区が94基、２区が61基、３区が88基、４区が２基である。１区から３区の西半までは弥生時代、３区東半には鎌倉時代の遺構が集中している。４区は東側の段丘の裾部にあたる。

### （１）１区

東西長55.7m、南北幅約2.0mで拡張区が３箇所ある、面積約122㎡の調査区である。地山の標高は51.7～51.9mで、包含層の堆積が薄く、西半はほとんど堆積していない。検出される遺構は浅く、調査区西端では弥生時代の遺構がまったく検出されなくなるので、削平を受けたものと考えられる。弥生時代の旧地形は西端が微妙に高くなっていたものと考えられる。

**＜下層遺構＞**

**溝状遺構SK129・151・175**　幅0.5～1.5m、長さ３～４mで、埋土は５層と類似する。129は深さが52cmあるが、175は28cmと浅く、礫が多数混入する。151は深さ20cmで、礫は少ない。

**柵SA01～04**　柵01・02は溝状遺構129、柵03・04は溝149の北西側で検出された。遺物包含層の堆積していない場所で検出されており、年代は不詳である。

**土坑SK139・180**　削平を受けた土坑の底の部分と考えられ、深さが９cmしか残存していない。弥生土器が若干出土している。

**＜上層遺構＞**

**素掘小溝SD122～124**　４層下面で検出した南北方向の鋤溝である。

**溝SK121**　幅1.5mの溝で砂質土で埋まっている。深さ４cm程しか残存していなかったが、方位・幅等の一致から、２区で検出した溝201と同様の遺構の一部と考えられる。

**溝SD149**　幅0.1～0.2m、深さ２cmと非常に浅く、人工的なものであるかは不明である。

**土坑SK102**　径0.9m、深さ18cmの土坑で、江戸時代の遺物が出土している。

### （２）２区

東西長23.4m、南北幅約2.0m、面積約47㎡の調査区である。地山の標高は51.6～51.7mで、やや砂質にかわる。弥生時代の集落域にあたり、遺物包含層の堆積はやや厚くなる。

**＜下層遺構＞**

**竪穴住居SH06（旧遺構261）**　調査区東端の溝201が分岐する地点で検出された竪穴住居の一部とみられる遺構である。床面と柱穴とみられるものがあり、弥生土器片が数点出土している。

**柱穴・ピット群**　調査区の中央から東にかけて多数検出されている。弥生土器が出土している。

**＜上層遺構＞**

**溝SD201**　幅1.5m、深さ30～70cmで、調査区内で15m分検出した。層序から中近世の遺構と推定され、埋土は砂礫である。調査区の東端で分岐しており、隣接する調査区には続いていない。

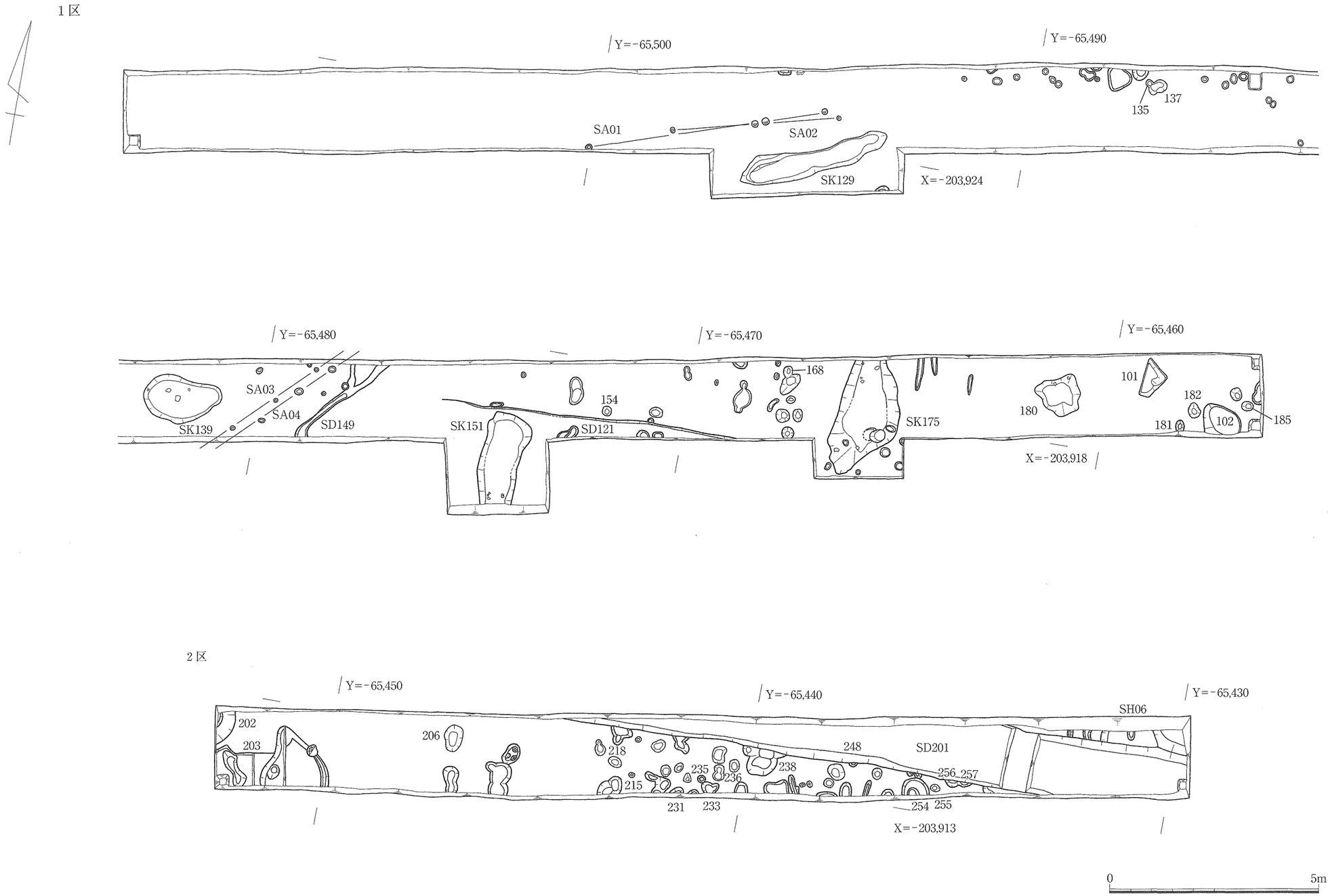
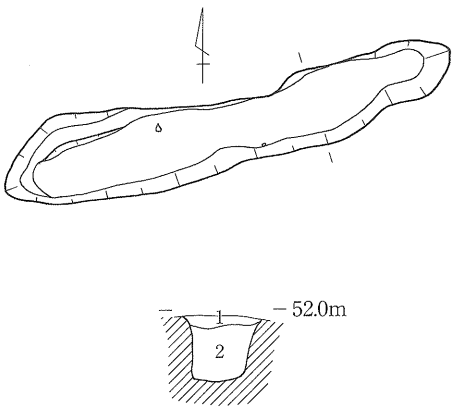

1区
Y=-65,500
Y=-65,490
SA01
SA02
SK129
X=-203,924
135
137
Y=-65,480
Y=-65,470
Y=-65,460
SA03
SA04
SK139
SD149
SK151
SD121
154
168
SK175
180
101
182
181
102
185
X=-203,918
2区
Y=-65,450
Y=-65,440
Y=-65,430
202
203
206
218
215
231
233
235
236
238
248
SD201
SH06
256_257
254
255
X=-203,913
0
5m

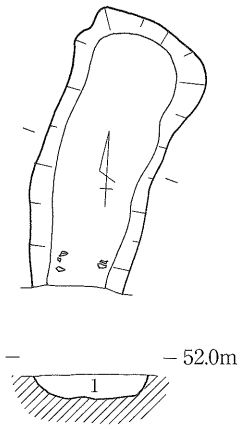
図28　1・2区　平面図

SD129



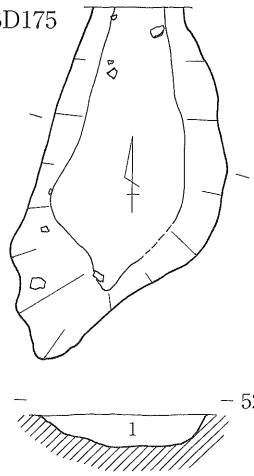

1　10YR5/4(にぶい黄褐色)粘質土
2　10YR4/3(にぶい黄褐色粘質土)

SD151



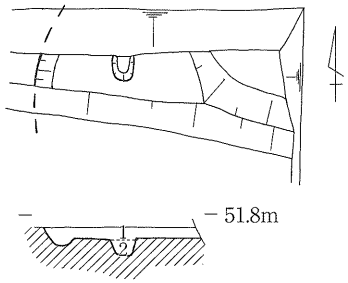

1　10YR5/4(にぶい黄褐色)粘質土

SD175



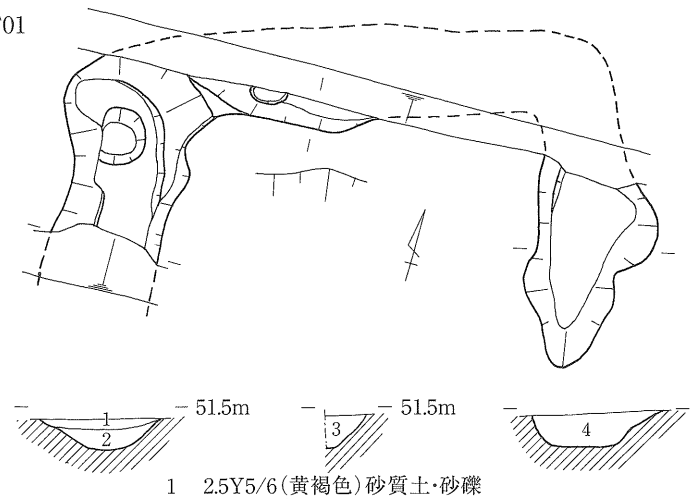

1　10YR5/4(にぶい黄褐色)粘質土

SH06



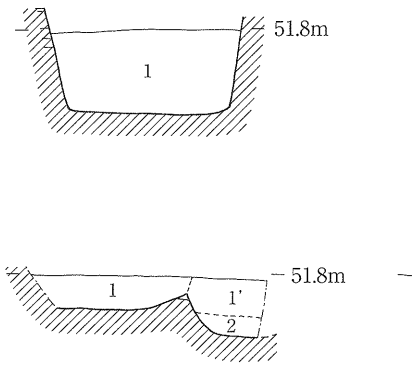

1　10YR5/3(にぶい黄褐色)砂質土
2　10YR4/3(にぶい黄褐色)砂質土

ST01



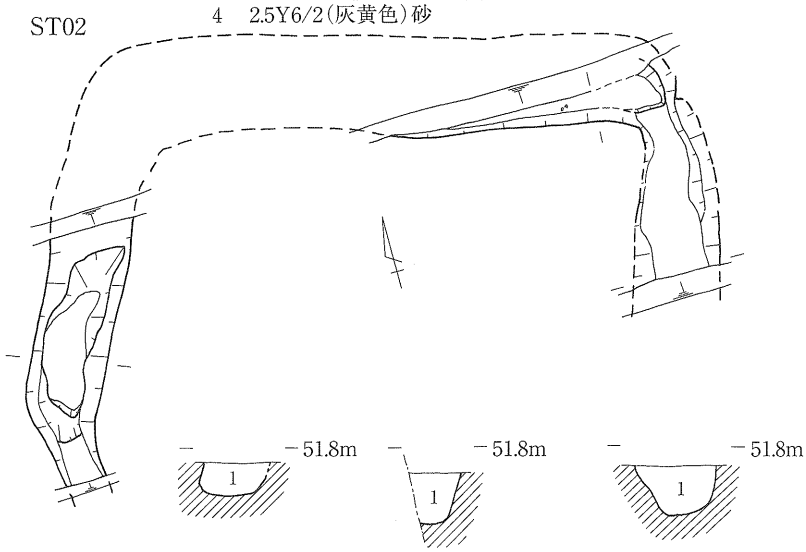

1　2.5Y5/6(黄褐色)砂質土･砂礫
2　2.5Y6/2(灰黄色)砂質土
3　10YR3/2 (黄褐色) 粘質土
4　2.5Y6/2(灰黄色)砂

SD201




1　10YR4/2(灰黄褐色)砂
1'　〃
2　10YR4/3(にぶい黄褐色)砂礫･土

ST02




1　2.5Y6/2(灰黄色)砂質土

図29　1～3区　遺構

## （3） 3区

東西長66.5m、南北幅約2.0mで拡張区が1か所あり、面積約143㎡の調査区である。地山の標高は51.4～51.7m。調査区の中央付近は砂礫土がベースとなっており、弥生時代の遺構がなく、遺物の散布も非常に希薄である。旧流路が走っている可能性が高いが、明確な輪郭がないので、流路を若干変えながら、次第に埋没していったものと考えている。遺構面は2面あり、弥生時代の遺構は調査区の西半にしかない。鎌倉時代の遺構は全面にあるが、ほとんどが東半で検出されている。調査区中央付近では、砂礫のベース面で検出した粘質土の輪郭のあるものを遺構として取り扱ったが、自然の窪み等も含まれているものと思われる。

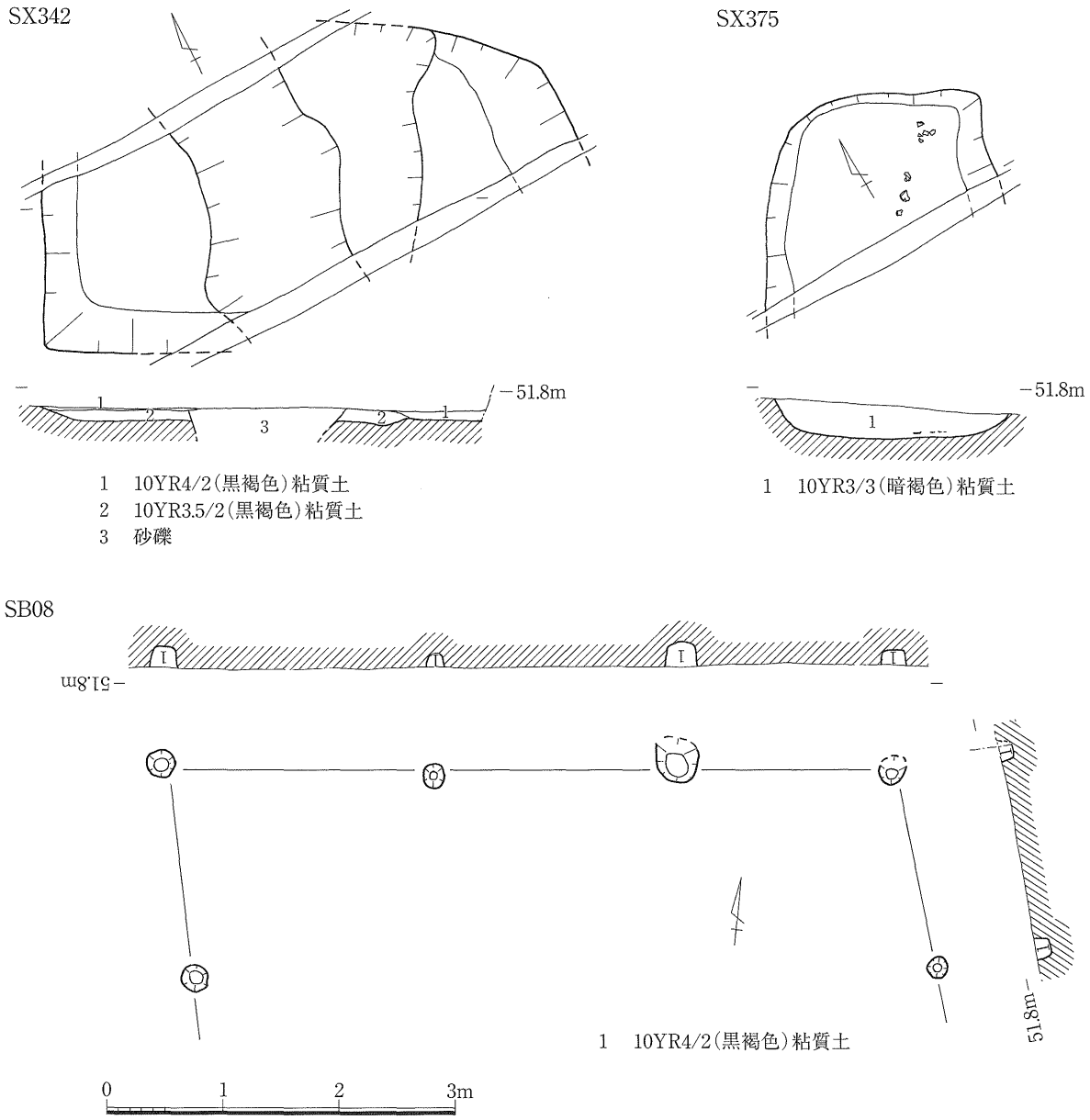



図30　3区　遺構

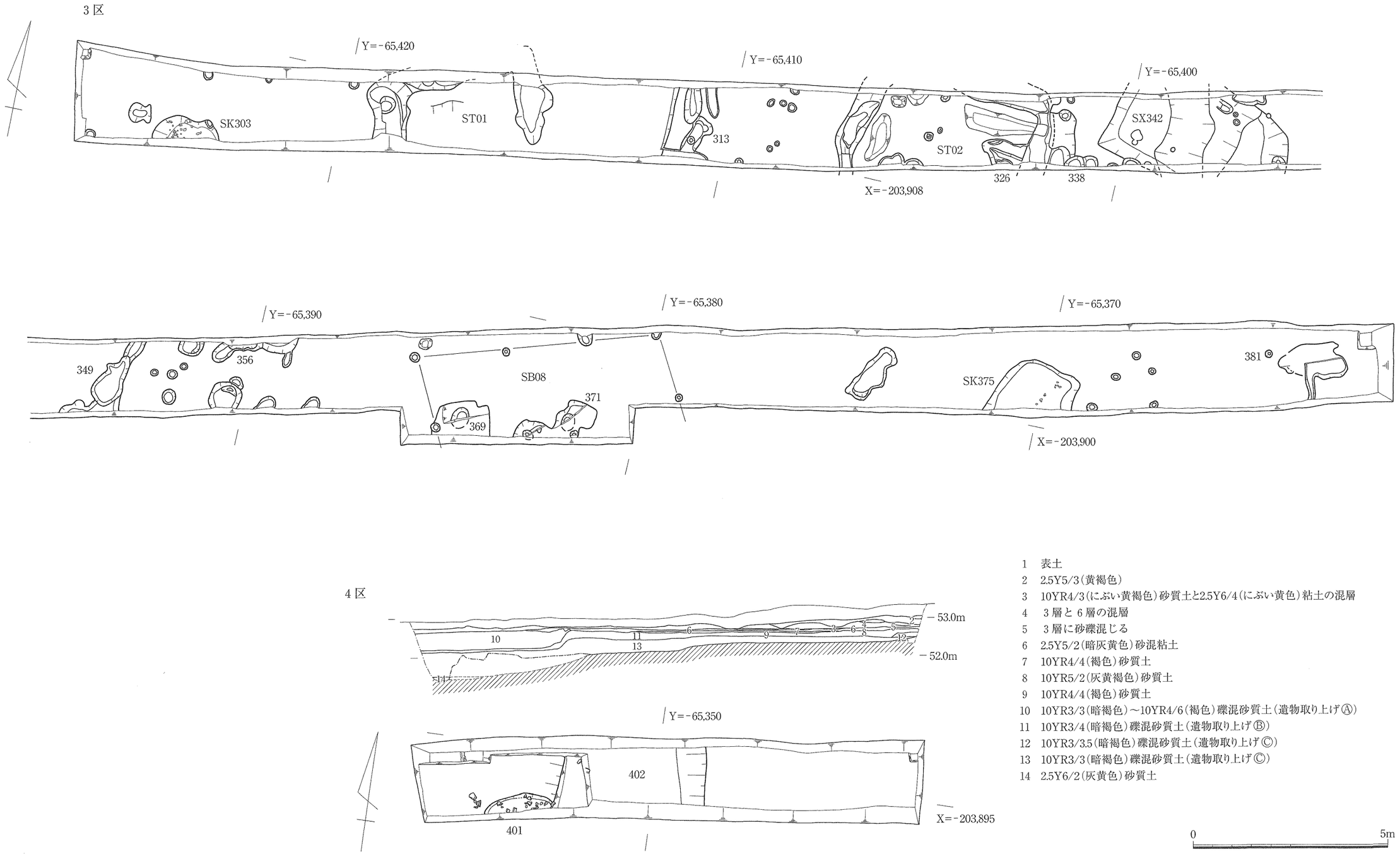

3区
Y=-65,420
Y=-65,410
Y=-65,400
SK303
ST01
313
ST02
SX342
326
338
X=-203,908
Y=-65,390
Y=-65,380
Y=-65,370
349
356
SB08
371
369
SK375
381
X=-203,900
4区
53.0m
52.0m
10
11
13
14
Y=-65,350
402
401
X=-203,895
1 表土
2 2.5Y5/3(黄褐色)
3 10YR4/3(にぶい黄褐色)砂質土と2.5Y6/4(にぶい黄色)粘土の混層
4 3層と6層の混層
5 3層に砂礫混じる
6 2.5Y5/2(暗灰黄色)砂混粘土
7 10YR4/4(褐色)砂質土
8 10YR5/2(灰黄褐色)砂質土
9 10YR4/4(褐色)砂質土
10 10YR3/3(暗褐色)～10YR4/6(褐色)礫混砂質土(遺物取り上げⒶ)
11 10YR3/4(暗褐色)礫混砂質土(遺物取り上げⒷ)
12 10YR3/3.5(暗褐色)礫混砂質土(遺物取り上げⒸ)
13 10YR3/3(暗褐色)礫混砂質土(遺物取り上げⒸ)
14 2.5Y6/2(灰黄色)砂質土
0
5m

図31　3・4区　平面図

＜下層遺構＞

**周溝状遺構ST01（旧遺構308～310）**　幅約0.9m、深さ20～30cmの溝が巡る全長4.7mの遺構である。調査区内では西・北・東の溝を確認した。墳丘に相当する範囲は東西で3.0mと狭い。溝の埋土は灰褐色～黄褐色を呈しており、土質は砂～粘質土と多様である。溝からは弥生土器と考えられる細片が微量出土した。遺構の上は5層に覆われているので、弥生時代の遺構であることは確かであろう。

**周溝墓状遺構ST02（旧遺構323～325）**　幅0.5～0.7m、深さ30～40cmの溝が巡る全長5.2mの遺構である。調査区内では西・北・東の溝を確認した。墳丘に相当する範囲は東西で3.9mと狭く、南東側は類似する埋土の遺構と切りあっている。埋土は5層に類似し、弥生土器片とサヌカイト剥片が微量出土している。

**土坑SK303**　調査区西側の南壁沿いで検出した土坑の一部である。深さ18cmで、弥生時代中期の土器片が少量出土した。

＜上層遺構＞

遺構が分かりづらく、5cmほど掘り下げて検出した。上層・下層のいずれの遺構か判断のつかないピットも多数存在した。

**掘立柱建物跡SB08（旧遺構363～368）**　調査区東側で検出した掘立柱建物の一部である。柱穴は径20～35cmと小さく、やや歪んだ長方形プランを呈している。東西は3間で6.4m、南北はおそらく2間で3.6m前後と推定される。柱穴からは瓦器片が出土しており、13世紀の遺構と考えられる。

**土坑SK375**　調査区東側の南壁沿いで検出した東西1.9m、南北2.0m以上の土坑である。埋土からは瓦器が出土している。底の平坦な長方形プランをもち、北東隅に瓦器片が集中していることから、土坑墓の可能性も考えられる。

**竪穴状遺構SX342**　調査区の中央で検出した一辺約3.0mの方形遺構で、東辺は外方へ広がっている。側面・底面ともに傾斜をもっており、上層・下層ともに流路となる地点に位置するため、竪穴住居跡とは考えづらい。下層埋土は無遺物の砂質土で、上層からは瓦器・土師器皿片が出土している。

### （4）4区

東西長13.1m、南北幅約2.0m、面積約26㎡のトレンチである。東側にある段丘の裾にあたり、西へ下る斜面地となっている。地山の標高は51.4～52.5m。東の平坦面を数回に分けて削平し、土を廃棄したものと推定される堆積層がみられる。廃棄された土には層序の逆転現象がみられ、下層には多量の瓦器・土師器のほか東播系須恵器・陶器がみられ、中層には遺物が少なく、上層には弥生土器が混在する。

## 第３節　第２次調査（５～８区）

遺構面は２面あり、上面では鎌倉～江戸時代、下面では弥生時代の遺構を確認した。遺構総数は327基で、５区が116基、６区が71基、７区が139基、８区が１基である。遺構の年代は弥生時代が236基、中世が53基、その他年代不詳が38基である（遺構面・埋土・出土遺物により区分し数えている。多少の相違があり得る）。

遺構面のベース土は５区、７区の西・東端、８区がシルト～粘質土、６区が砂質土、７区の中央が砂礫である。弥生時代の遺構は５～７区西半に分布し、鎌倉時代の遺構・遺物は７区東半から８区に集中する。

### （１）５区

東西長57.8m、南北幅約6.2m、面積約346㎡、地山標高51.8～52.0m。弥生時代の集落域にあたる。

**＜下層遺構＞**

**竪穴住居SH07（旧遺構501）**　竪穴の中央に炉跡状の土坑と柱穴とみられる両脇のピットをもつ、松菊里型（あるいは松菊里系）と呼ばれる竪穴住居である。竪穴の径は3.1～3.5mと小型であり、壁溝は判然としない。竪穴の中央に松菊里型特有の施設があり、中央土坑は95×60cm、深さ12cmで炭が多量に混じり、サヌカイト片が少量出土している。両脇にある小型のピットは径22～23cm、深さ20～23cmの円筒形を呈している。竪穴床面には径約30cm、深さ２～４cmの「窪み」が４箇所あり、柱穴というよりも柱を据えた跡と考えられる。

床面と中央の施設の埋土中からはサヌカイト剥片が多数出土している。一方、土器は床面に接するものは少なく、ほとんどが上層から出土している。土器は中期前葉（Ⅱ様式後半）に相当するもので、竪穴住居の年代もこの段階よりあまり古くならないものと考えている。

**掘立柱建物跡SB09（旧遺構552）**　調査区の西側南壁沿いで検出した4.8×3.2mの建物跡である。柱間は３×１間と考えているが、北辺上にはピットがあり、変則的に柱が建っていた可能性もある。建物棟方向はＥ→Ｓ19度を向く。柱穴からは弥生土器片が出土している。

**掘立柱建物跡SB06（旧遺構553）**　調査区の中央南壁沿いで検出した５間×１間、7.1×3.5mの建物跡である。建物棟方向はＥ→Ｎ41度を向く。建物の続きはＦ区で検出されている。柱穴は深さ約20cmで、径25×35cmの楕円形を呈したものが多い。柱穴からは弥生土器片が出土している。

**掘立柱建物跡SB10（遺構554）**　調査区の東側北壁沿いで検出した建物跡である。柱間がつまった建物として検出しているが、柱穴埋土の土色がやや薄く、年代を異にするピットを含んでいる可能性も考えられる。北側隣接地は約２mの歩道部分が調査対象から除外されており、建物の全体像は不明確なままになってしまった。

**溝状遺構SK510**　幅1.4m、長さ3.8m、深さ約15cm。弥生土器が出土している。

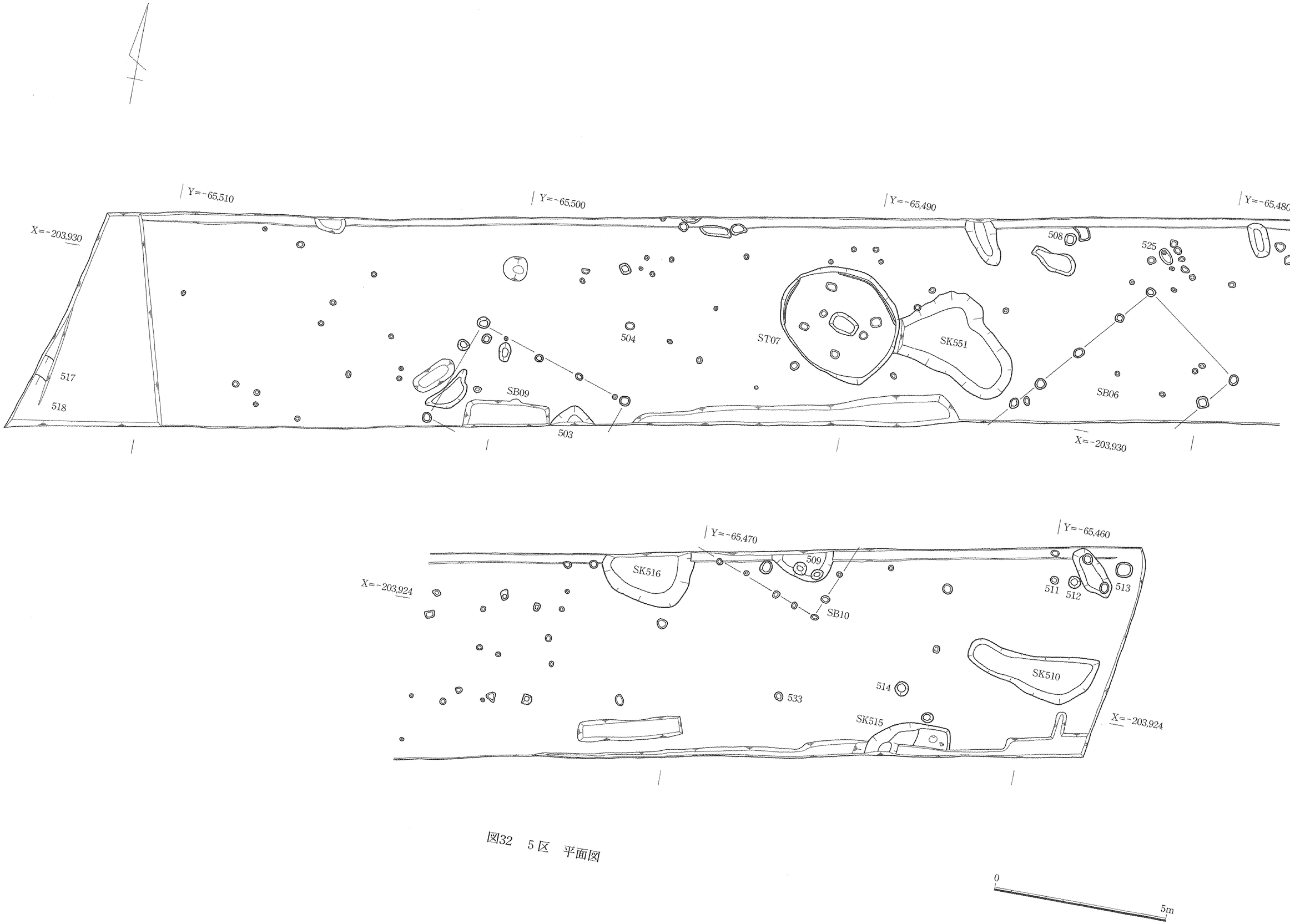

Y=-65,510
Y=-65,500
Y=-65,490
Y=-65,480
X=-203,930
517
518
504
SB09
503
ST07
SK551
508
525
534
SB06
X=-203,930
Y=-65,470
Y=-65,460
SK516
509
X=-203,924
SB10
511
512
513
SK510
514
533
SK515
X=-203,924
0
5m

図32　5区　平面図

**土坑SK509**　調査区東側北壁沿いで検出した土坑である。径1.8m以上、深さ15cm以上ある。埋土は黒褐色シルトで、弥生土器片が出土している。

**土坑SK515**　調査区東側南壁沿いで検出した土坑であり、西側は深く、東側は浅い。東側の底には弥生土器の底部が出土した。

**土坑SK516**　調査区東側北壁沿いで検出した土坑である。径2.6m以上、深さ66cm以上ある。埋土は礫混じりのシルトで、弥生土器片が出土している。

**土坑SK551**　竪穴住居SH07の東隣で検出した遺構で約3.5×2.0mの不整形を呈し、深さは40cmである。埋土は下層が砂、中層が黄色粘土で、上層が暗褐色粘質土である。竪穴住居に先行し、遺物は出土していない。

**＜上層遺構＞**

1区同様に素掘り小溝が若干確認できたが、それ以外の遺構は形成されていない。

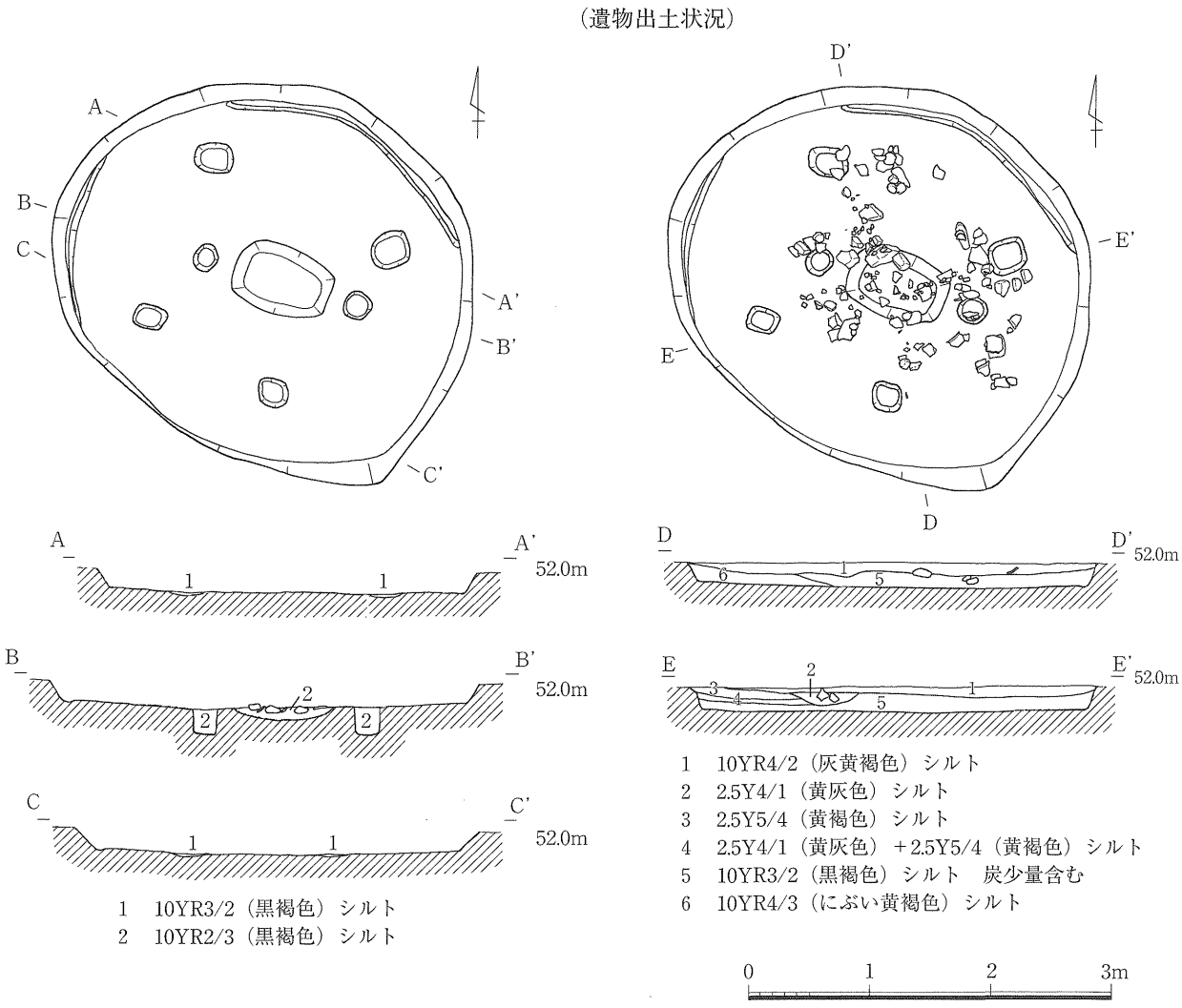
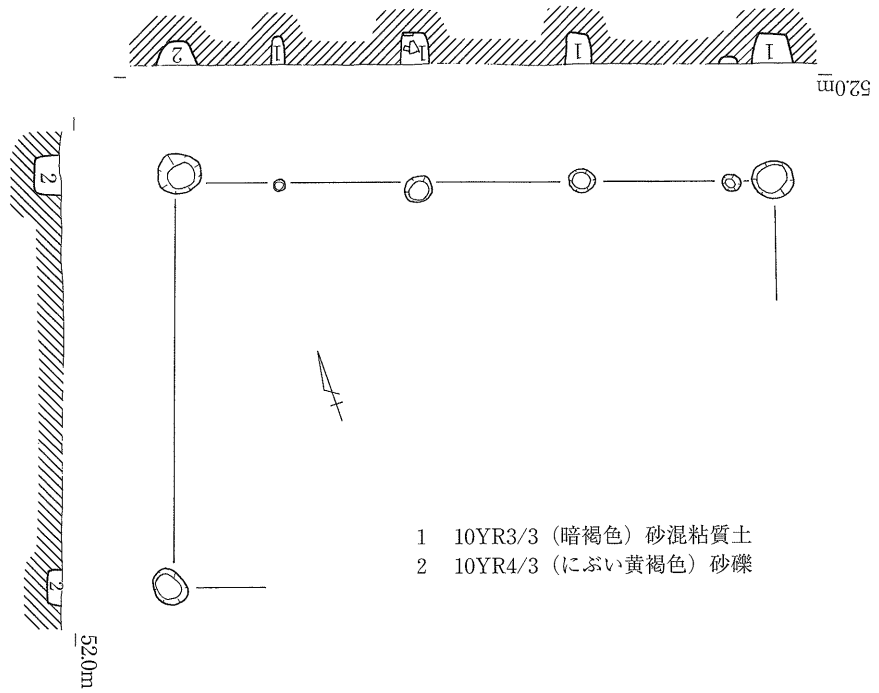



図33　5区　竪穴住居跡SH07

SB09




SB06

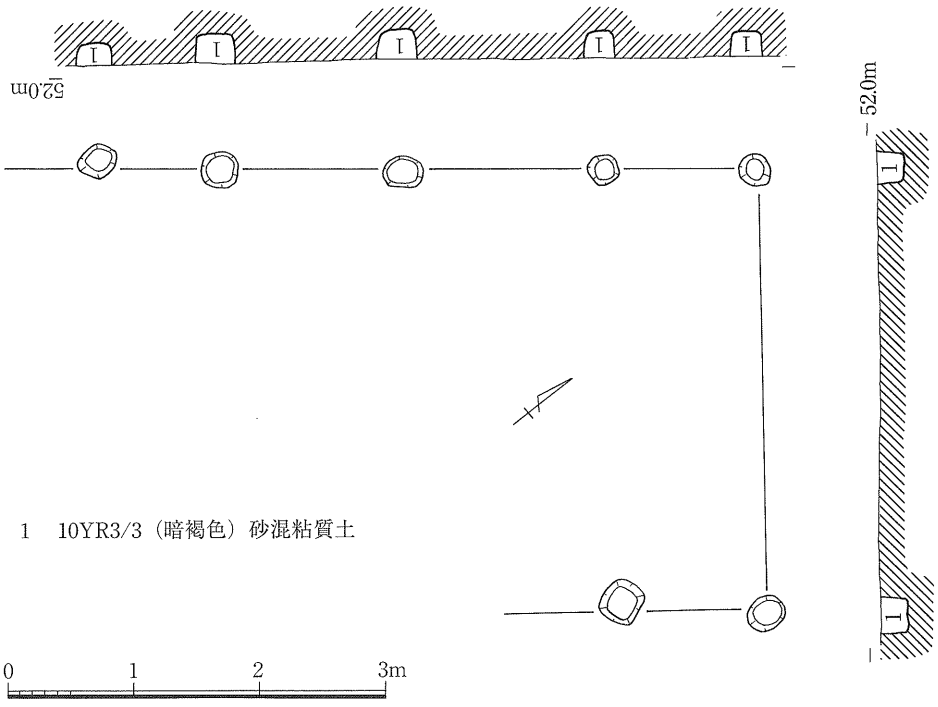
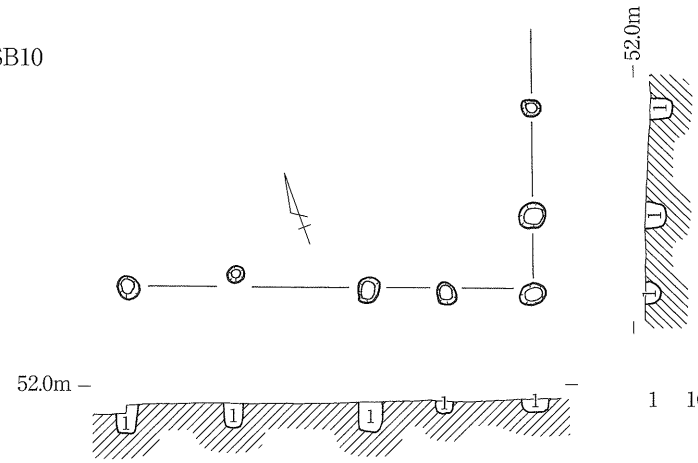


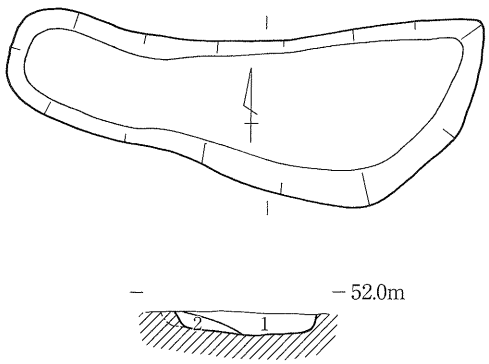

図34　5区　掘立柱建物跡SB09・06

SB10



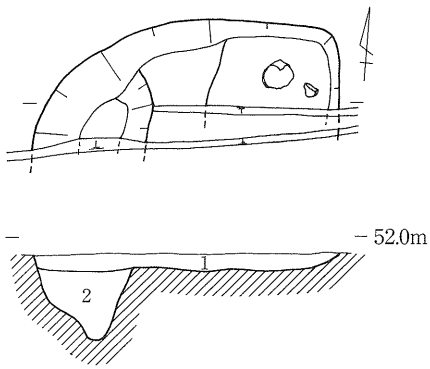

1　10YR3/2(黒褐色)シルト

SK510



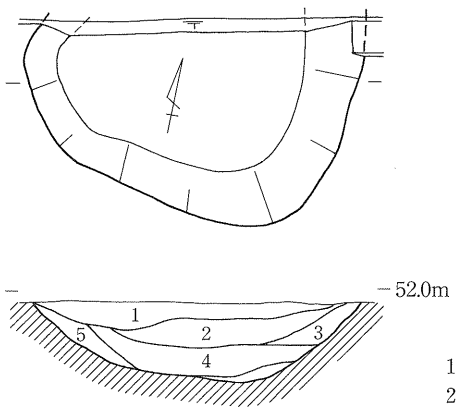

1　2.5Y4/2(暗灰黄色)シルト　炭微量含む
2　10YR3/2(黒褐色)+10YR4/6(褐色)シルト

SK515



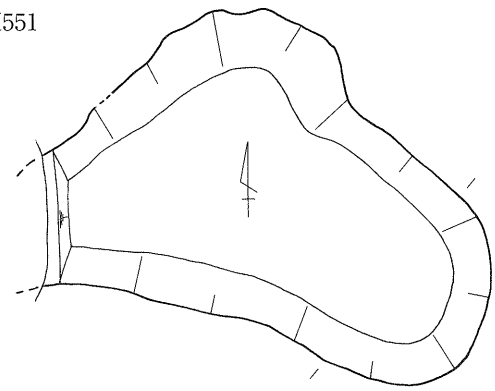

1　10YR4/6(褐色)シルトにマンガン粒多量に混じる
2　10YR3/2(黒褐)シルト

SK516




1　10YR4/6(褐色)シルト
2　10YR3/2(黒褐色)砂質土　2～10cmの礫多量に含む
3　10YR3/2(黒褐色)シルト
4　10YR3/2(黒褐色)+10YR4/6(褐色)シルト　礫含む
5　10YR3/1(黒褐色)シルト

SK551



1　10YR3/2(黒褐色)シルト
2　10YR3/2(黒褐色)+2.5Y5/4(黄褐)シルト
3　10YR5/4(にぶい黄褐)シルト
4　10YR4/2(灰黄褐)シルト
5　10YR5/3(にぶい黄褐)砂質土
6　10YR4/2(灰黄褐)シルト

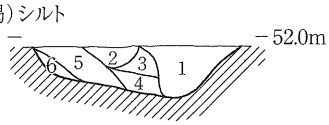


図35　5区　掘立柱建物跡SB11他

## （2）6区

東西長23.2m、南北幅約5.3m、面積約118㎡。地山標高は51.7～51.8mで、ベースは砂質土となる。上面では鎌倉時代から江戸時代、下面では弥生時代の遺構を確認した。竪穴住居・掘立柱建物跡の密度が高く、特に竪穴住居の建て直しが顕著にみられる地区である。

＜下層遺構＞

**竪穴住居SH08（旧遺構608）**　調査区中央やや南寄りで、径7.2m、深さ約14cmを確認した。ほぼ重複する位置に建てられているSH09との埋土の区別が困難であり、北側の壁溝は識別することができなかった。東西の地山面上で壁溝の一部を検出したほか、炉跡・ピットを確認した。埋土からは弥生土器片と多様な石器類が出土している。なお、平面図の推定ラインよりやや北側まで当竪穴の遺物として取り上げを行っていることから、SH09北端部の遺物の一部が混入している可能性がある（混入が疑われる地点の遺物は図化していない）。

**竪穴住居SH01（北端部分）**　調査区の南壁沿いで、SH01の北端部分を確認した。SH08竪穴埋土掘削後に、2時期分の壁溝を検出している。西側の壁溝は隣接する調査区で検出されていないが、SH01とごく近接する時期のものと考えられるので、SH01の建て直し跡と考えている。柱穴の埋土には黄色のブロック（地山の土）の混じる黒褐色土である。壁溝SD671が先行し、壁溝SD672が建て直し後の遺構と考えられる。

**竪穴住居SH09（旧遺構607）**　SH08・01より下層で検出された竪穴住居で、3時期分の壁溝と炉跡と柱穴・ピットが確認されている。壁溝SD667が径約6.0m、壁溝SD668が径約6.6m、壁溝SD669に伴う竪穴上端面が径7.4m、壁溝部分にあたる壁面下端付近で径約7.0mであった。竪穴の中央付近に炉があるものとすると、それぞれ炉跡SX657・658・656に対応するものと推定される。

竪穴の床面からは多数のサヌカイト剥片・製品が出土しており、竪穴内で石器が製作されていたものと考えられる。また、石棒・棒状石製品や石皿・砥石等が多数出土している点も注目される。弥生土器は松菊里型竪穴住居跡SH07よりもやや新しい様相があり、甕が減少し、壺が増加している傾向がみられる。出土遺物から、中期前葉から中葉にかけて（Ⅱ様式後半からⅢ様式初頭）の遺構と考えられる。

**竪穴住居SH10（旧遺構608）**　調査区北東隅で検出された、円形に一段下がり平坦面をなす遺構で、竪穴住居の一部と考えている。壁溝はなく、検出面では磨製石斧が出土している。遺物はほとんどなく、年代は判然としない。遺構の上面は5層に覆われている。

**掘立柱建物跡SB03（旧遺構673）**　調査区の南西で検出した柱穴4基からなる遺構で、E区の掘立柱建物跡と繋がり掘立柱建物として認識できる。建物は1～2×5～6間で、6.0×3.2m。柱穴は径30～35cmで、建物棟の方位はE→N14度。

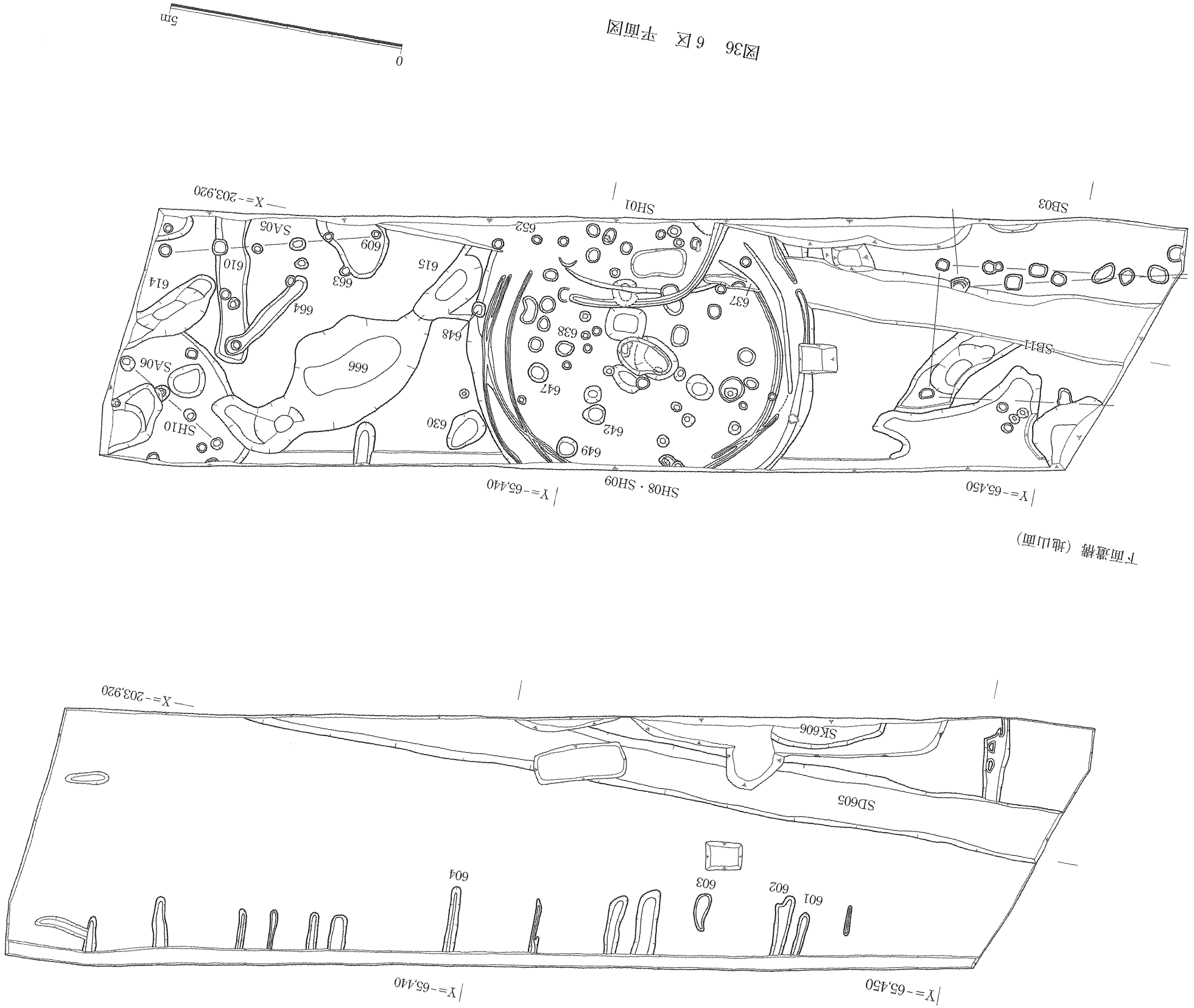
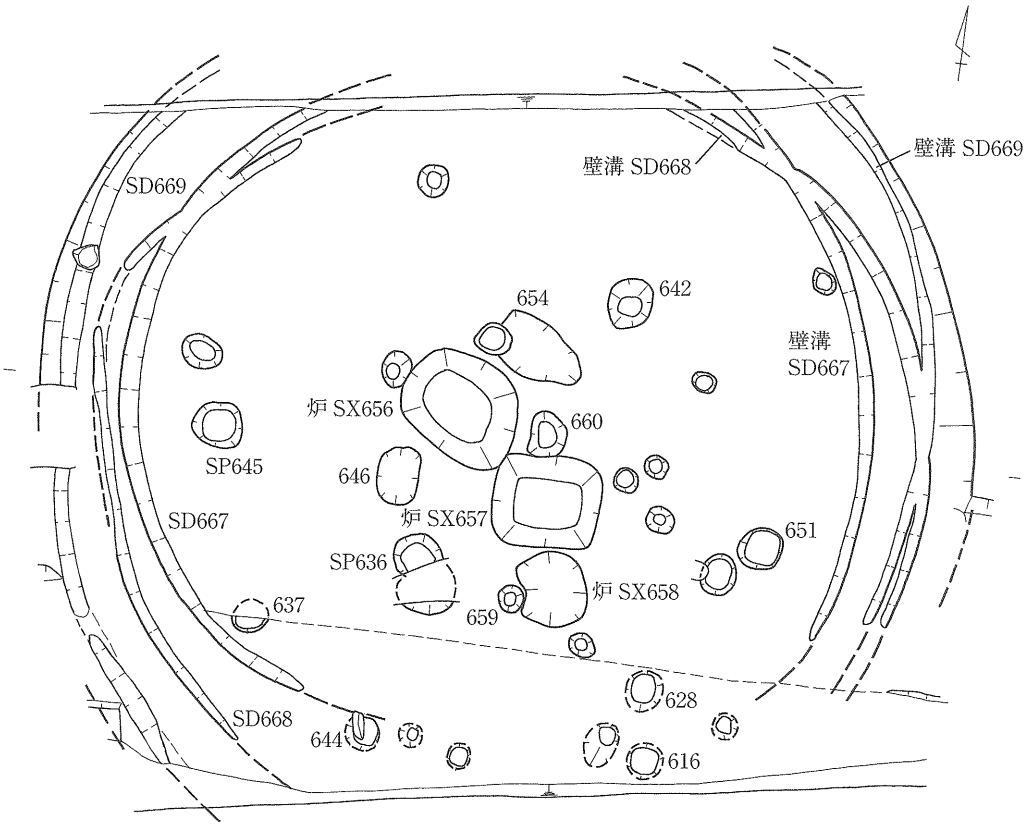
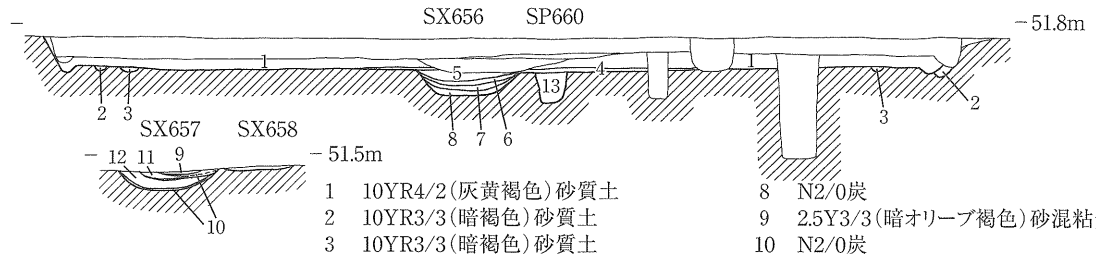

下面遺構（地山面）
上面遺構（4層上面）
X=-203,920
Y=-65,450
Y=-65,440
SH01
SH08・SH09
SH10
SB03
SB11
SA05
SA06
SK606
SD605
609
610
614
615
630
637
638
642
647
648
649
652
663
664
666
601
602
603
604
0
5m

図36　6区　平面図

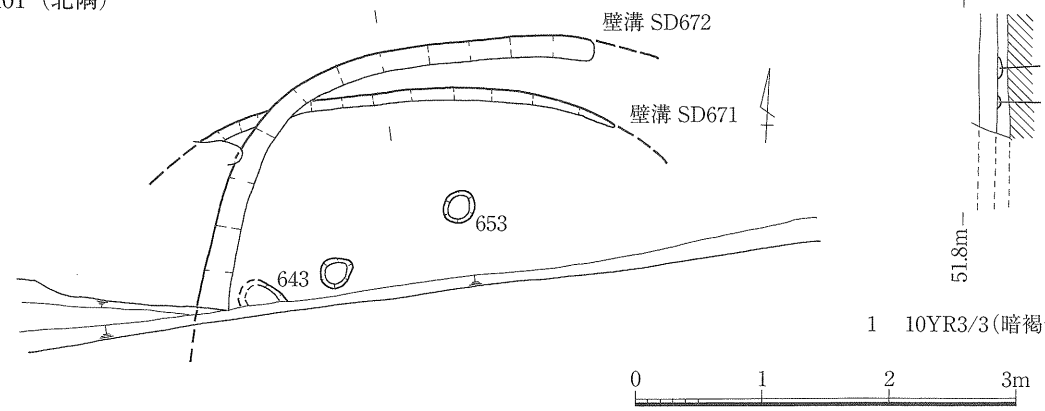
SH09




1　10YR4/2(灰黄褐色)砂質土
2　10YR3/3(暗褐色)砂質土
3　10YR3/3(暗褐色)砂質土
4　炭
5　10YR4/4(褐色)砂混粘質土
6　2.5Y3/1(黒褐色)炭混じり土
7　2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)粘土混砂質土
8　N2/0炭
9　2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)砂混粘質土
10　N2/0炭
11　2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)砂混粘質土
12　2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)粘土混砂質土
13　10YR3/2(黒褐色)粘土混砂質土

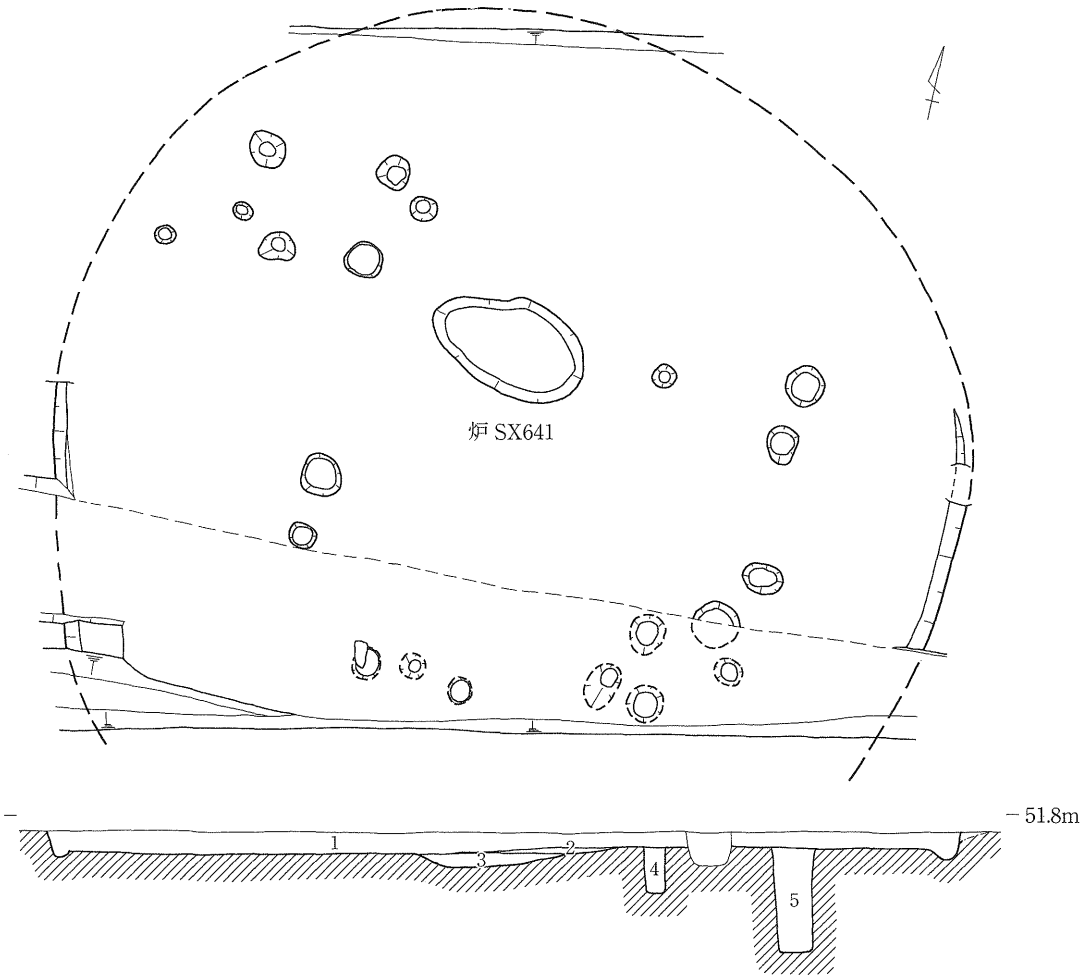
SH01（北隅）



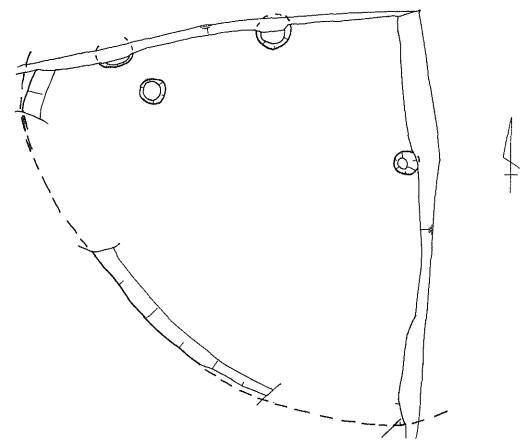

1　10YR3/3(暗褐色)砂混粘質土

図37　6区　竪穴住居跡SH09・01

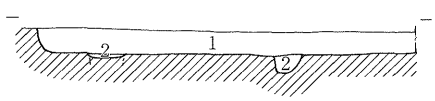
SH08




SH10



1　10YR3/2(黒褐色)砂質土
2　10YR3/2～2.5Y3/2(黒褐色)粘質土
3　2.5Y3/2(黒褐色)粘質土
4　10YR3/2(黒褐色)シルト
5　10YR3/3(暗オリーブ褐色)シルト




1　2.5Y3/2（黒褐色）粘土混砂質土
2　2.5Y4/4（オリーブ褐色）砂質土

図38　6区　竪穴住居跡SH08・10

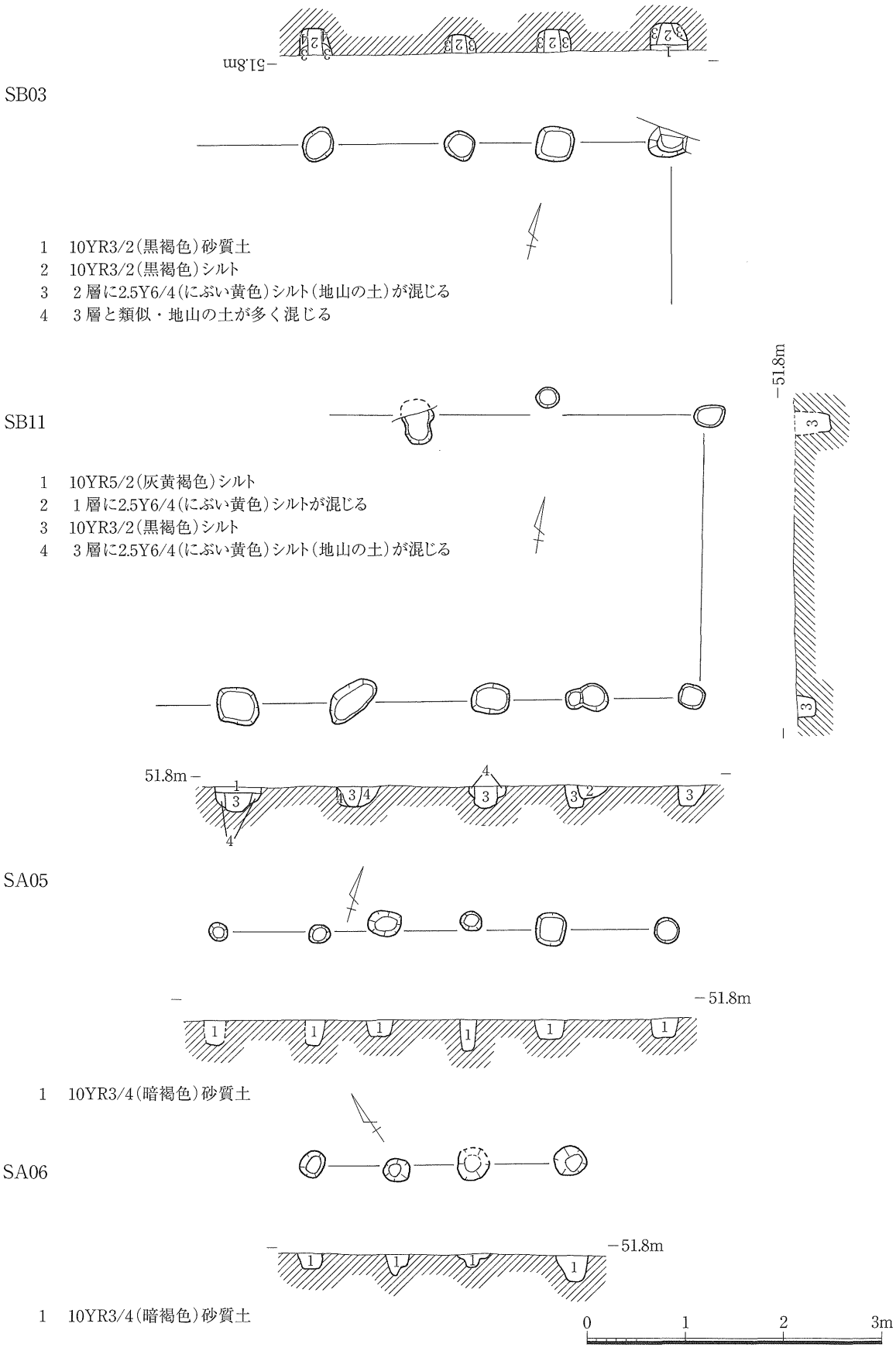



図39　6区　掘立柱建物跡SB03・11、柱列SA05・06

**掘立柱建物跡SB11（旧遺構674）**　建物棟方向がＥ→Ｎ７度を向いた遺構である。Ｅ区には対応する柱列がなく、溝665と上層の土坑を掘削後に確認したピットを柱穴とした建物を想定している。建物は４×１間、4.7×2.9m分を検出した。

**柱列SA05（旧遺構675）**　調査区南東隅で検出した柱列である。柱穴は径20～30cmで６基検出されており、0.7～1.2m間隔で並んでいる。建物棟方向がＥ→Ｎ18度を向いた掘立柱建物跡である可能性が高いものと考えている。

**柱列SA06（旧遺構676）**　竪穴住居SH10掘削後に検出した柱列である。柱穴は径28～32cmで４基検出されており、0.8～1.0mの間隔で並んでいる。建物棟方向がＥ→Ｓ32度を向いた掘建柱建物跡である可能性が高いものと考えている。

**溝SD665**　幅1.0m、深さ10～40cmの溝で、平面形は弧状を呈している。

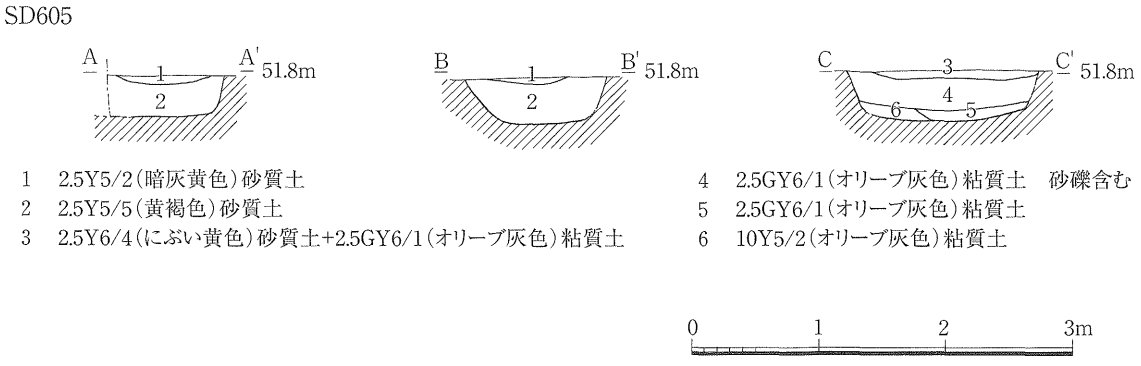
**土坑SK666**　竪穴住居SH08・09・10の間にある土坑である。長さ５m、幅２mの不整楕円形で、弥生土器が微量出土している。竪穴住居の検出面より約５cm掘り下げて検出した。

**＜上層遺構＞**

**素掘小溝群**　調査区の北側で14条、南西で１条確認した。溝は幅が10～40cm、深さ１～５cmで、埋土は３・４層に類似する。方位は座標北を向く。SD601～604で土師皿細片が出土しており、中世～近世の遺構と考えられる。

**溝SD605**　調査区を横断する東西溝で、幅1.1～1.5m、深さ約40cm、延長約18m分を検出した。埋土は黄褐～オリーブ灰色砂質を主体としており、近世の陶磁器が出土した。溝は中央部で底が約15cm上がっており、東側は隣接するＥ区で途切れている。幅・方位の共通する第１区の溝121、第２区の溝201では、ベースとなる土が粘質で保水力のある地点であるので、単なる溝というよりは貯水する目的を兼ねた溝であったものと考えている。

**土坑SK606**　調査区南壁沿いで検出した鎌倉時代の土坑である。深さ20cm、幅2.5m分を検出し、埋土は黄褐色シルト～オリーブ黄色砂質土である。瓦器・土師器片とともにサヌカイト片が出土している。




1　2.5Y5/2（暗灰黄色）砂質土
2　2.5Y5/5（黄褐色）砂質土
3　2.5Y6/4（にぶい黄色）砂質土+2.5GY6/1（オリーブ灰色）粘質土
4　2.5GY6/1（オリーブ灰色）粘質土　砂礫含む
5　2.5GY6/1（オリーブ灰色）粘質土
6　10Y5/2（オリーブ灰色）粘質土

図40　６区　溝SD605

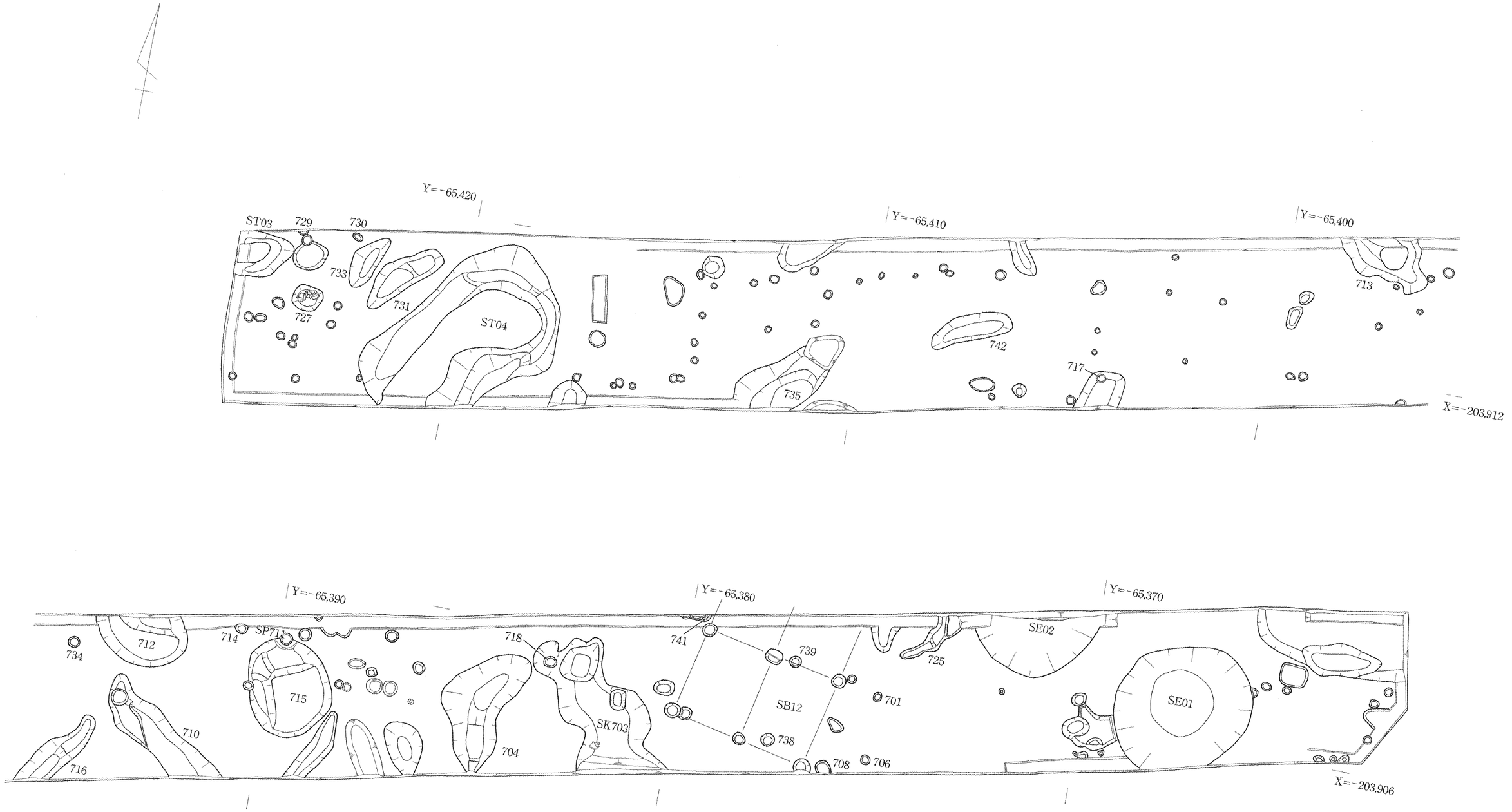



図41　7区　平面図

0　5m

## （3）7区

東西長64.7m、南北幅4.0～4.5m、面積約273㎡。調査区の中央は旧流路が少しずつ位置を変えながら埋没したとみられる砂礫ベースの堆積があり、その西側では弥生時代の墓域（標高51.4m）、東側では鎌倉時代の集落（標高51.5m）を検出した。弥生時代以前から鎌倉時代以降まで旧流路が存在していたものと考えられ、鎌倉時代の集落の廃絶後、東側段丘面の削平を伴う水田開発により水路が付け替えられたものと推定される。

**＜下層遺構＞**

**周溝墓状遺構ST03（旧遺構728）**　調査区北西隅で検出した遺構である。小型で不整方形状に溝が巡っている。溝の幅は20～60cm、深さ30～40cmで、南北1.2m、東西1.5m分を検出した。埋土は暗褐色粘質土で、弥生土器と思われる土器片が出土した。

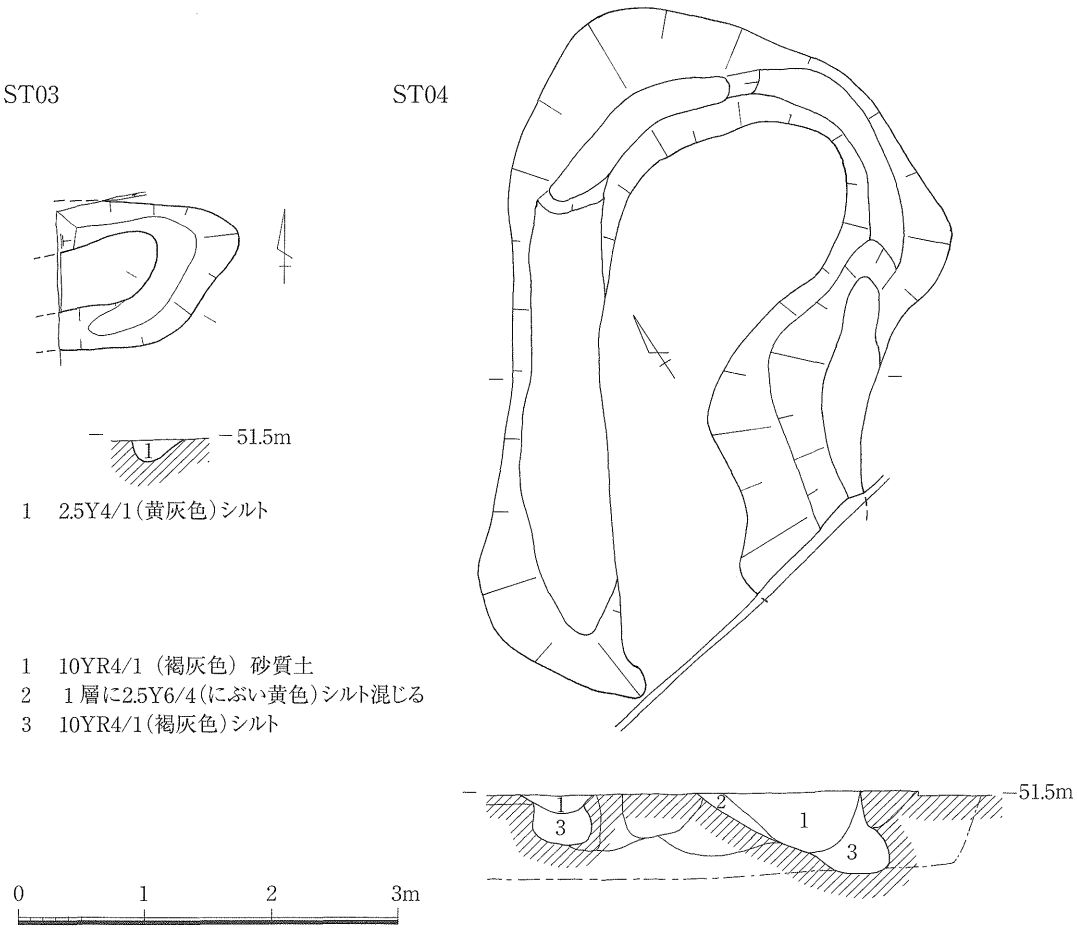



図42　7区　周溝墓状遺構ST03・04

**周溝墓状遺構ST04（旧遺構732）**　調査区西側で検出した不整方形の周溝墓状の遺構である。遺構の規模は約5.5×3.5mで、溝幅が0.5～1.2m、溝の深さは浅いところで20cm、深いところで60～80cmである。墳丘に相当する部分が狭くあまり墓に適していないが、集落との立地関係や当該地域付近の周溝墓に周溝が細く深いものがあることから、ひとまず周溝墓の可能性を考えている。埋土は褐灰色砂質土～シルトで、弥生土器と思われる土器片が出土した。

調査区中央においても、平面プランが周溝墓状に見える溝の組み合わせが存在する。遺構713のほか、遺構710と716の組み合わせは周溝墓の可能性も考えられるが、弥生時代の遺構か鎌倉時代の遺構か、あるいは遺構ではないのか判断材料がないので、周溝墓状遺構として数えていない。

**＜上層遺構＞**

調査区中央では下層遺構と区別のつかないものが多いが、下層遺構が暗褐色を呈するのに対して、埋土はにぶい黄褐色を呈するものが多い。

**掘立柱建物跡SB12（旧遺構702・705・707・709・740他）**　調査区東半で検出した鎌倉時代の掘立柱建物跡である。東西２間、南北１間以上で、平面プランは3.6×2.3m以上。北側に１間続く総柱建物である可能性を考えている。柱穴は径約30～40cm、深さ20～34cmで、埋土はにぶい黄褐色等で、瓦器・土師皿片が出土している。

**井戸SE01（旧遺構722）**　調査区東側で検出した鎌倉時代の井戸で、検出面の径が約3.5m、深さが2.1mある。円錐形の掘方を有し、上半には河原石が散在している。最下部には緑泥片岩の板石と河原石で組んだ枡状の部分が造られており、その中から曲物の細片が出土している。河原石による石組井戸で最下部の板石組みの中に井筒を据えた構造の井戸と推定される。

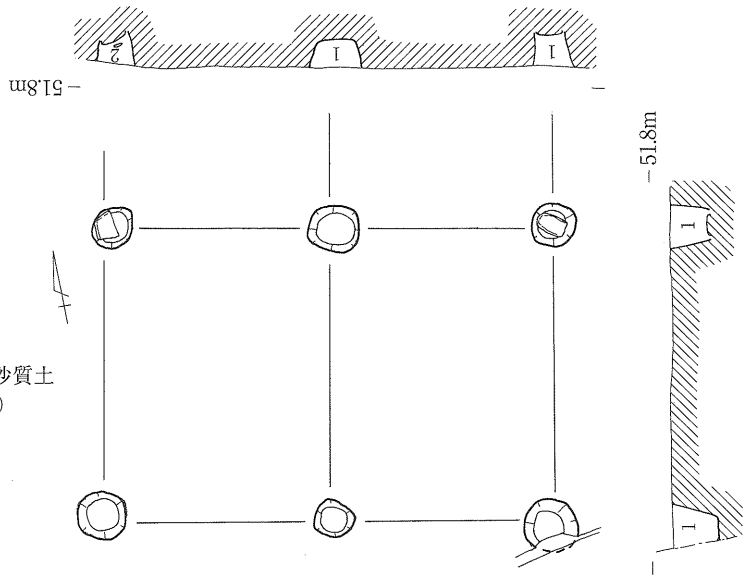
埋土は１・２層が灰黄褐色砂礫層、３層がにぶい黄褐色粗砂、４層は黄灰色砂混粘土、５・６層は灰色粘土である。井戸の下部約60cm分は砂礫層にあたっており、湧水量は非常に多い。掘方に相当すると思われる７層から出土した瓦器埦の年代観から、隣接する井戸SE02の廃絶を受けて造られたものと考えている。

**井戸SE02（旧遺構723）**　調査区東側の北壁沿いで検出した井戸で、北半は調査区外となる。井戸最下部の状況は確認できなかったが、掘方はSE01と同様の円錐形を呈している。井桁や井筒、あるいは河原石の散布等は確認できなかったが、掘方の規模・形状からSE01と類似する規模・構造の井戸と推定している。埋土は12層に分層でき、４～９層から出土した多量の瓦器埦・土師皿は、当該地域の13世紀代の一括資料として資料価値が高い。

**土坑SK703**　掘立柱建物跡SB12の西にある、不整形の土坑である。南北3.5m以上、東西２m前後で、深さが20cmあり、埋土からは瓦器埦・土師皿片が少量出土した。

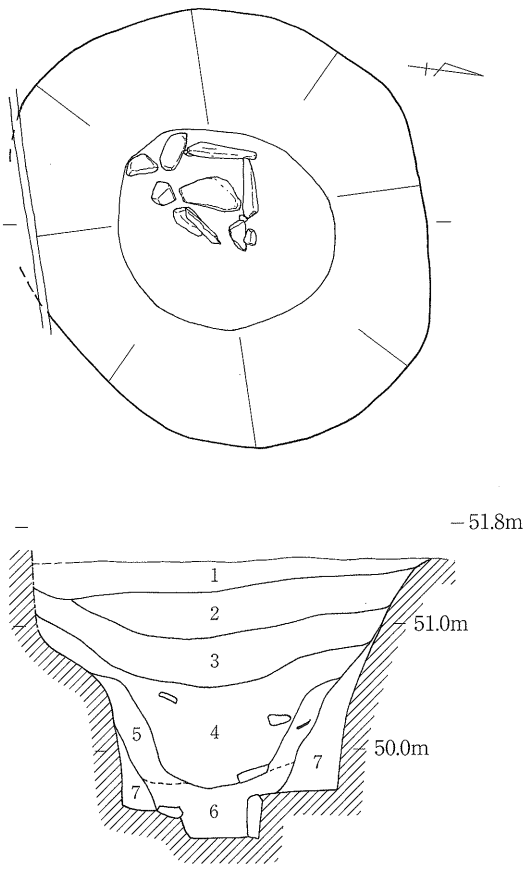
**ピットSP711**　径30cm、深さ32cmで、瓦器埦・土師皿片が出土した。

SB12



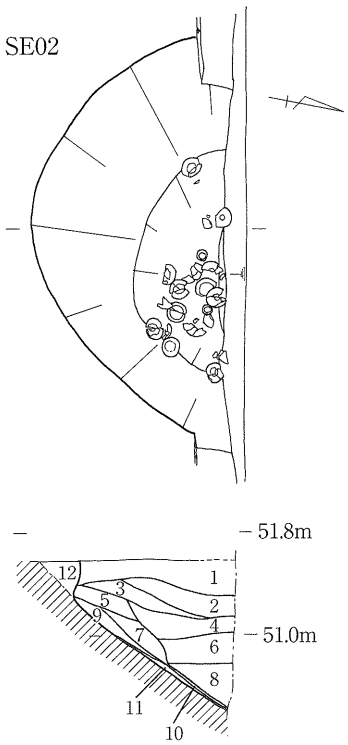

1　10YR4/3(にぶい黄褐色)砂質土
2　10YR3/3(暗褐色)粘質土)

SE01




1　10YR4/2(灰黄褐色)砂礫混粘質土
2　10YR4/2(灰黄褐色)粗砂
3　10YR4/3(にぶい黄褐色)粗砂
4　2.5Y4/1(黄灰色)砂混粗土
5　N5/1(灰色)粘土
6　N5/1(灰色)粘土
7　5層と2.5Y4/3(オリーブ褐色)砂礫混砂質土の混層

SE02




1　10YR4/1(褐灰色)砂質土
2　N5/1(灰色)粘土　粗砂・炭 含む
3　2.5GY6/1(オリーブ灰色)砂質土
4　2.5Y5/2(暗灰黄色)砂質土
5　5Y6/2(灰オリーブ色)砂質土
6　5Y6/5(オリーブ黄色)砂質土
7　5Y6/2(灰オリーブ色)砂質土
8　5Y5/2(灰オリーブ色)粗砂
9　5Y6/1(灰色)砂質土
10　炭層
11　2.5Y5/1(黄灰色)粘土
12　2.5Y4/3(オリーブ褐色)砂礫混砂質土　やや締まりなし

図43　7区　掘立柱建物跡SB12、井戸SE01・02

## （4） 8区

東西長13.0m、南北幅2.3～3.2m、面積約35㎡。東から西へ降る斜面地にあたり、ベースとなる地山は砂礫土である。標高は51.2～52.2m。地山の傾斜は、西側では約2度の緩斜面であるが、東端では最大36度に達する。8区西側の標高が最も低くなっており、土坑SK801がみられる。地山の上には黒～暗褐色粘質土が3層堆積しており、中世以前の堆積と判断されるが、遺物は出土していない。中世の堆積は暗褐色～にぶい黄褐色の粘質土であり、多量の瓦器埦・土師皿と少量の中国製青磁・国産陶器・東播系須恵器が出土している。これらの中世の遺物を含む堆積の上には遺物量の少ない灰黄褐色砂質土が堆積しており、4区やA区同様に、東側段丘上を削平した土を数度に渡り廃棄した結果であろうと判断される。

**＜下層遺構＞**

**土坑SK801**　段丘下面にあたる地山面で検出された土坑で、暗褐色粘質土で埋没する。遺物は出土しておらず、詳細な年代は不詳である。

1　5Y4/1（灰色）シルト…近代以前の耕作土
2　5Y4/2（灰オリーブ色）シルト…床土
3　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質土…遺物ほとんど混じらない
4　2.5Y4/1（灰色）シルト
5　10YR4/2（灰黄褐色）砂質土
6　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質土
7　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質土
8　10YR3/4（暗褐色）砂質土
9　10YR4/3（にぶい黄褐色）砂質土
10　10YR4/4（褐色）粘質土…焼土多量
11　10YR3/3（暗褐色）粘質土…焼土・土器多量に含む
12　10YR4/3（にぶい黄褐色）粘質土
13　10YR3/4（暗褐色）粘質土
14　10YR3.5/4（暗褐色）粘質土
15　10YR3/4（暗褐色）粘質土
16　10YR2/1（黒色）～2/2（黒褐色）シルト
17　10YR3/3（暗褐色）粘質土
18　10YR4/3（にぶい黄褐色）粘質土
19　10YR2/1（黒色）シルト
20　10YR4/2（灰黄褐色）砂
21　10YR2/3（黒褐色）粘質土
地山　西側　5Y4/2（灰オリーブ色）砂
　　東側　2.5Y5/4（黄褐色）砂礫

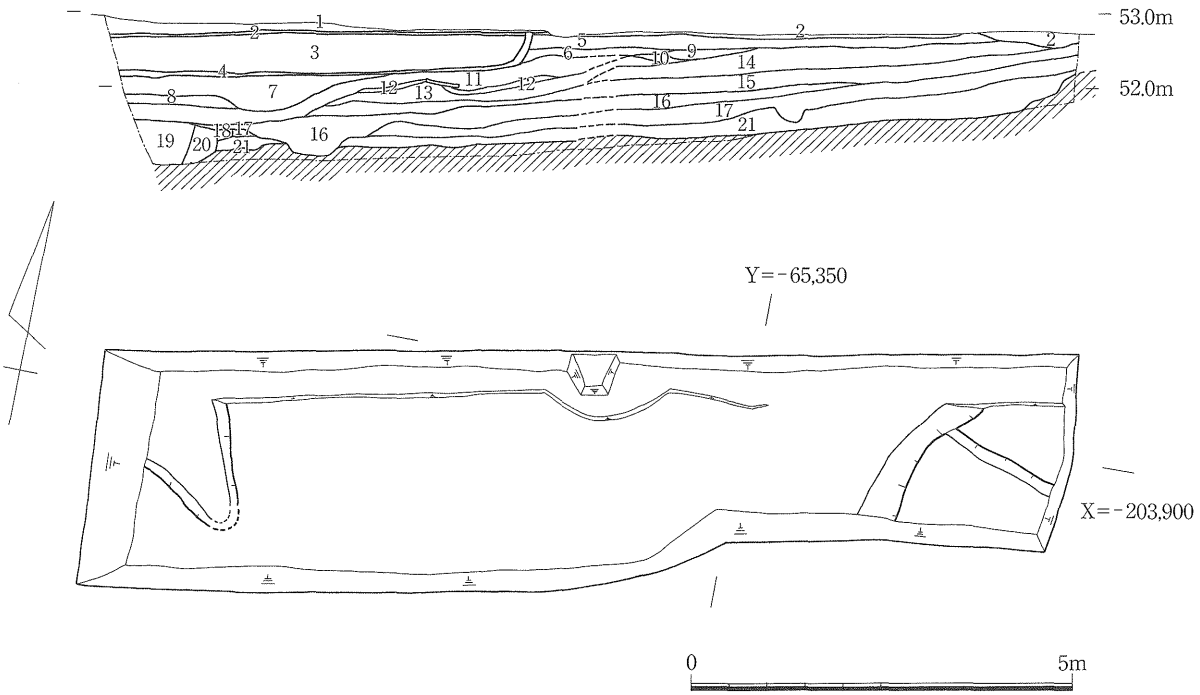



図44　8区　平面図・北壁土層断面図

## 第４節　出土遺物（１～８区）

出土遺物はコンテナ37箱分あり、総数8,179点であった。弥生時代中期前半の遺物と鎌倉時代の遺物が約半分ずつの割合で出土している。室町時代以降の遺物はほんの微量である。出土した土器の内訳は、弥生土器3,016点、土師器2,576点、瓦器2,189点、東播系須恵器26点、陶磁器他49点であった。石器の内訳は、サヌカイト製の石器等が221点・569.9ｇ（石鏃17点、スクレイパー１点、石錐１点、その他剥片等202点）、その他の石器12点であった。このほか、瓦20点、焼土塊56点、鉄片15点、鉄鏃１点、野上鉄道の釘５点が出土した。

### （１）弥生時代の遺物

図45は１～３区の遺構から出土した弥生土器である。１はSK129出土、弥生土器底部。径5.5cm、平底である。２～４はSK151出土、弥生土器片。２は口縁部が折れ曲がり、口縁部下2.5cmに突帯状の部分がある。３は櫛描紋のある土器片。４は底部。５はSK175出土、口縁部片。直線的に開き、口縁部に端面を持つ。６はSP203出土、底部。７～11はSK303から出土した。７は広口壺口縁部、口縁端面下部に刻みを施す。８・９は紀伊型甕の口縁部、10・11は底部片である。１区では14基、２区では16基、３区では８基の遺構から弥生土器が出土しているが、ほとんどが細片である。

図46は５区の竪穴住居SH07（旧遺構501）出土遺物である。12～16は上層から出土した弥生土器。12は径9.6cmの直口壺口縁部で、２条の櫛描き平行線紋が施されている。13は径18cmの広口壺。14・15は紀伊型甕。14は復原口径16cm、15は径30.5cm。16は鉢。口縁部は外側へ少し屈曲しており、体部は半球形を呈する。内外面をハケで調整する。径31.6cm、推定復原高約16cmである。17～25は中層から出土した弥生土器。17は櫛描き波状紋と平行線紋のある壺片。

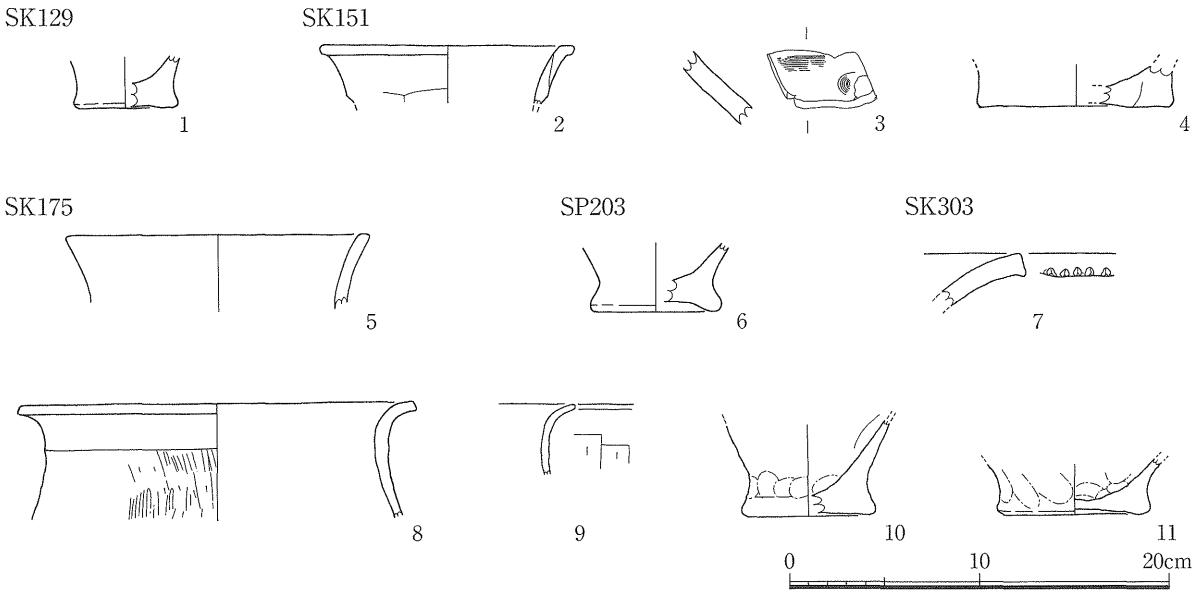



図45　弥生時代の遺物①（１～３区）

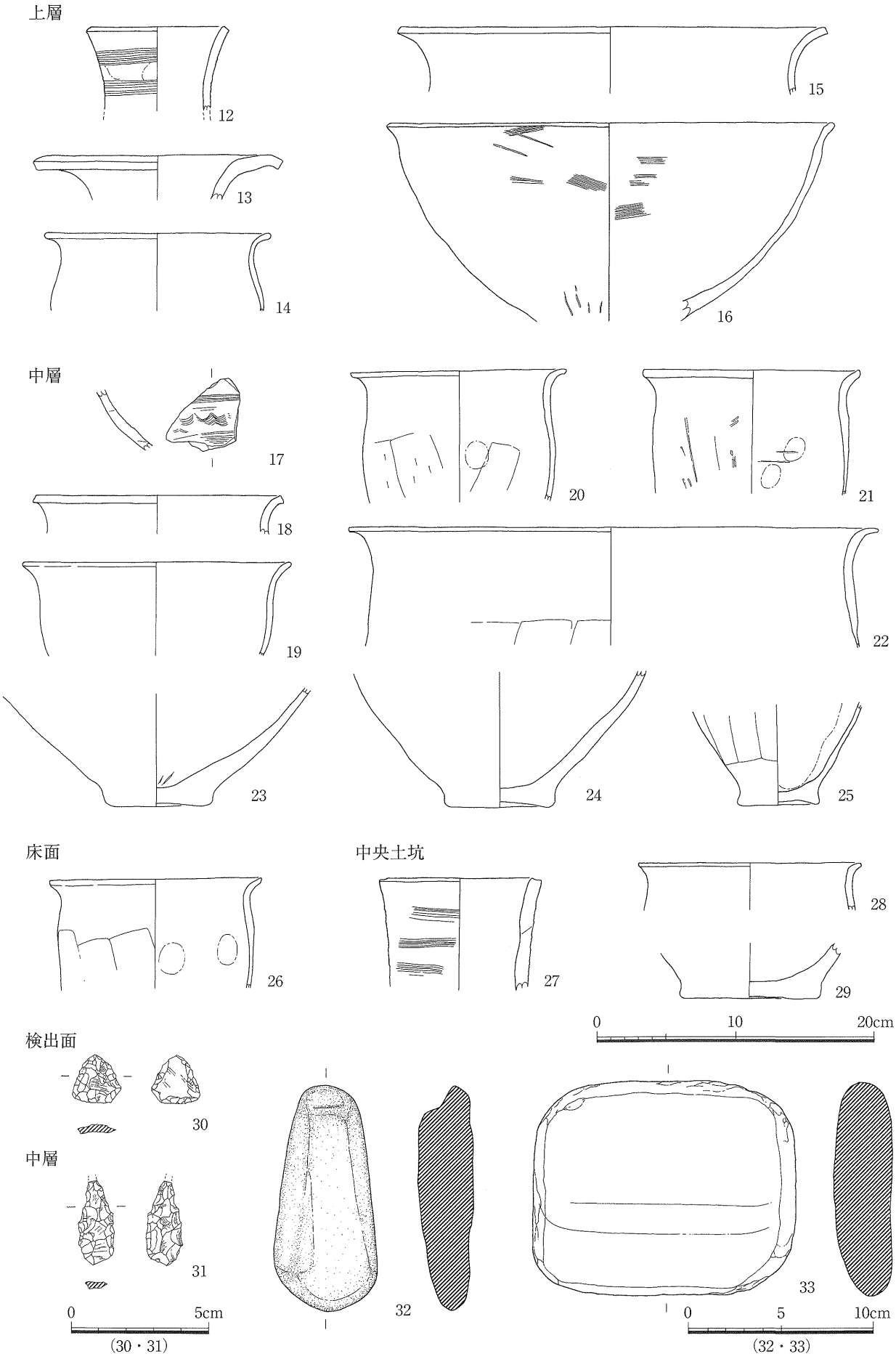



図46　弥生時代の遺物②（5区　SH07）

18～22は紀伊型甕口縁部。体部は縦方向のケズリを施し、砂粒は脱落している。口縁部はなだらかに屈曲し、体部は口縁部より内側に収まっている。23～25は底部。26は床面から出土した紀伊型甕。27～29は中央土坑から出土した。27は直口壺、28は紀伊型甕、29は底部片。30・31は石鏃。30は検出面、31は中層から出土した。サヌカイト片は計14点、約28ｇ出土した。32は砂岩製の磨製石斧。33は片岩製の台石。共に中層から出土している。

図47は５・６区の遺構から出土した遺物である。34・35は掘立柱建物跡SB09の柱穴SP502から出土した。34は口縁部の下に貼り付け突帯を巡らせる直口壺の口縁部。表面が剥離し分かりづらいが、突帯の上には波状紋を施している。口径21.4cm。35は壺の体部。掘立柱建物跡SB09は周囲の遺構よりやや新しく中期後半の遺構と考えられる。36～39はSK510から出土した。36・37は紀伊型甕。ケズリを施す位置はやや口縁部から離れている。38は底部片。39は緑泥片岩製の石包丁片。刃部は直線的で、両面から２段階に削り出されている。40は櫛描き紋の施された壺の体部。41は壺の底部片。42は紀伊型甕口縁部、43は底部。SK609から出土している。44はSK614出土、広口壺。口縁端部が僅かに垂下している。

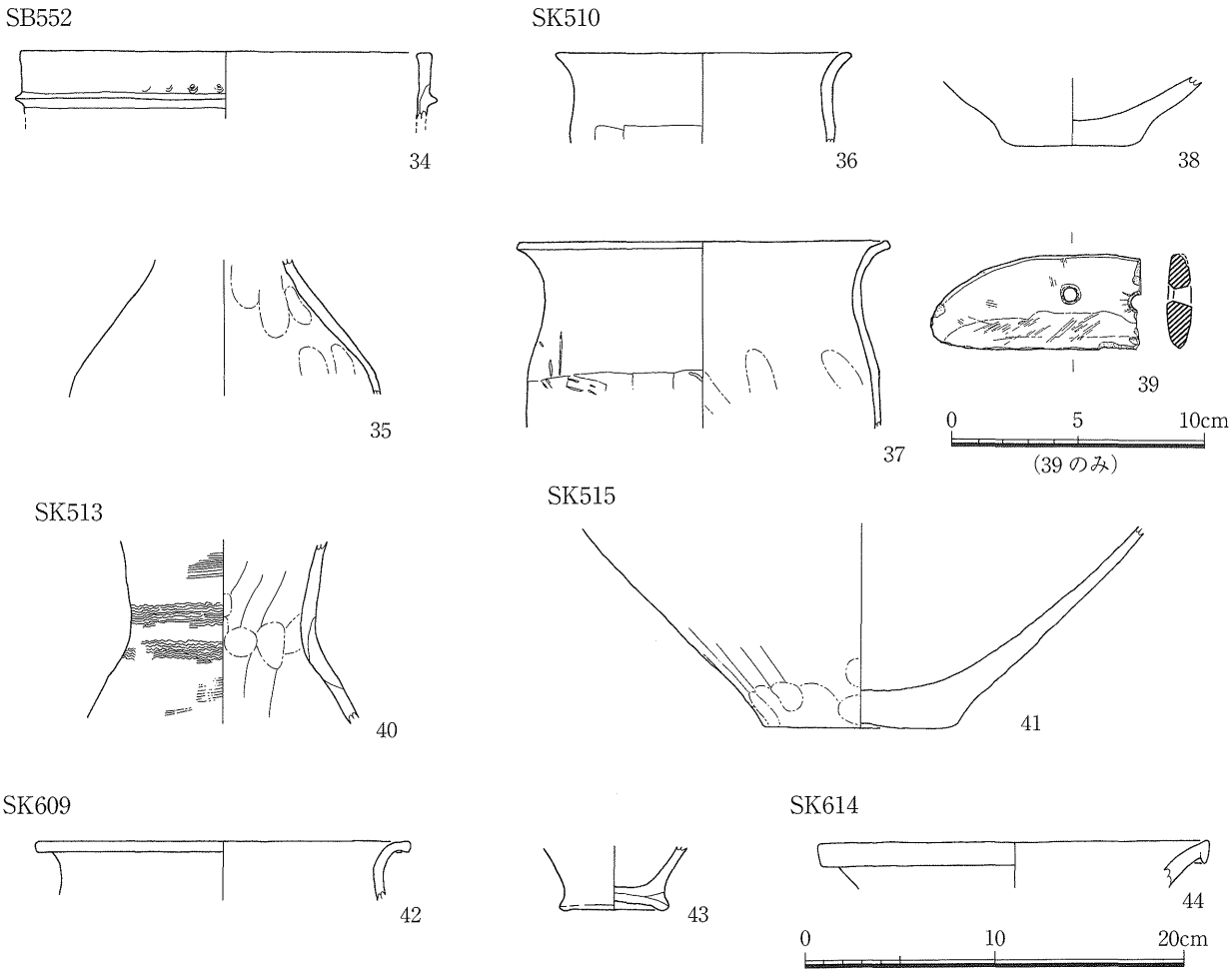



図47　弥生時代の遺物③（５・６区）

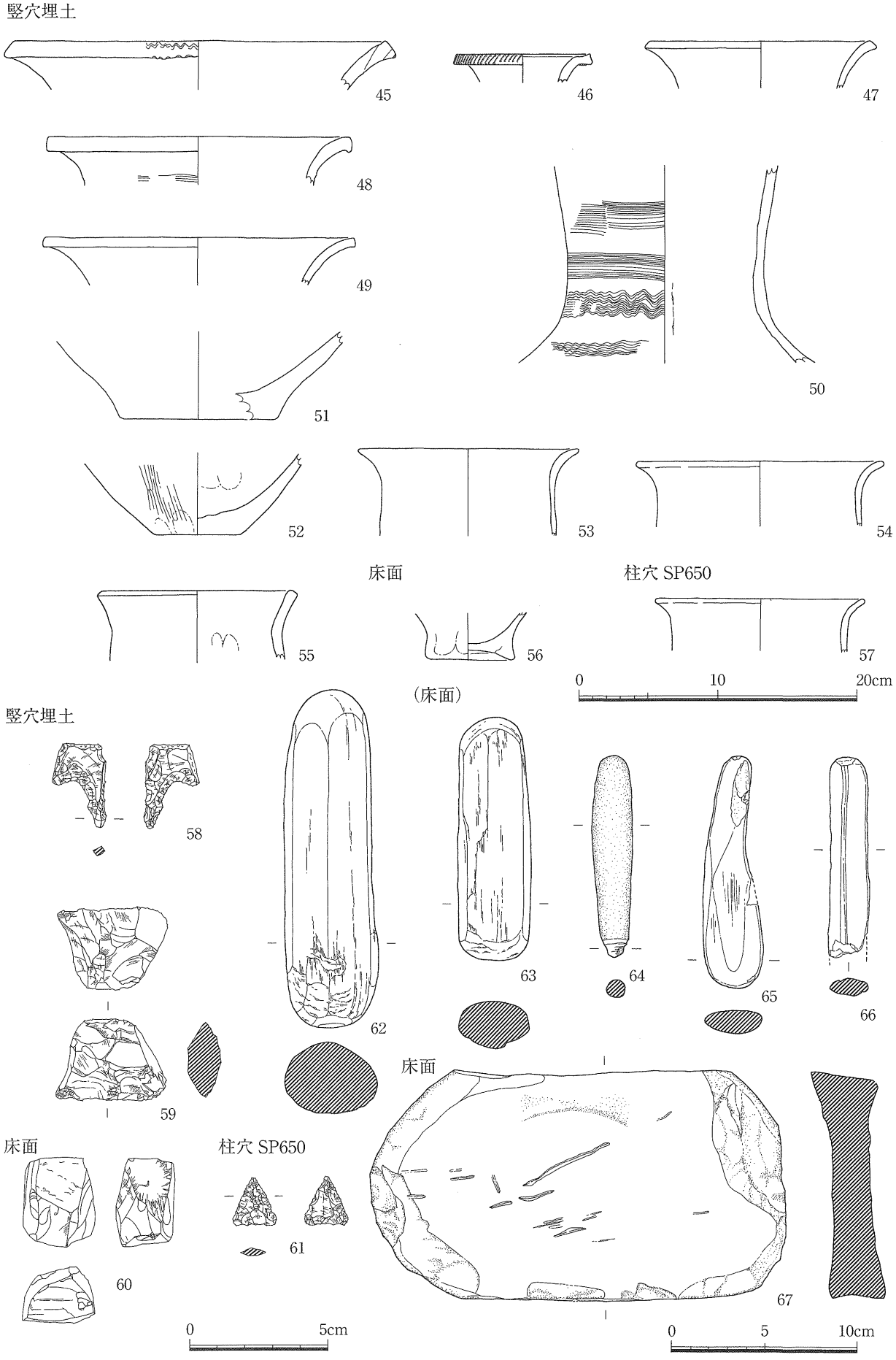



図48　弥生時代の遺物④（6区　SH08）

図48は竪穴住居SH08の出土遺物である。45～54は竪穴の埋土から出土した遺物である。45～49は広口壺の口縁部。口縁端面には波状紋（45）、列点紋（46）の施されているものと、無紋（47～49）のものがある。45は径26.0cm、46は径9.6cm。50は壺の頸部。櫛描き平行線紋と波状紋が各2単位確認できる。51・52は底部。51は底部が外反気味、52は内湾気味に立ち上がる。53・54は紀伊型甕の口縁部。ケズリの単位は判然としない。55・56は床面から出土した甕か鉢の口縁部と底部片。57は柱穴SP650から出土した紀伊型甕の口縁部。58～61はサヌカイト製の石器。58は石錐、59はスクレイパー。共に竪穴埋土から出土している。60は床面から出土した石核、61は柱穴から出土した石鏃。床面を中心にサヌカイト製品・剥片が約130ｇ、計30点出土している。62～66は棒状の石製品。62・63は白色系の片岩製で端面に研磨痕がある。62は根元から3.5cmの位置に溝状の窪みがある。64は緑泥片岩製で、一面が平坦になった蒲鉾形の断面形をしている。一端に回転運動による擦痕のあるもので穿孔具の可能性も考えられる。65は緑泥片岩で、やや下膨れの形状を呈す。66は薄い楕円形をした片岩製の棒状石製品。67は目の細かい砂岩製の砥石。両面とも使用されている。62・64～66は埋土から、63・67は床面から出土した。

図49は竪穴住居SH09出土遺物である。SH09はSH01・07の下で検出された遺構であり、3時期の炉と壁溝が確認できた。68～70は弥生土器。68は竪穴埋土から出土した紀伊型甕である。口径

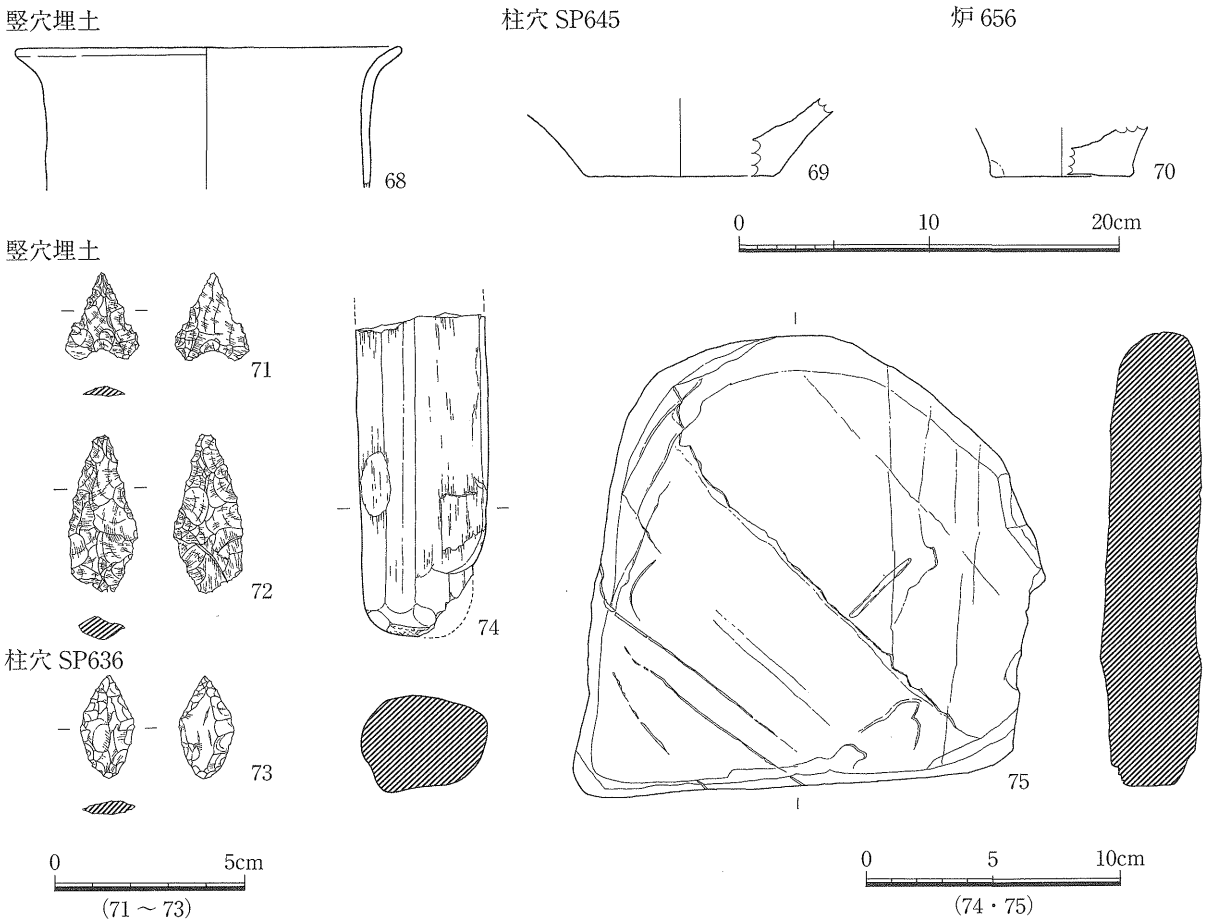



図49　弥生時代の遺物⑤（6区　SH09）

20cmで、体部はまっすぐ下へ伸びている。69は柱穴SP645から出土した底部、70は炉跡SX656から出土した底部片である。71～73はサヌカイト製の石鏃。71・72は竪穴埋土から出土した無茎石鏃と有茎石鏃。73は柱穴SP636から出土した、木の葉形の石鏃。サヌカイト製品・剥片は床面を中心に57点・約76ｇ出土した。74は62同様の石棒と考えられる棒状石製品。75は台石と考えられる平坦な石である。竪穴の壁面にたてかけられた状態で出土している。

SH01は当調査区では壁溝しか検出できなかったため出土遺物がないが、隣接するＥ区では床面を中心に多量の石器が出土している。また、包含層と４区の東側段丘の整地土からも、弥生土器・サヌカイト片が出土している。

### （２）鎌倉時代の遺物

ほとんどの遺物は７区東半と８区、２基の井戸と段丘整地土から出土している。瓦器埦・土師器皿が多量に出土しており、各遺構・土層の傾向を示す好資料となっている。井戸02は９層に分層しているが、取り上げは掘りながら土色の違いが認識できる５つの層に分類して掘削し、残存状態の良いものについては図化後に取り上げている。

図50は２・３・７区の遺構出土遺物である。76はSD201から出土した土師質の皿、あるいは埦の破片。SD201からは他に遺構の年代を探ることのできる遺物は出土していない。77・78は３区の掘立柱建物跡SB08の柱穴から出土した土器。77は瓦器埦で、体部は薄手で直線的に開く。78は土師器で、径が大きくやや浅めの形状を呈している。79は３区SK375から出土した瓦器埦。径が小さく、器高が高い。80は瓦器埦、81は土師器小皿。共に７区掘立柱建物跡SB12の柱穴から出土している。82は７区SP711から出土した土師質の甕。83はSK740から出土した土師器小皿。

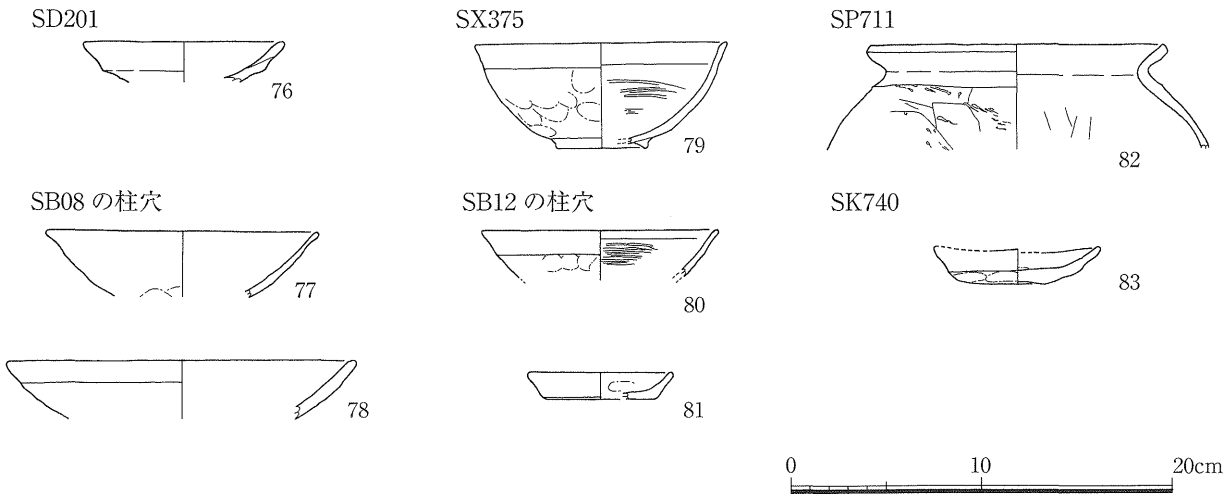



図50　鎌倉時代の遺物①（２・３・７区）

図51は７区の井戸SE１（旧遺構722）から出土した土器である。84～91は瓦器埦。84は１層、85は２層、86は３層、87は４層、88は４・５層、89・90は６層、91は掘方から出土している。91は容量が大きく、断面三角形の高台がつけられている。体部は指オサエで整形しており、口縁部にはヨコナデを施す。内面は圏線状のミガキと連結輪状暗紋を施す。調整痕は下層から上層へ向かうにつれ、簡略化される傾向があり、高台も形骸化する。容量は上層へゆくほど減少しており、掘方・６層では口径14.0cm、器高約4.8cm、４・５層では口径13.6～14.6cm、器高3.8～4.0cm、２・３層では口径12.8～14.0cm、器高約3.2cmである。口縁部内面に沈線は見られない。92は土師器皿。底部は平坦で体部は直線的に開く。93～97は土師器小皿。93は２層、94から97は３層から出土した。93は厚手で内面にハケ状の工具を少しずつ回転させ、止めた痕跡が残る。94・95は底部不調整で、口縁部は外反する。96は直線的なつくりをしている。97は底部糸きりの皿とみられる。98は東播系須恵器の鉢。復原口径は26.7cm。99は須恵器壺。肩部と底部の破片があり、底部は回転糸切りを行う。SE01からは13世紀を中心とする遺物が出土している。掘方は12世紀後半、２・３層からは14世紀初頭にかかる可能性も考えられる遺物が出土している。

図52は７区の井戸２（旧遺構723）から出土した土器である。100～111は瓦器埦。100・101は１・２層、102～107層、108は６層、109は９層、110は掘方に相当する壁面、111は４～７層から出土した。１・２層及び掘方から出土した瓦器埦を除いて、一括性の高い資料と考えられる。

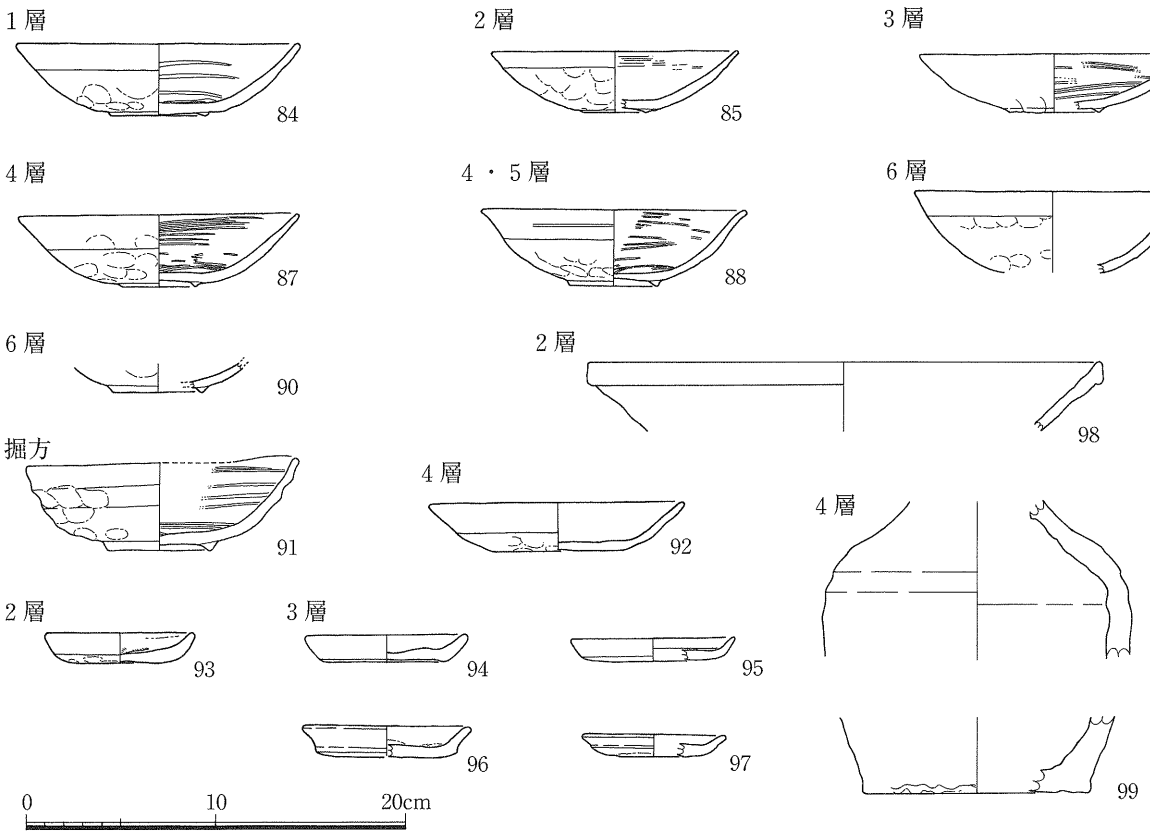



図51　鎌倉時代の遺物②（７区　SE01）

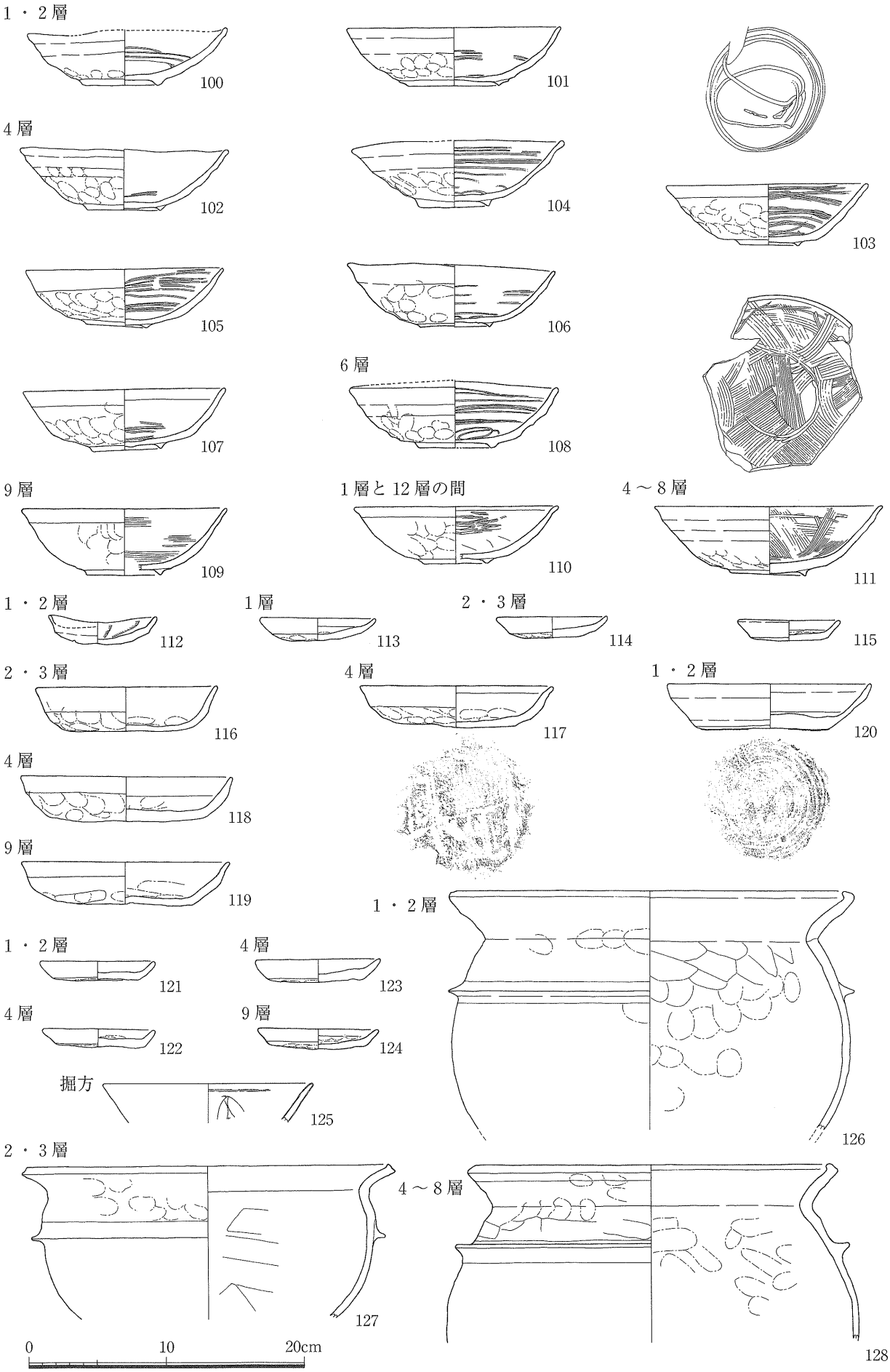



図52　鎌倉時代の遺物③（7区　SE02）

体部は連続する指オサエを施し、口縁部を回転ナデで整形する。内面の圏線ミガキはやや粗く、高台は断面三角形を呈している。110は掘方に相当すると考えた壁面出土遺物であるが、1・2層出土遺物とした方が良いものと考えられる。111は底部が厚く、口縁部から体部にかけて幅の狭い回転ナデを施す瓦器埦で、内面がミガキではなく、ハケ調整である点が特異なものと評価できる。112～115は瓦器小皿。底部がやや厚く、口縁部が開く傾向がある。116～120は土師器皿。116～119は底部不調整か板目の残るもので、内外面を指オサエで成形し、口縁部を横ナデする。

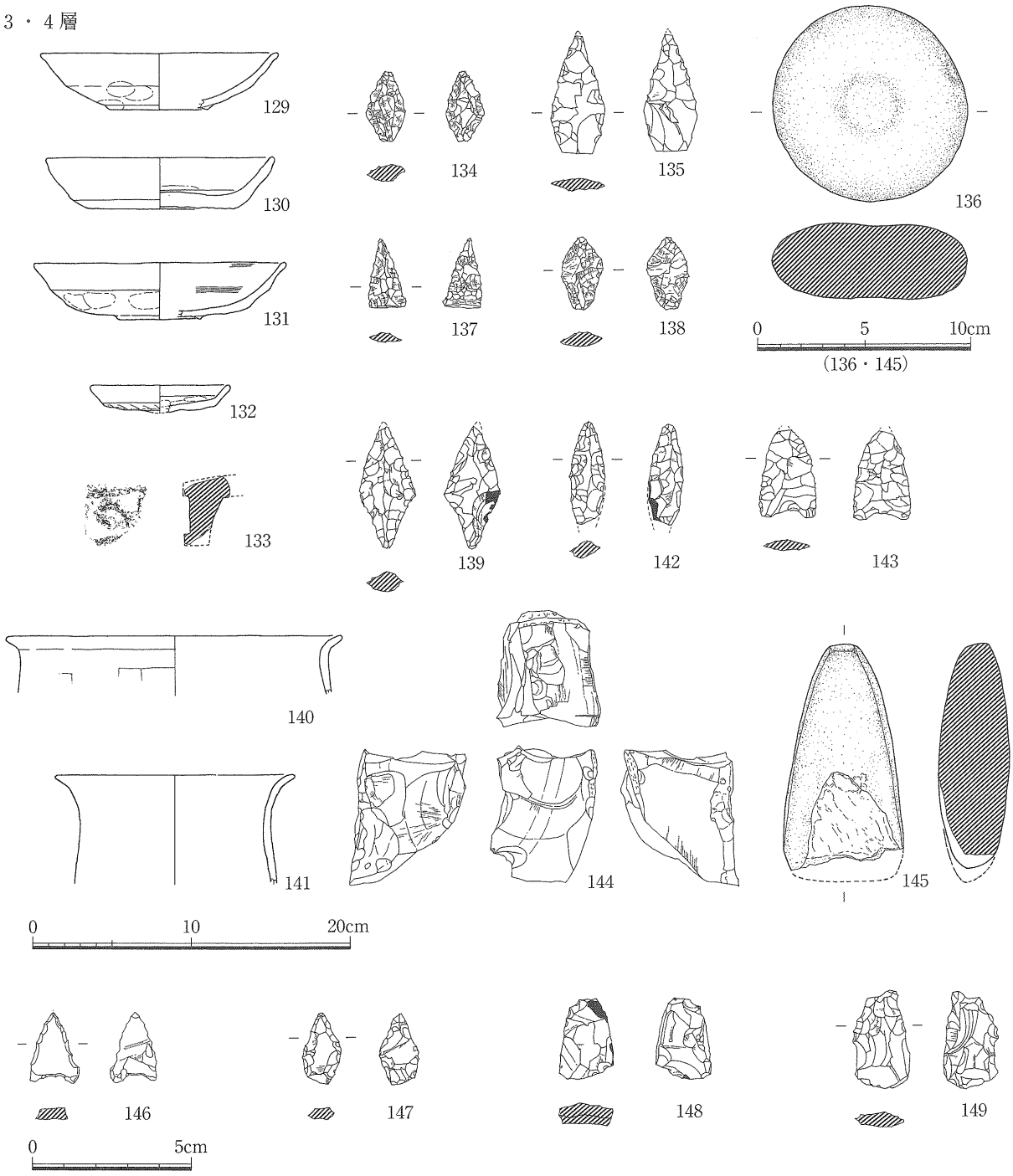



図53　包含層・その他の遺物

116は口径13.0cm、器高3.2cm。119は口径14.8cm、器高3.1cm。120は底部回転糸切りの皿。厚手の底部から口縁部を引き出し、先端を丸めている。121～124は土師器小皿。121は平坦な底部から外側へ直線的に伸びる口縁部をもつ。122・123は底部糸切り後、指オサエを行い、厚手なつくりをしている。124は底部不調整の小皿。125は掘方から出土した青磁碗。体部外面に鎬蓮弁紋がある。126～128は土師質の土釜。「く」の字状に曲がる口縁部をもち、口縁端部は内側へ突出する。肩部には短い鍔がめぐる。126は口縁部と体部の径が同程度であるが、127は口縁部径が大きく、128は体部径が大きい。内外面ともに指オサエがみられる。SE02からは13世紀代の遺物が多量に出土している。出土内訳は瓦器埦704点（67.7%）、土師器334点（32.1%）、東播系須恵器１点（0.1%）青磁１点（0.1%）である。

### （３）包含層・その他の遺物

図53は包含層とその他の遺構混入遺物である。129・130は３層から出土した瓦器埦と土師器皿。131・132は４層から出土した瓦器埦と土師器小皿。133は５区の側溝から出土した軒平瓦片である。土師質焼成で、顎は貼付技法による。瓦当紋様は判然としないが、鎌倉時代か室町時代に属する瓦であろう。３・４層は上層遺構面から出土した遺物と同年代の遺物が出土する包含層と評価できる。なお、３層からは染付片が出土している。134～139は３・４層から出土した弥生時代の石鏃と凹み石である。140・141は５層と５ｂ層から出土した弥生土器甕片である。144は石核、145は磨製石斧。５層と５ｂ層は下層遺構と同年代の遺物が出土する包含層として評価できる。古墳時代から平安時代にかけての遺物は出土していない。

146～149は鎌倉時代の遺構である６区上層遺構SK606から出土した石鏃である。平坦で粗いつくりをしており、下層遺構から出土している遺物と比べ、新しいものとも考えられる。

### （４）第４・８区堆積土（東側段丘面整地土）の遺物

図54は４区の堆積土から出土した遺物である。東側段丘上を削平した土が段丘裾部に堆積したものとみられ、出土する遺物の年代に逆転現象がみられる。上層には弥生時代の遺物がまとまって出土する部分（SK401）があり、弥生土器壺口頸部（150）、底部（151）等が出土している。Ａ層からは東播系須恵器鉢（152）、Ｂ層からは丸瓦（153）、土師器皿（154）が出土している。Ｃ層からは弥生土器底部（155）、東播系須恵器鉢（156）、土師器土釜（157）のほか瓦質土器片が出土している。158～178は８区の堆積土から出土した遺物である。158～162は側溝及び台風の影響による壁面崩落土から出土した青磁碗と土師器皿。163は備前焼擂鉢。164は瓦器の鉢、165・166は土師器小皿。167・168は土師器小皿、169は平瓦。170は瓦器埦、171は瓦器小埦、172は土師器皿、173～175は土師器小皿、176は東播系須恵器鉢。177は土師器小皿。178は土師器皿。出土遺物からは、整地された年代は室町時代頃と推定される。

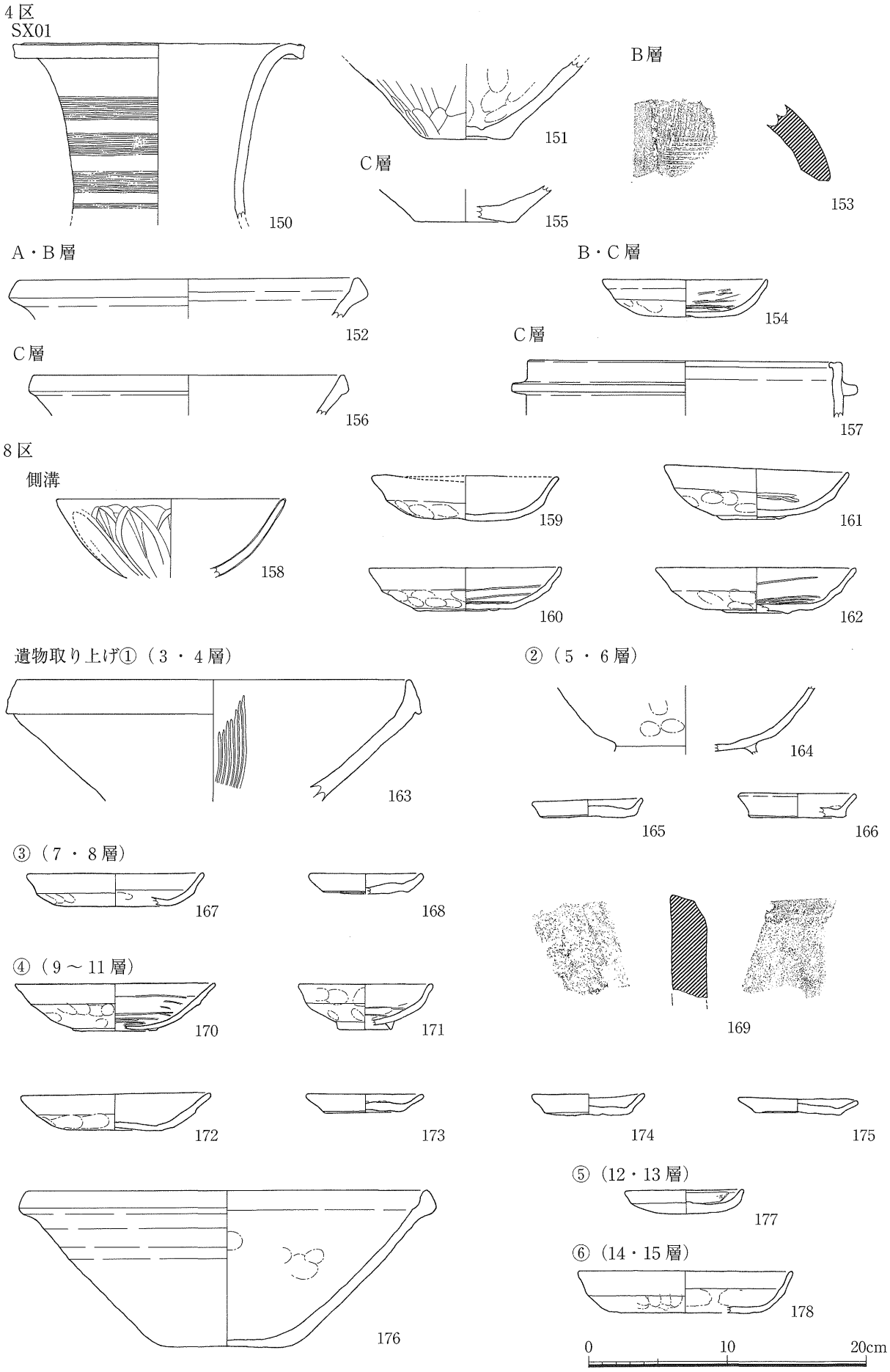



図54　4・8区堆積土（東側段丘整地土）の遺物

# 第４章　総括

## （１）弥生時代の野上中南遺跡

調査区の西半で、弥生時代中期前半の集落を確認した。集落は地盤の安定した１・２・５・６区に形成されており、竪穴住居跡８基、掘立柱建物跡８～10棟を検出した。調査面積も限られており、竪穴住居の建て直しや柱列の存在などから単純に比較はできないが、竪穴住居跡の数に比べ掘立柱建物跡の数が多い特徴が認められる。

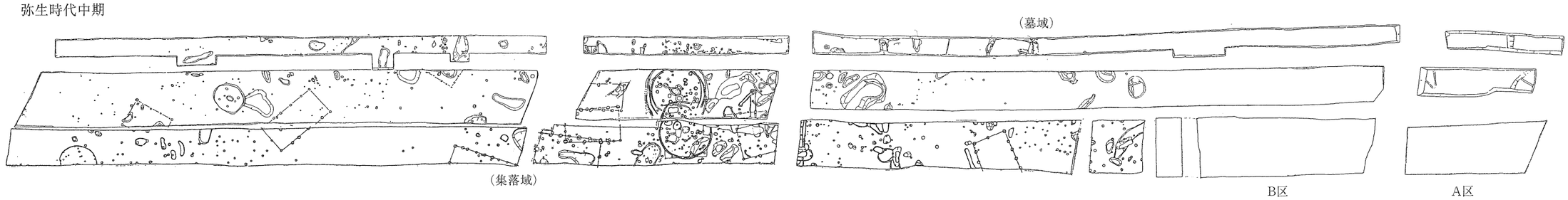
竪穴住居跡は松菊里型と呼ばれる中央土坑とその両脇に柱穴をもつ構造のものを確認した。SH07では床面に四本の柱を据えたとみられる浅い穴が検出され、松菊里型竪穴住居の構造の変化を探る貴重な成果となった。隣接する溝ノ口遺跡や海岸部へ抜けるルート上にあたる大野中遺跡等でも検出されているが、中央施設のほかに主柱穴が伴うタイプのものが分布していることがより明確になってきている。また、小判形を呈するSH05においても、松菊里型の中央施設と考えられるものが検出されている。SH02では焼失した住居を検出し、竪穴住居の屋根にあたる木材が放射状に検出された。SH01・08・09では、多量のサヌカイト製の石鏃や剥片と石棒や石皿等が出土している。松菊里型住居がⅡ様式後半、石器を多数出土したSH01・08・09がⅢ様式前半頃に相当する。SH03・04については出土遺物がないが、形状から弥生時代の竪穴住居ではないと考えている。

集落の東のやや不安定な地点には周溝墓とみられる遺構が４基検出されており、墓域を形成しているものと考えられる。この遺構は墳丘に相当する部分が狭く、溝がいびつであるが、西方約4.5kmにある亀川遺跡においても幅が狭くて深いいびつな周溝をもつ墓が確認されており、墓と考えておきたい。墓域の東側は流路とみられ、遺構はなく、砂礫が堆積している。墓域の年代は判然としないが、集落と併行する年代の遺構と考えておきたい。

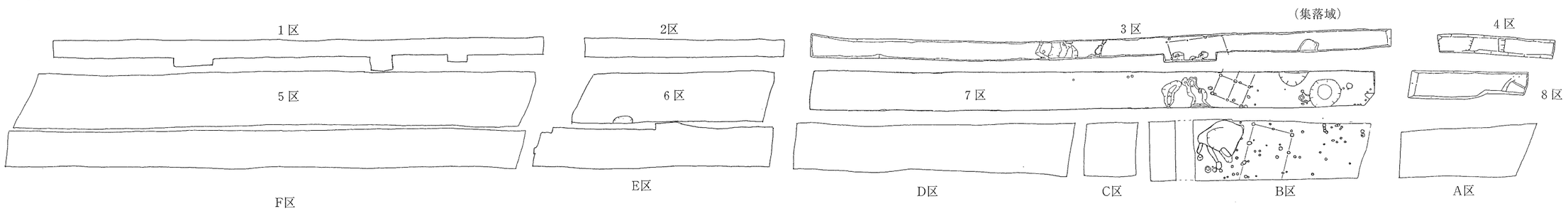
竪穴住居ではⅡ様式後半からⅢ様式初頭の土器を確認した。５区の竪穴住居SH07はⅡ様式後半、６区の竪穴住居SH08はⅢ様式初頭、SH09はその中間の段階の遺構である。土器組成の比率は、SH07では壺が10%、甕が86%、鉢が４%であったものが、SH08では壺が35%、甕が65%となっている。竪穴住居の大きさや形態が異なっているので単純に比較できるわけではないが、甕が減少し壺が増加する傾向が確認できる。

紀伊型甕は、紀ノ川下流域や亀の川・日方川より暗い褐灰～灰黄褐色のものが見られる。体部外面のケズリは縦方向に施されているが、ケズリの範囲は判然とせず、表面の砂粒は多量に脱落している。器形や技法上はまぎれもなく紀伊型甕であるが、紀ノ川流域や亀の川・日方川の土器とは色調・ケズリ等の特徴が異なっており、野上谷の在地の土器と考えられる。口径は15～20cmに集中した分布傾向があるが、30cm以上の大型品も見受けられる。

弥生時代中期




鎌倉時代




江戸時代頃

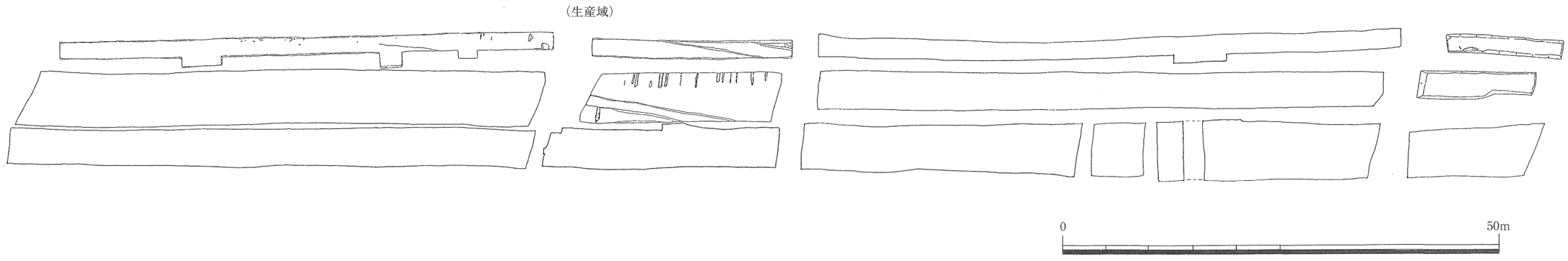



図55　各時代の遺構分布状況

## （２）鎌倉時代の野上中南遺跡

段丘裾のすぐ西側、３・７区東半で鎌倉時代の集落を確認した。集落では13世紀を中心とする掘立柱建物跡２～４棟と井戸２基を確認している。

まず、井戸と掘立柱建物の年代を、遺構から出土した瓦器を軸に考えてみたい。12世紀の遺構は確認できないが、調査区外となってしまい確認できなかったSE02の下層・掘方から、この年代の遺物が出土する可能性は高い。SE02の４～９層から出土した瓦器は口径14.4～15.2cm、高さ4.4cm前後に集中しており、13世紀前半頃の遺物と考えられる。１～２層からは口径14.0cm、高さ4.0cm前後の瓦器が出土しており、廃絶後の井戸が完全に埋まった時期を示しているものと考えられる。SE01の掘方出土遺物は、SE02の４～９層出土遺物に相当し、13世紀前半の遺物と考えられる。４・５層は13世紀後半、２・３層は13世紀末～14世紀初頭の遺物と考えている。

建物では、SB08の柱穴から13世紀中頃、SB12の柱穴から13世紀末～14世紀初頭と考えられる瓦器片が出土しており、これらが廃絶年代を示しているものとして、SB08を13世紀前半、SB12を13世紀後半の建物と考えている。

以上のとおり、鎌倉時代の集落の成立年代は12世紀後半ないしは13世紀前半、廃絶は13世紀末～14世紀初頭と考えられる。13世紀代を通じて掘立柱建物が建てられており、井戸02が12世紀後半～13世紀前半、SE01が13世紀前半～14世紀初頭頃まで存続していたものと考えられる。東側段丘面整地土からはこれよりも新しい遺物が若干含まれるので、室町時代には段丘上面に生活域が移動していた可能性が指摘できる。

土器様相としては、鎌倉時代の野上谷は紀ノ川流域に近い様相を呈していることが分かった。瓦器は口縁端部に沈線がなく、外面上半は１段ないしは２段の横ナデを施し、下半は連続した指オサエを施す。胎土は粗く、焼成はあまく、やや坏に近い形態を呈する。紀ノ川下流域に多いタイプの瓦器と判断される。また、内面調整にハケを用いるなど独特な個体がSE02から１点出土しており注目される。

## （３）まとめ

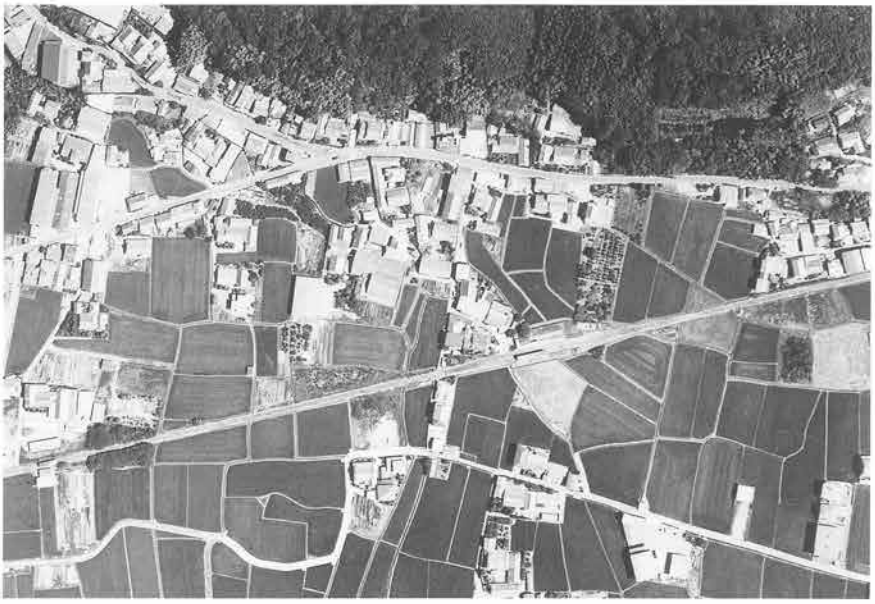
平成８～16年度にかけて、幅16～19m、長さ約185mの道路予定区間内に、海南市文化財調査研究会による試掘１～５トレンチとＡ～Ｆ区、県文化財センターによる１～８区、県教育庁による立会調査①～④、計2,056㎡の調査が実施された。調査区が寸断されたことと、歩道部分が調査計画から除外されたことにより、掘立柱建物跡や周溝墓状遺構の確認や井戸SE02の下層部分の調査が実施できず、最善の調査が行われたとは言いがたい部分も存在する。しかし、各調査組織の担当者間で緊密な連携を取り、これらの調査成果を１冊の報告書として仕上げることができたことには、一定の評価を与えておきたい。

調査区の西半では弥生時代中期前半の集落を確認し、それに隣接して墓域と考えられる遺構を検出している。調査区の東側では鎌倉時代の集落を確認し、東端の段丘裾部では、段丘上にも弥生時代と鎌倉時代の遺跡が広がっていたことを推定させる遺物が出土している。

弥生時代の遺構面は集落域では粘質土～シルトであったが、墓域付近では砂礫ベースとなっている。弥生時代の集落域は標高51.96～51.76mの粘質土・シルト上に、墓域と考えられる周溝墓状の遺構が点在する地域は、集落域の東隣の標高51.45～51.75mの砂礫上に形成されている。弥生時代の集落は掘立柱建物跡が多く、松菊里型のSH02・07が検出された。円形住居からは石器が多量に出土しており、焼失住居も検出されている。墓域については判然としない部分があるが、周溝墓が造られている可能性が考えられた。

鎌倉時代の遺構面は7区で51.75～51.47mのシルト上にあり、段丘裾部では標高50.97mと低くなっている。東側の段丘上の遺構面は、標高53～54mと推定される。掘立柱建物と井戸から成る集落を検出し、井戸から出土した遺物は鎌倉時代の野上谷の地域間交流を考える上で欠かせない資料といえる。また、調査地とその東側の段丘上は14世紀頃に水田化された可能性が高いものと考えられた。

以上、弥生時代中期前半と鎌倉時代の集落・墓域を確認し、地域の歴史を語る上で貴重な資料を得ることが出来たものといえるだろう。



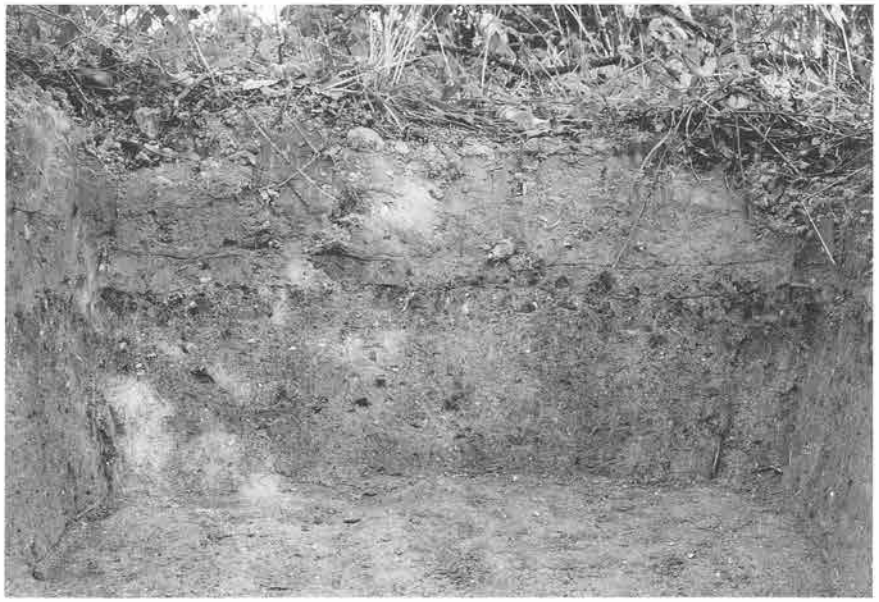
野上中南遺跡全景

海南市文化財調査研究会
試掘第１地点

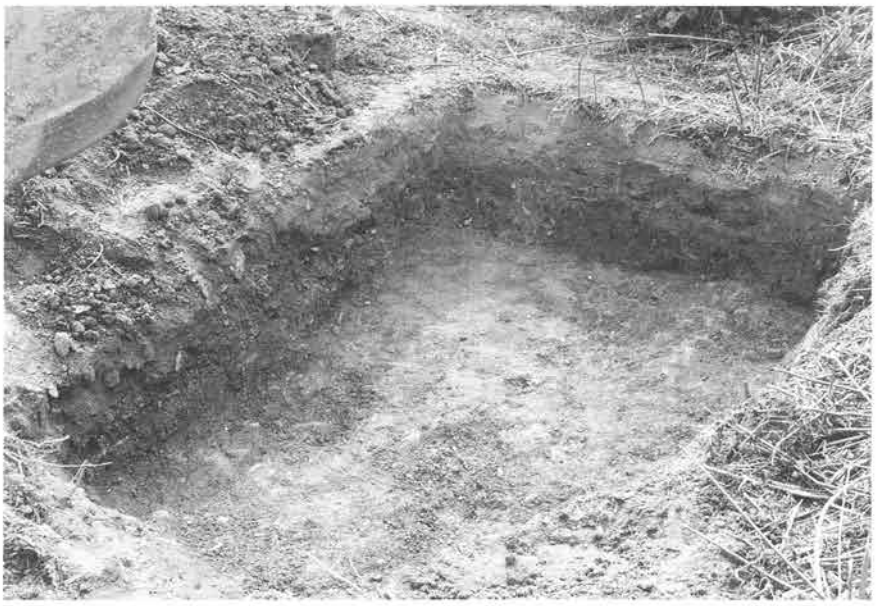
試掘溝１（T.1）

試掘第２地点

試掘溝２（T.2）

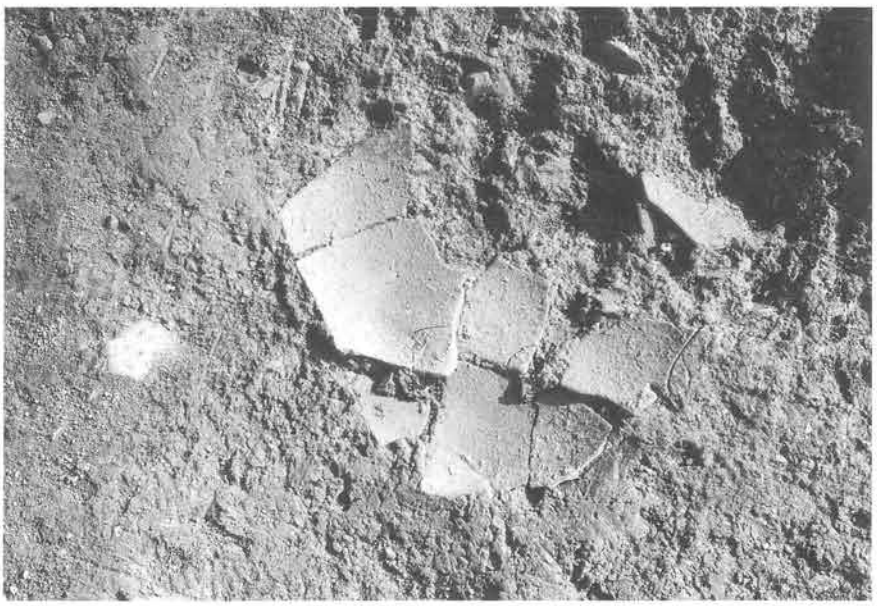


試掘溝２　東壁土層



試掘溝３－１（T.３）

試掘溝３－２（T.３）



試掘溝３－２　遺物出土

試掘溝４（T.４）

試掘第５地点から東を見る

試掘溝５（T.５）

A区　全景（東から）

A区　平面図

A区　北壁土層

B区　全景（西から）

土坑SK01（西から）

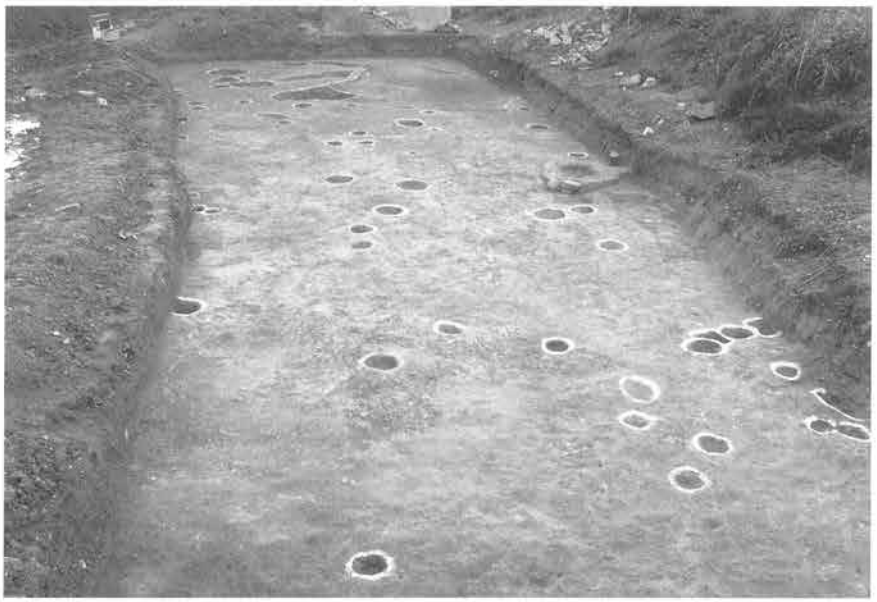
土坑SK01（西から）

土坑SK01（東から）

土坑SK01

土坑SK01

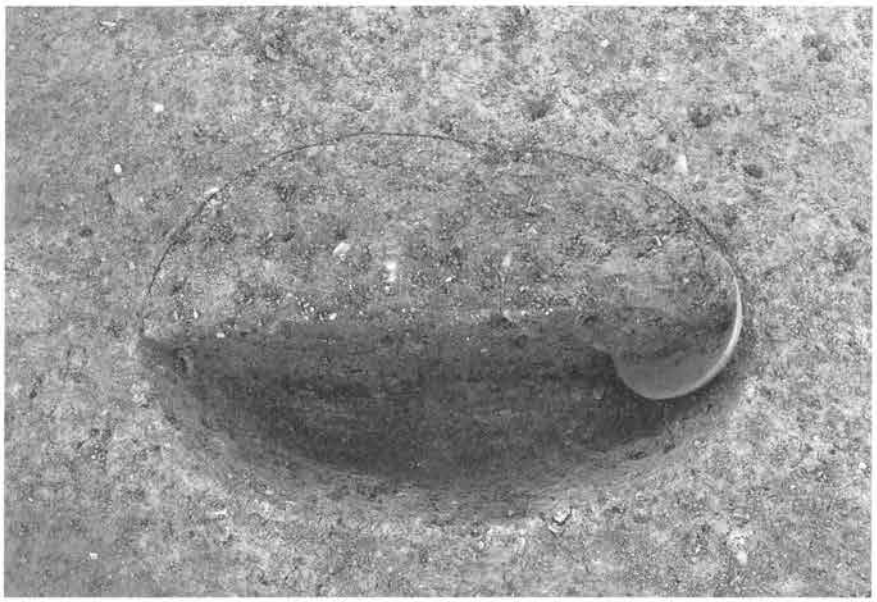
B区　全景（西から）



B区　全景（東から）

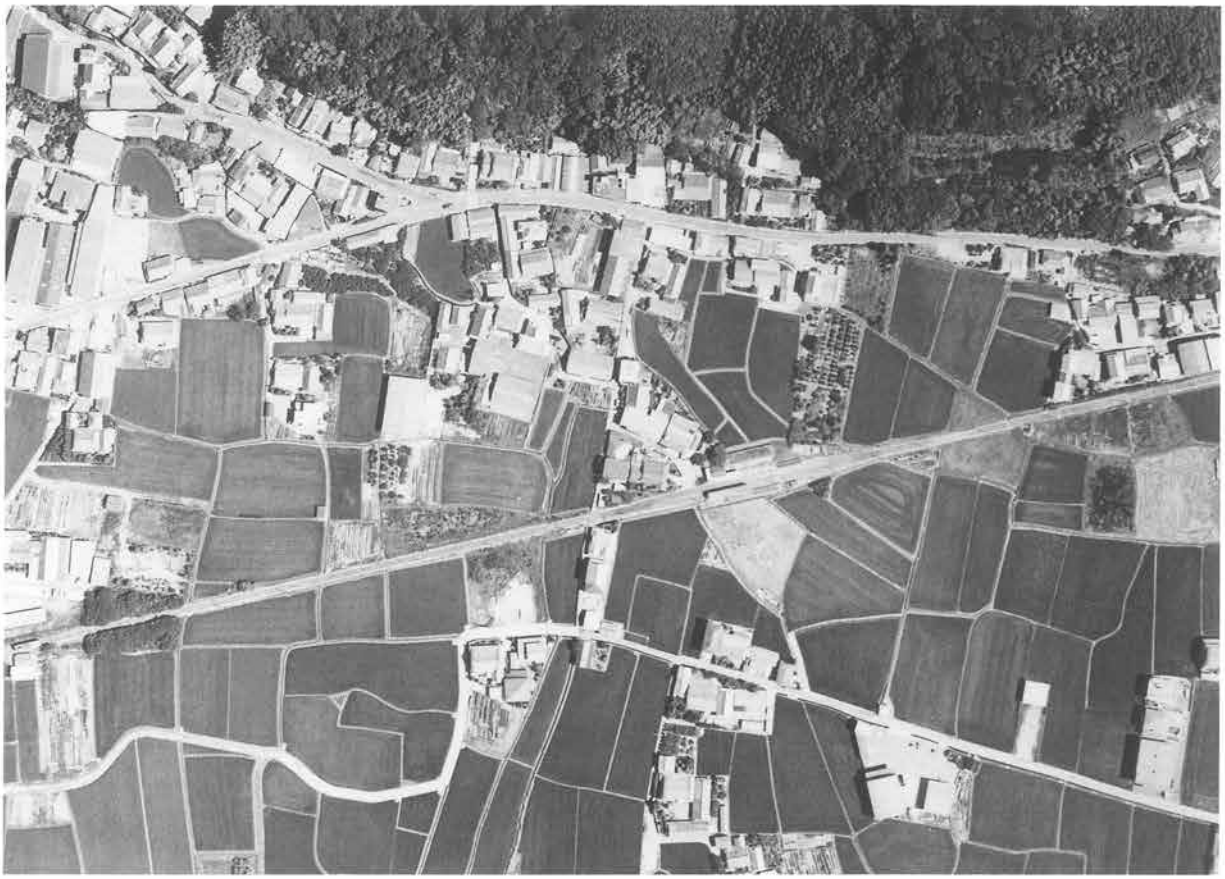
B区　北壁土層

遺物出土状況（SK01）



遺物出土状況（SP02）

遺物出土状況（SK01）



遺跡周辺全景

海南市文化財調査研究会　第２次調査地全景

D区　試掘溝（西から）

E区　試掘溝（東から）

D・E・F区　試掘溝
（東から）

C区　遺構平面（東から）

C区　遺構平面（北から）

C区　遺構平面（南から）

C・D区（北東から）

D・E区（北東から）

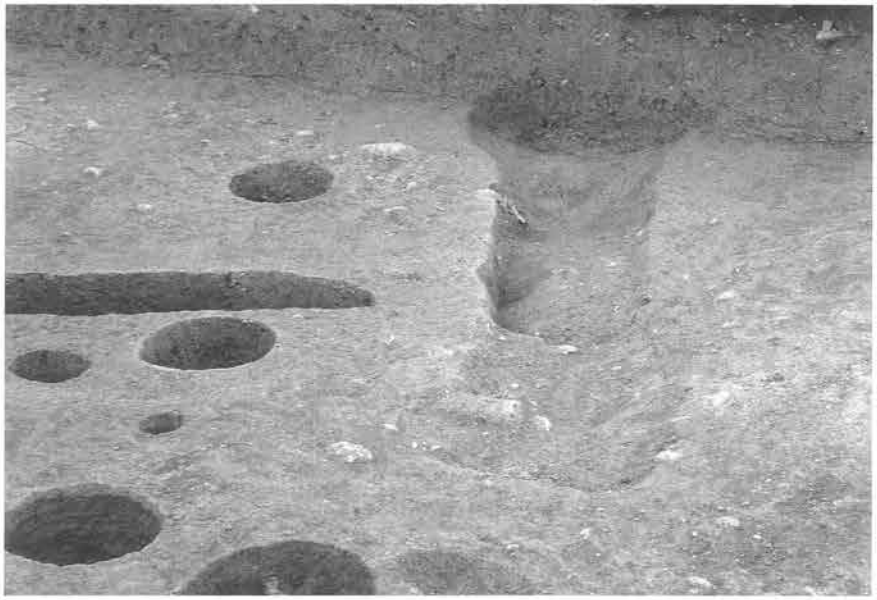
F区（北西から）

D区　遺構平面（北西から）

D区　遺構平面（東から）

D区　遺構平面（西から）

掘立柱建物跡SB07（D区）



溝SD05（D区）

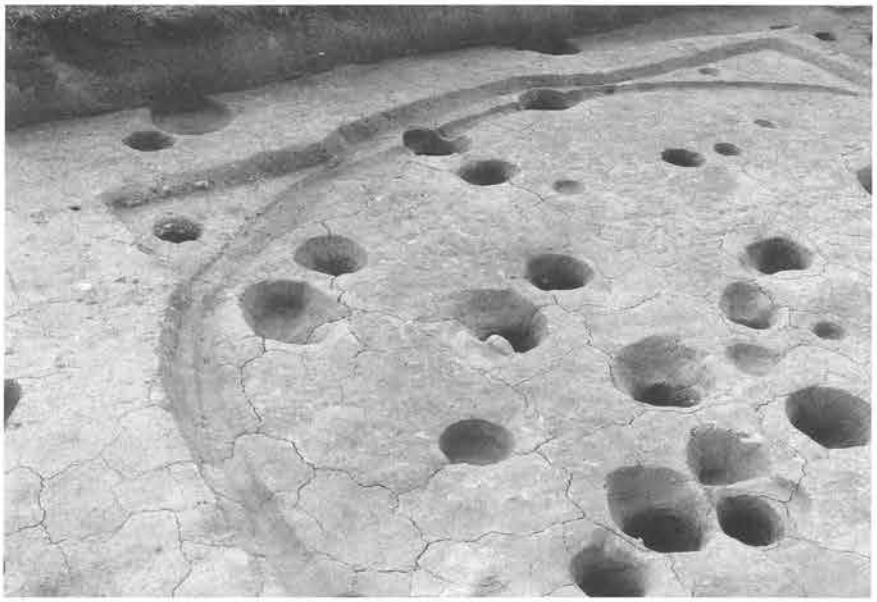
溝SD07（D区）

E区　遺構全景（西から）

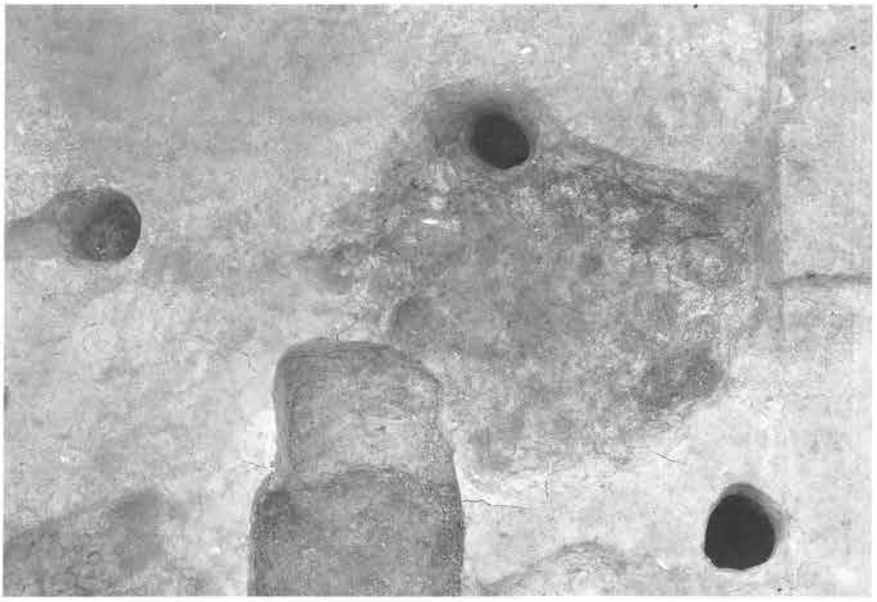
E区　遺構全景（東から）

D・E区　遺構平面（東から）

竪穴住居跡SH01（E区）

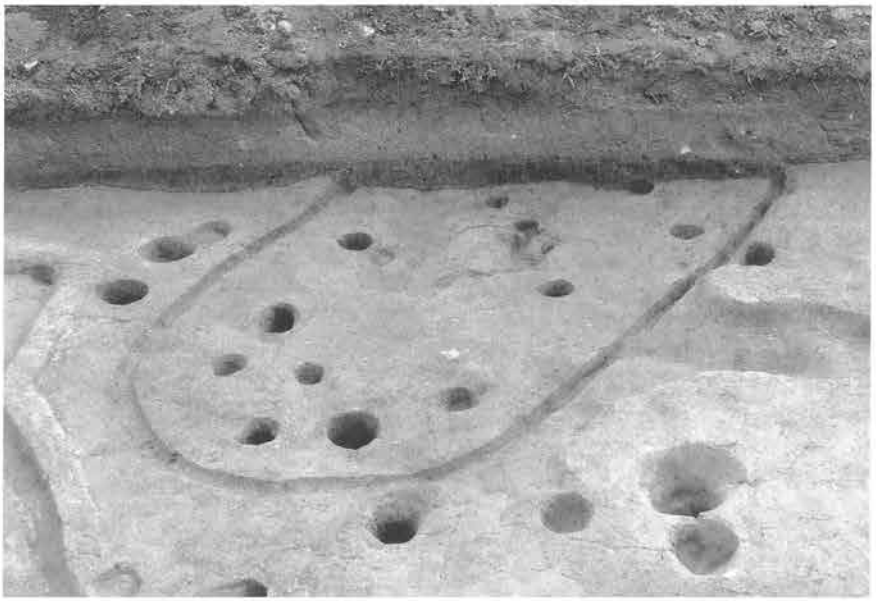


竪穴住居跡SH01（E区）

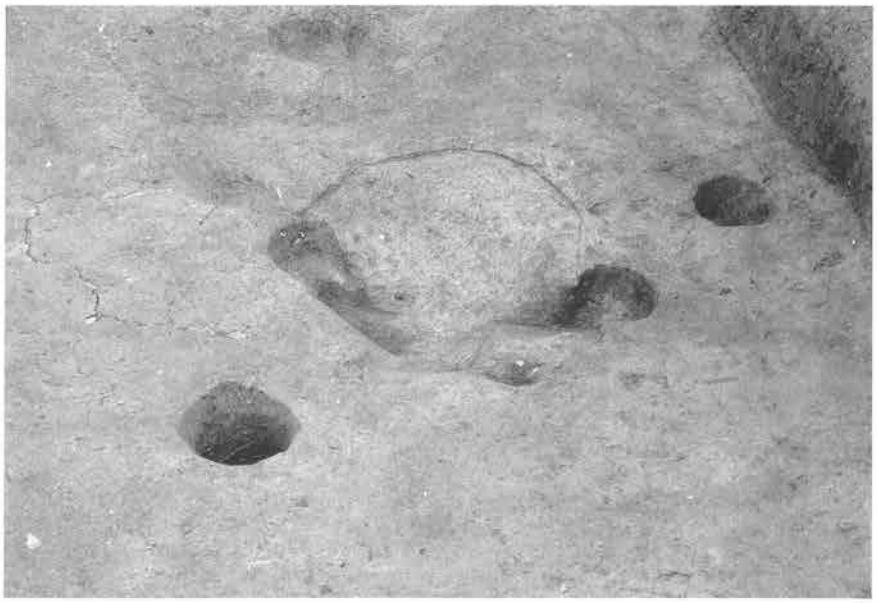


竪穴住居跡SH01の西側炉
（E区）

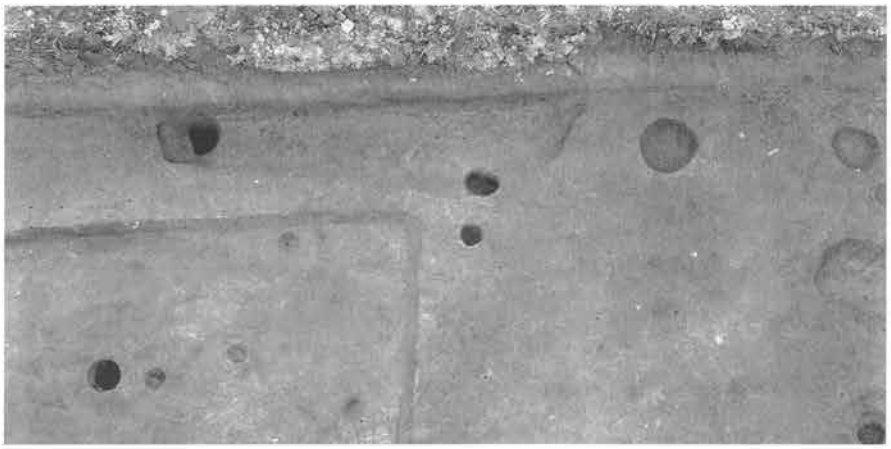
竪穴住居跡SH05
（東から・Ｅ区）



竪穴住居跡SH05
（北から・Ｅ区）

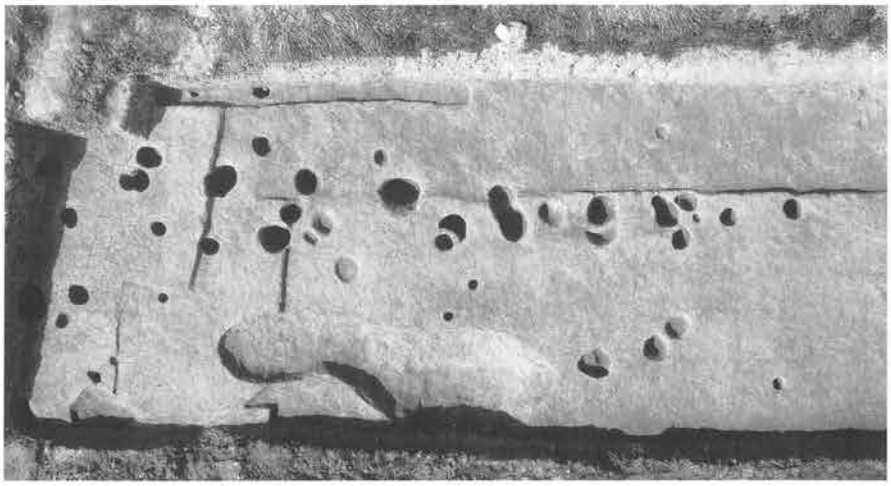


竪穴住居跡SH05の中央炉
（Ｅ区）



竪穴住居跡SH04（E区）

E・F区　遺構平面（東から）



掘立柱建物跡SB03・04
（E区）

土坑SK10（南から・E区）

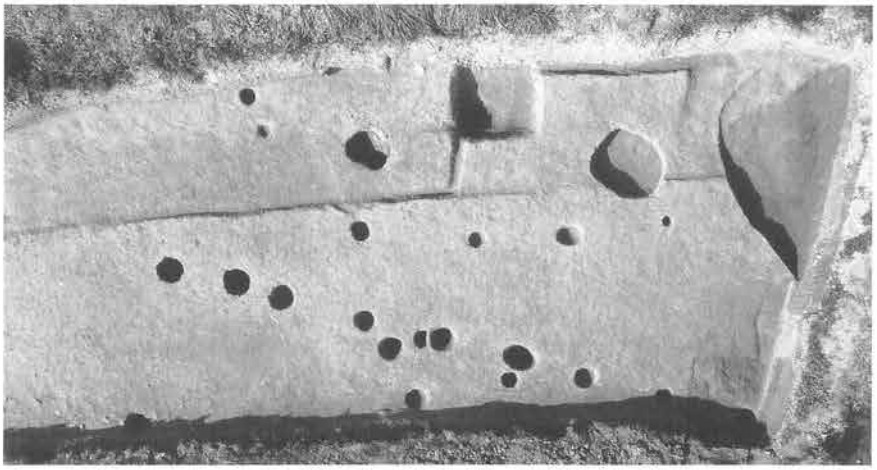
土坑SK10（南から・E区）

土坑SK10遺物出土状態

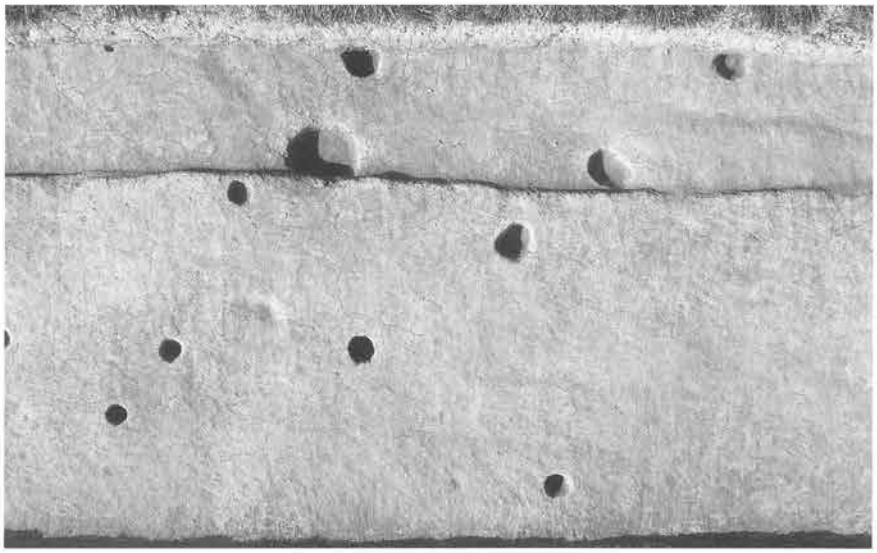
土坑SK12(北から・E区)

土坑SK19(北から・E区)

土坑SK18（東から・E区）



掘立柱建物跡SB05（F区）

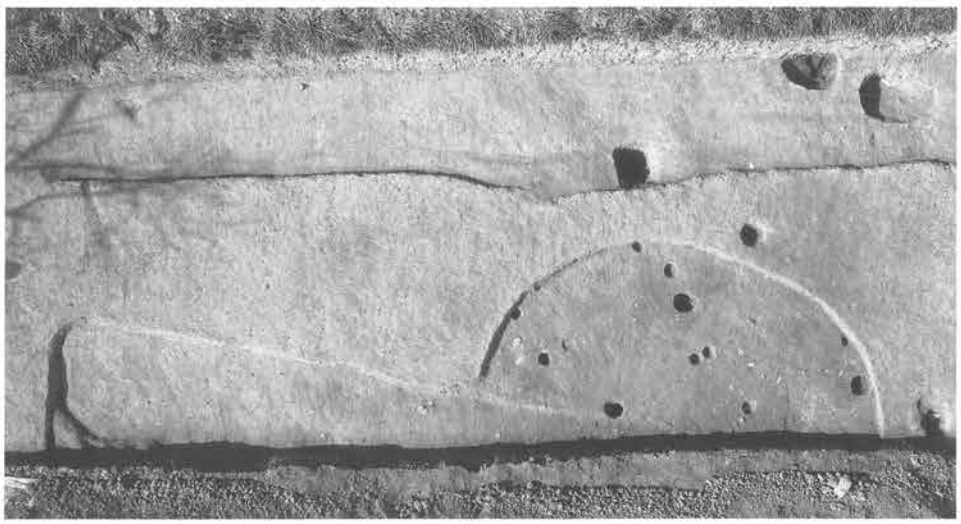


掘立柱建物跡SB06（F区）

F区　遺構平面（東から）

竪穴住居跡SH03
（F区）

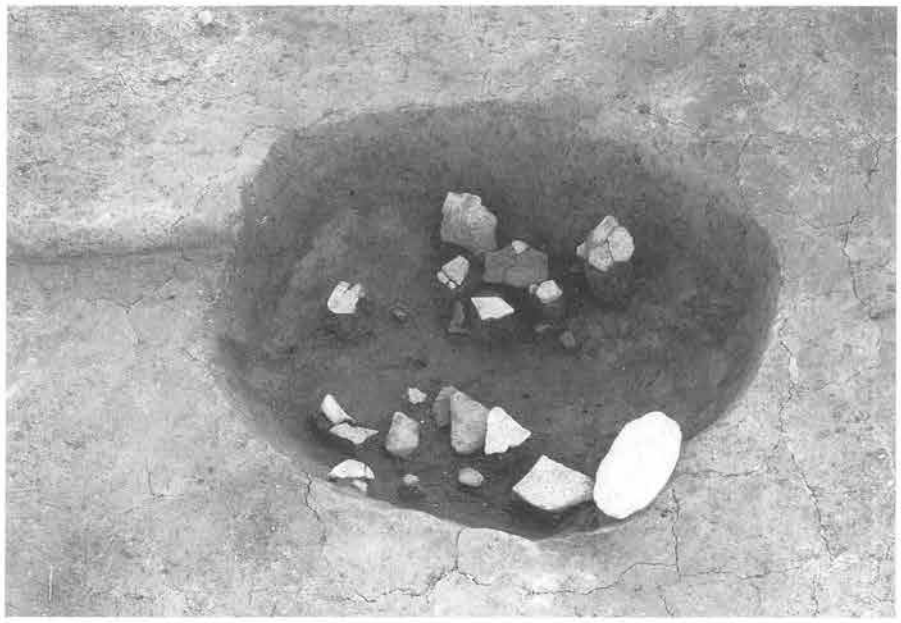
竪穴住居跡SH02
（F区）



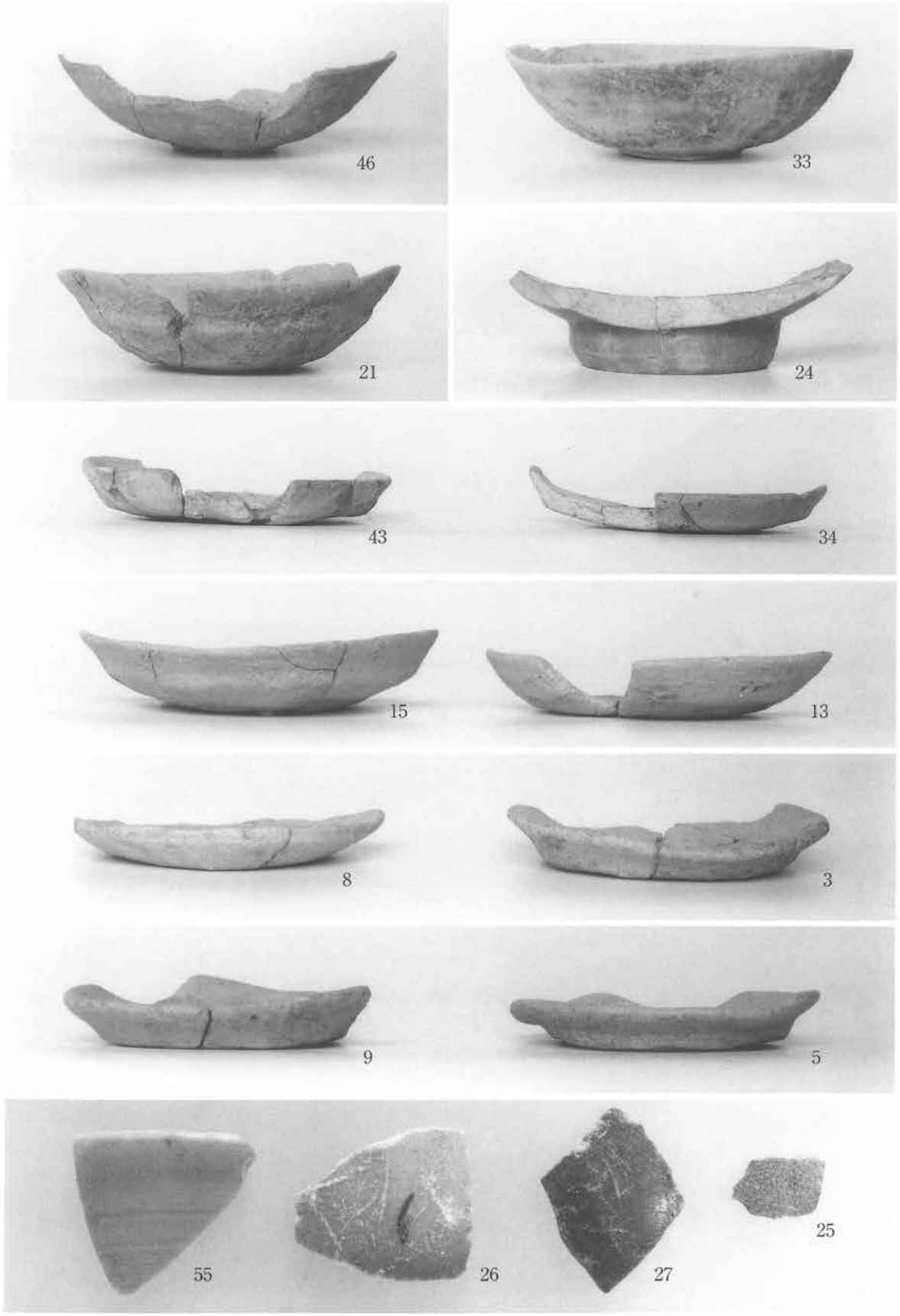
竪穴住居跡SH02・
03（F区）

竪穴住居跡SH03の
炭化材（Ｆ区）

土坑SK21（Ｆ区）



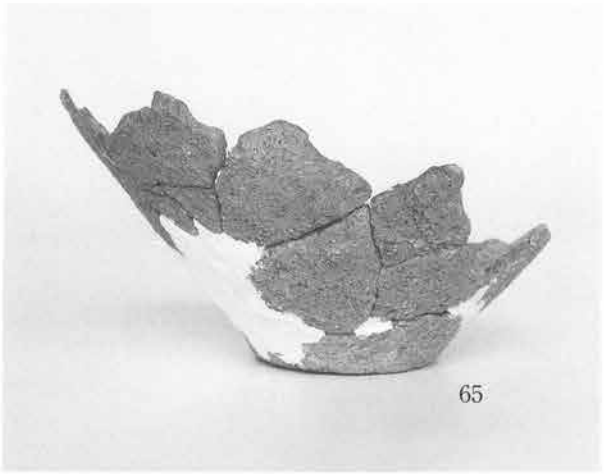
土坑SK22（Ｆ区）




海南市文化財調査研究会　第１次調査出土中世土器

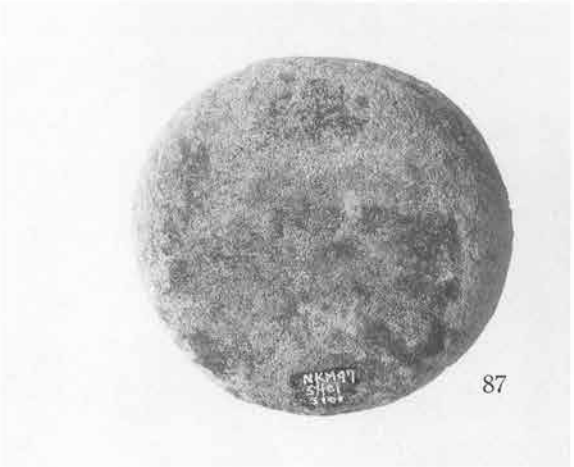
61

66

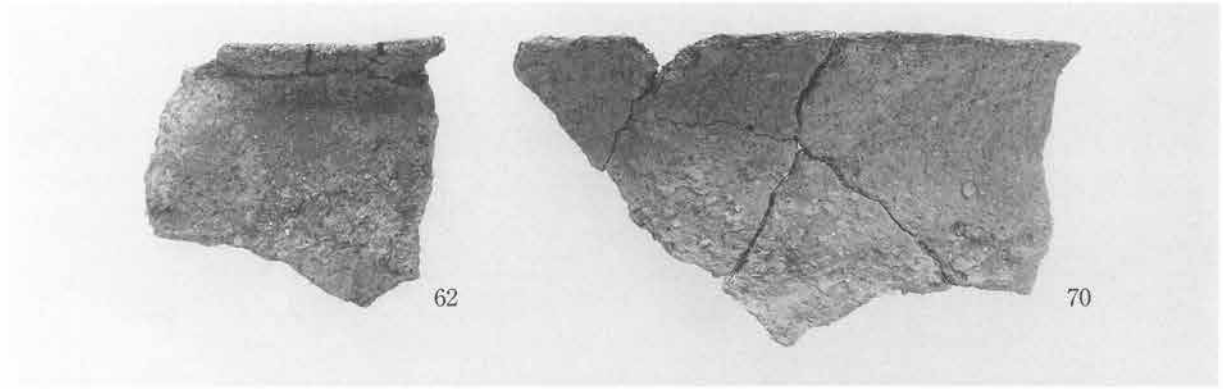

65

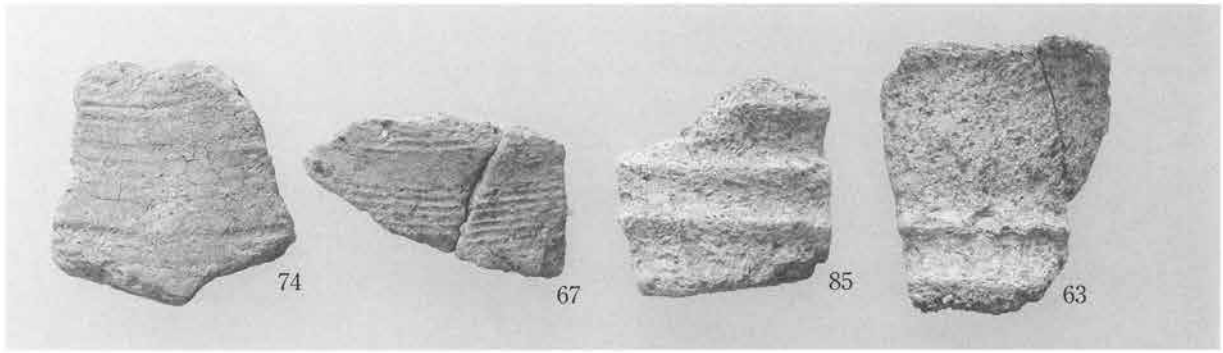
84

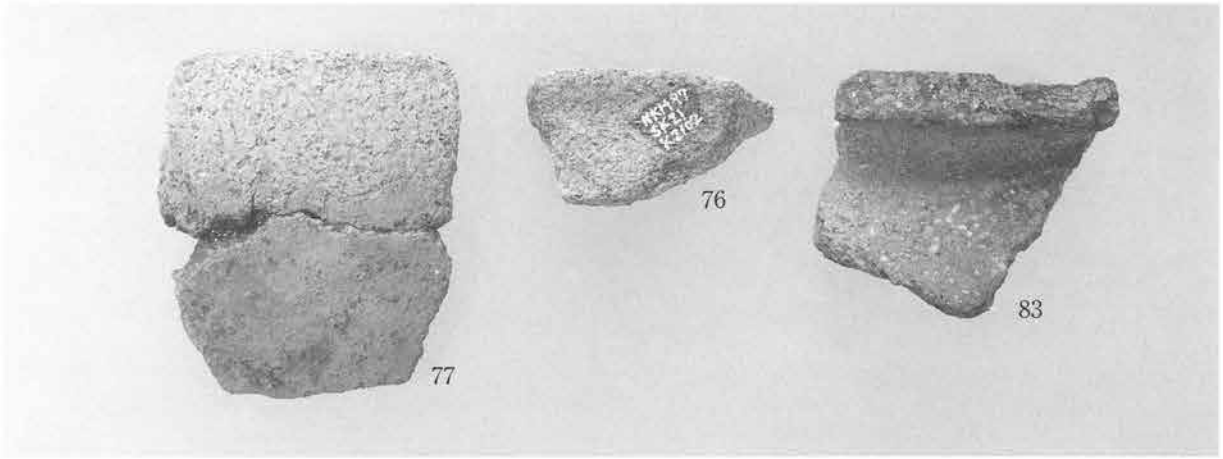
90

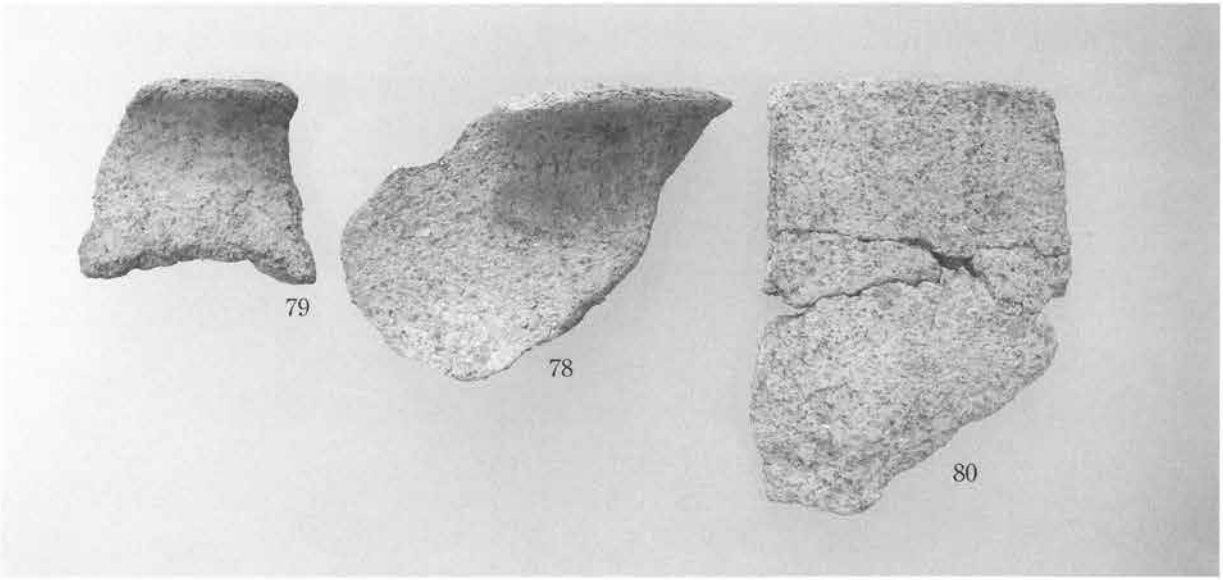

87

海南市文化財調査研究会　第２次調査出土弥生土器等

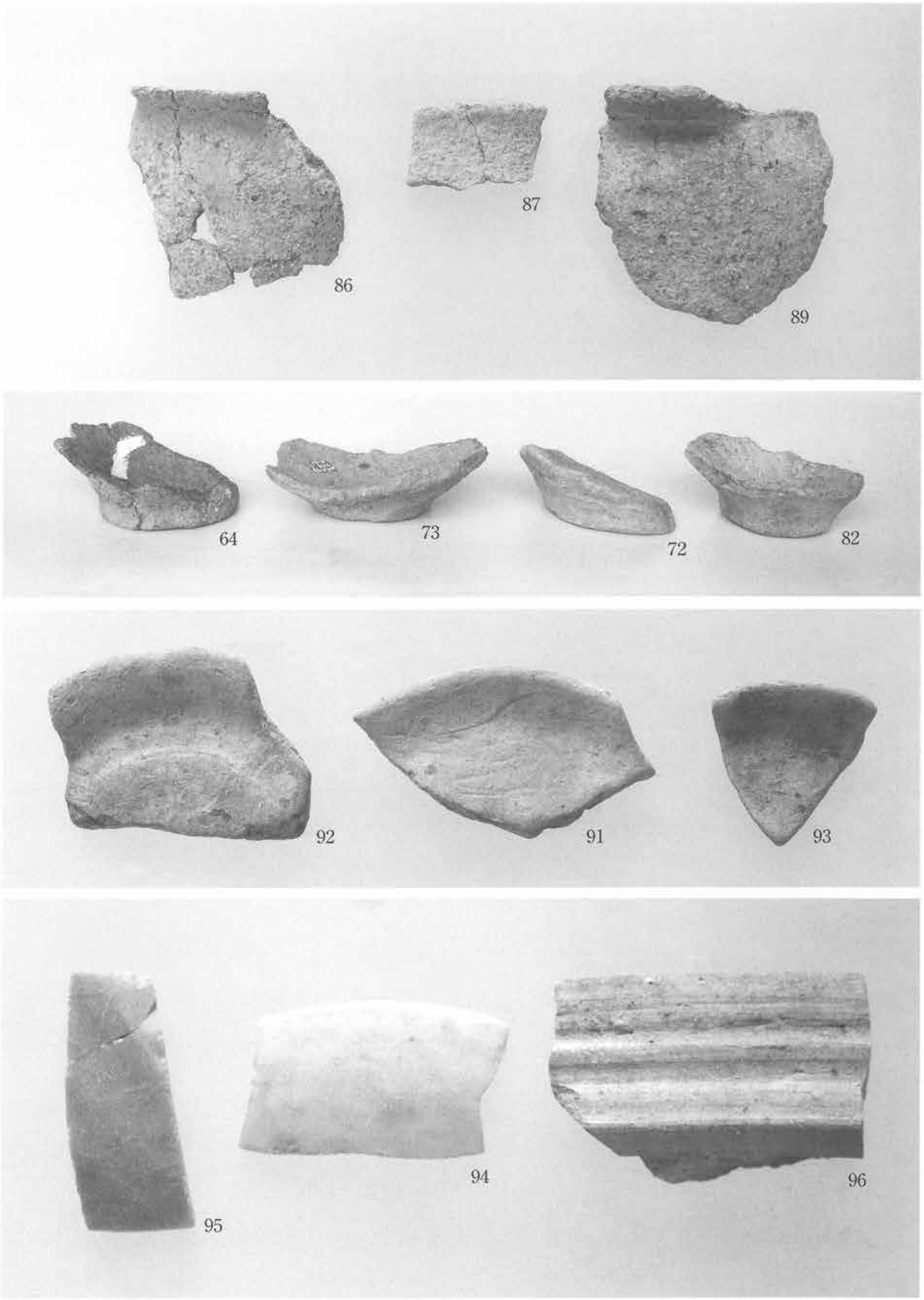


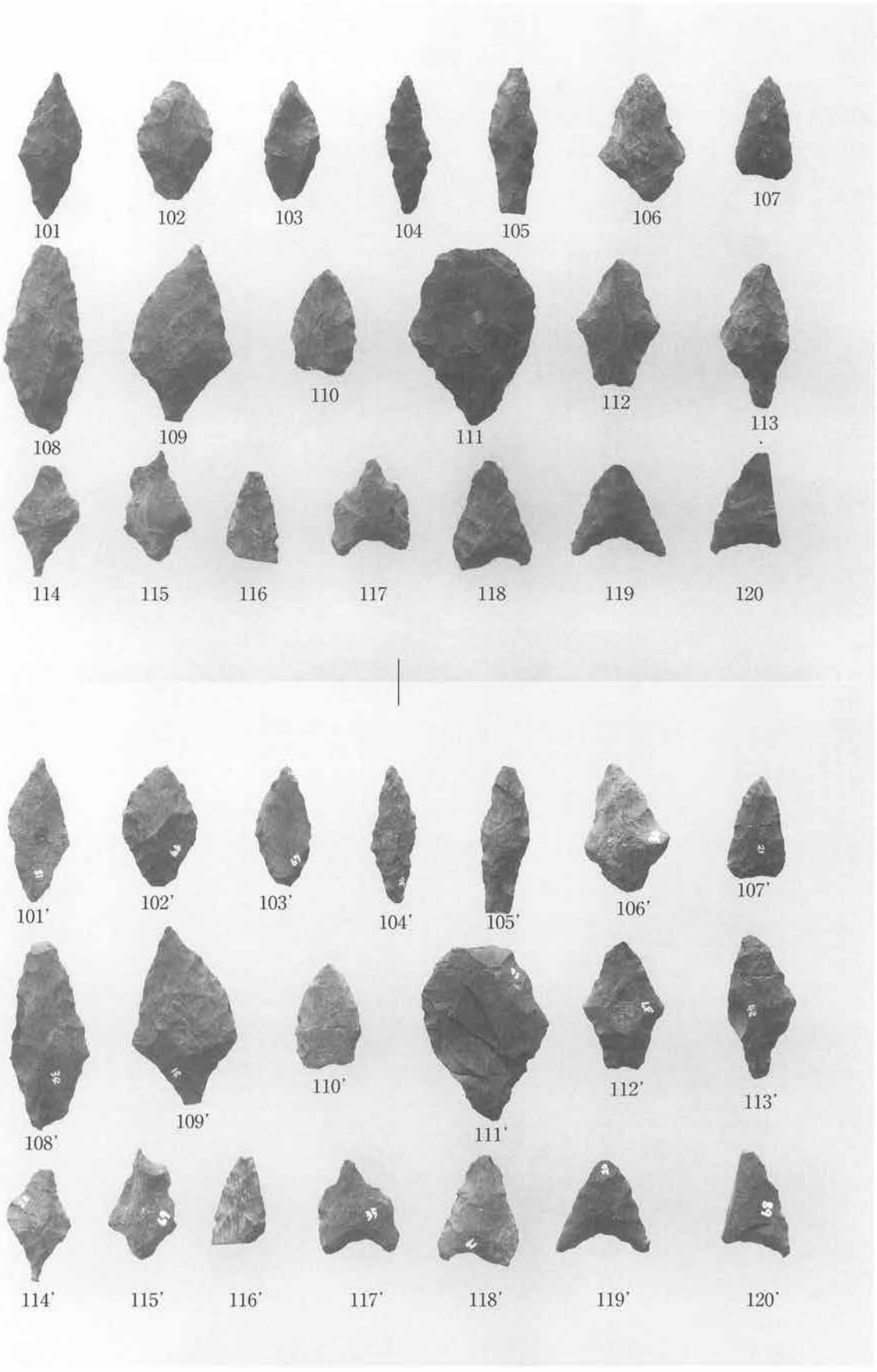



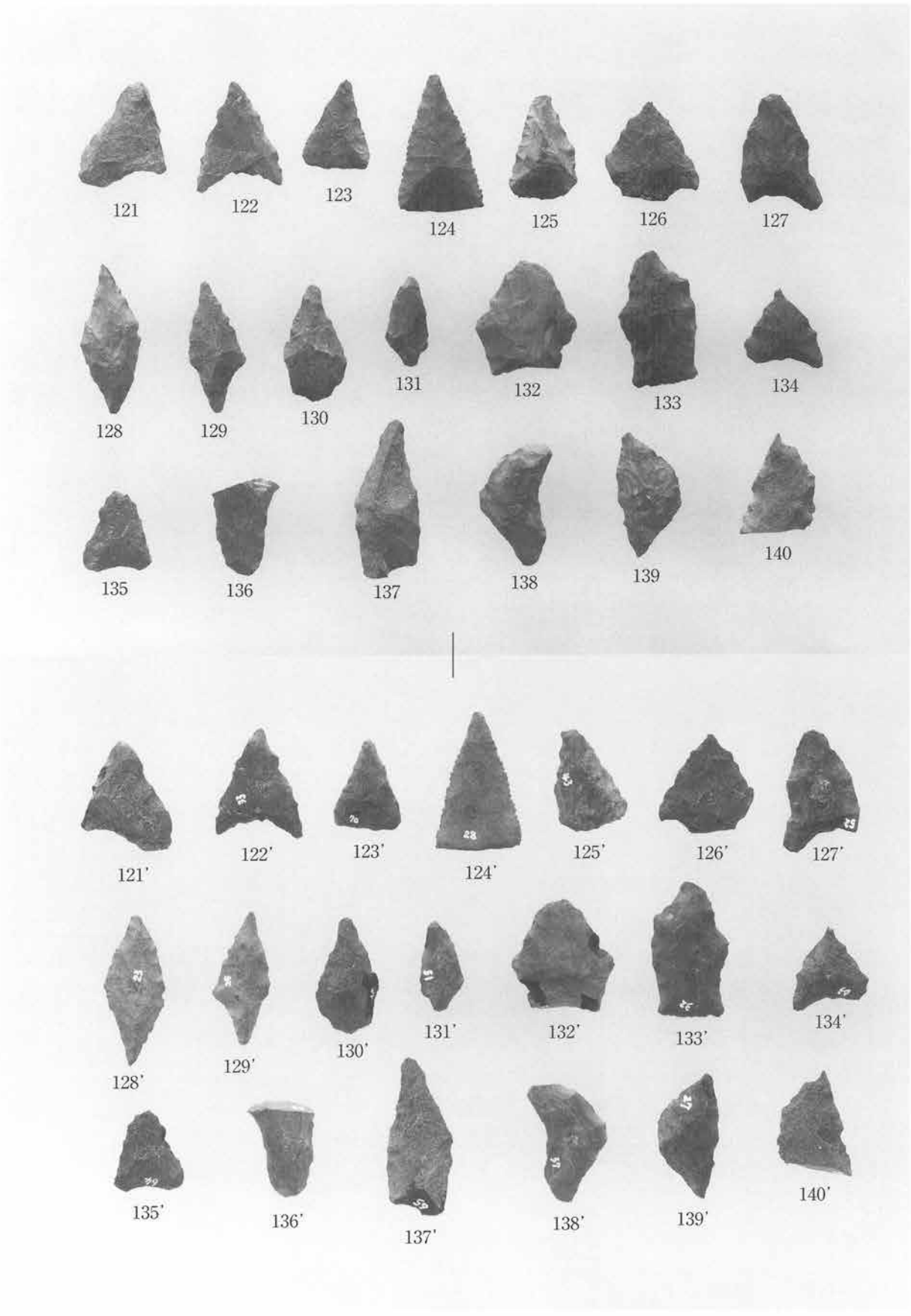

海南市文化財調査研究会　第 2 次調査出土弥生土器



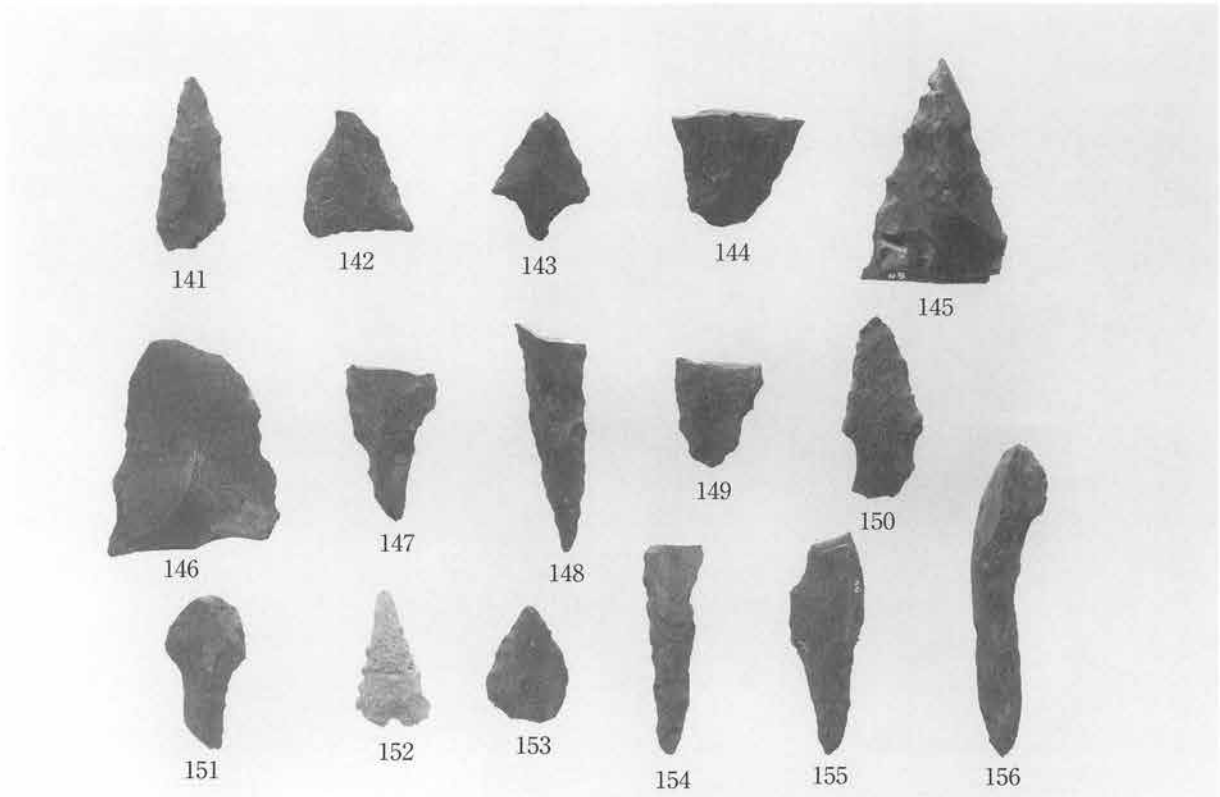

海南市文化財調査研究会　第２次調査出土弥生・中世土器

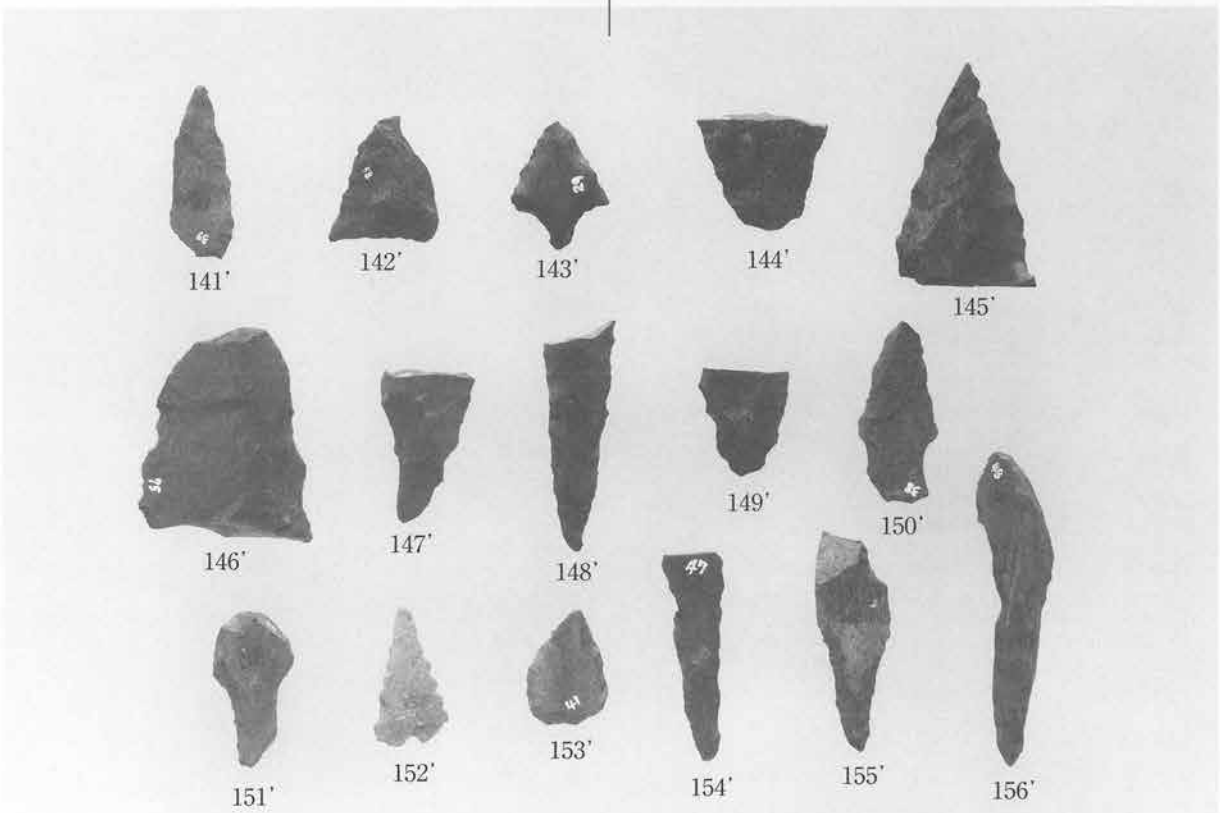



海南市文化財調査研究会　第２次調査出土石器①

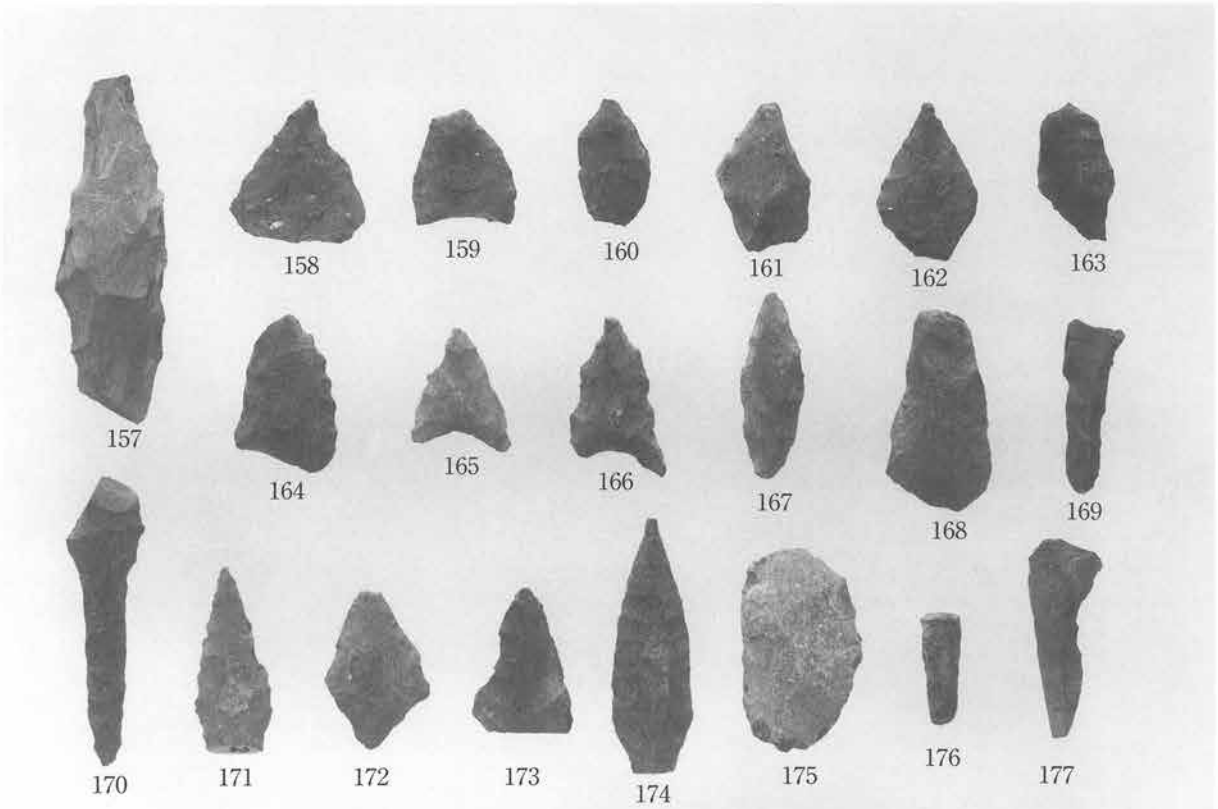


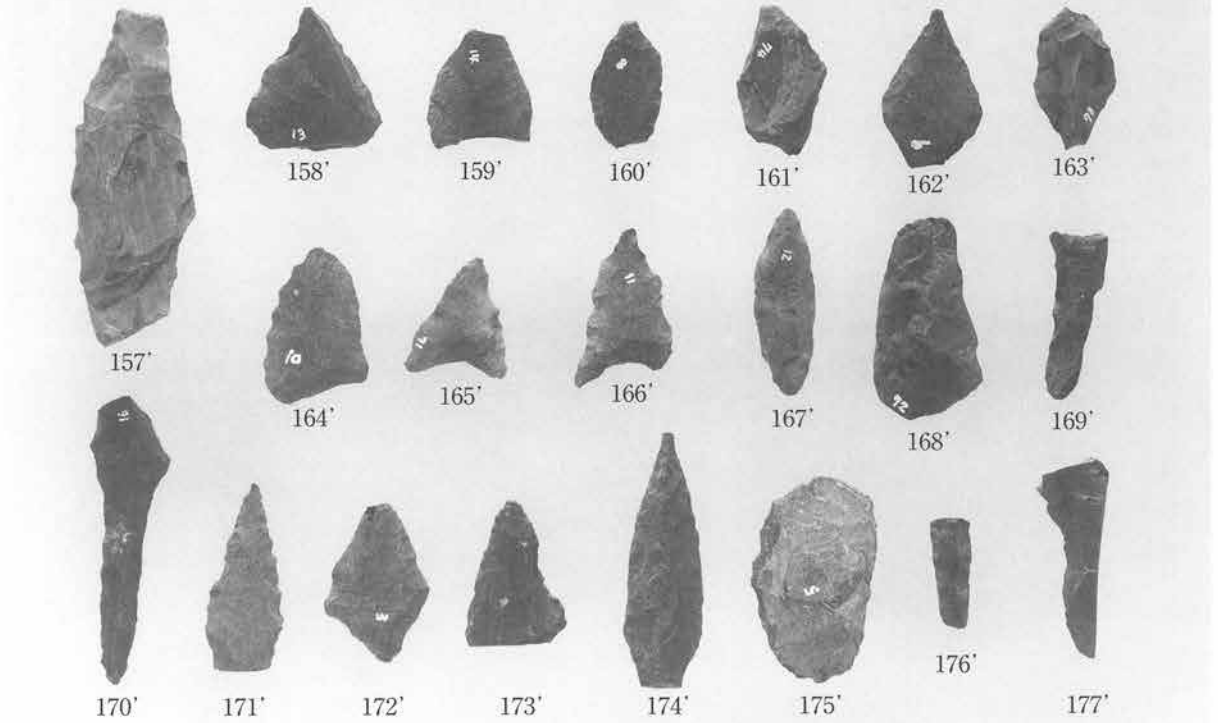

海南市文化財調査研究会　第２次調査出土石器②




海南市文化財調査研究会　第２次調査出土石器③

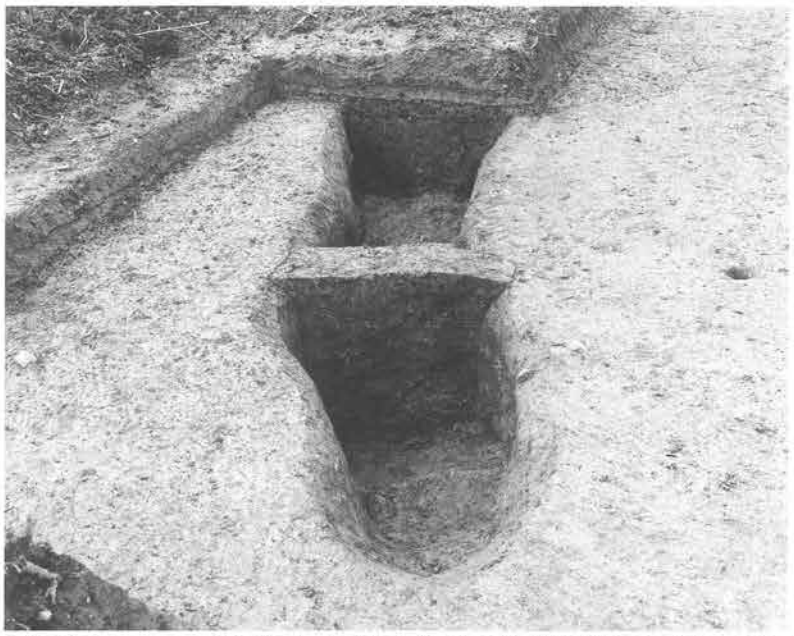


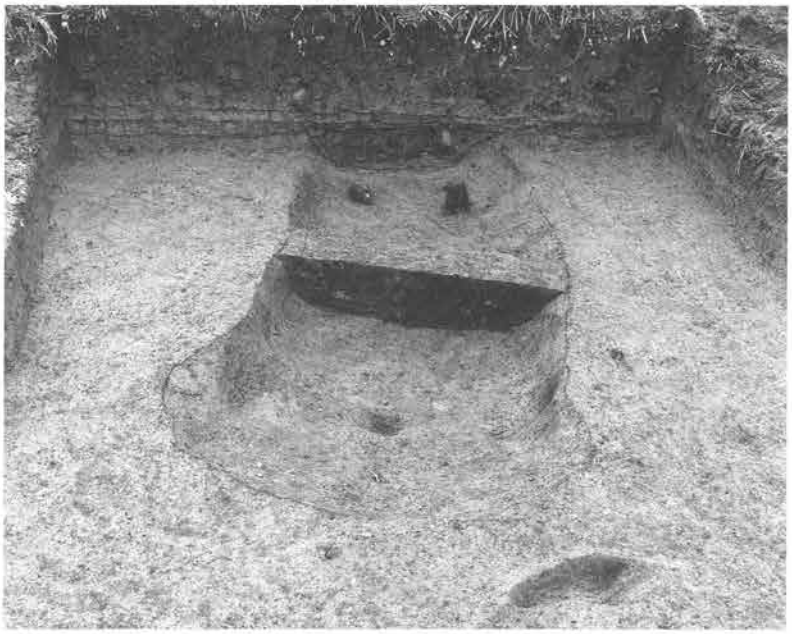

海南市文化財調査研究会　第２次調査出土石器④

（財）和歌山県文化財センター
1区　全景（西から）

1区　全景（東から）

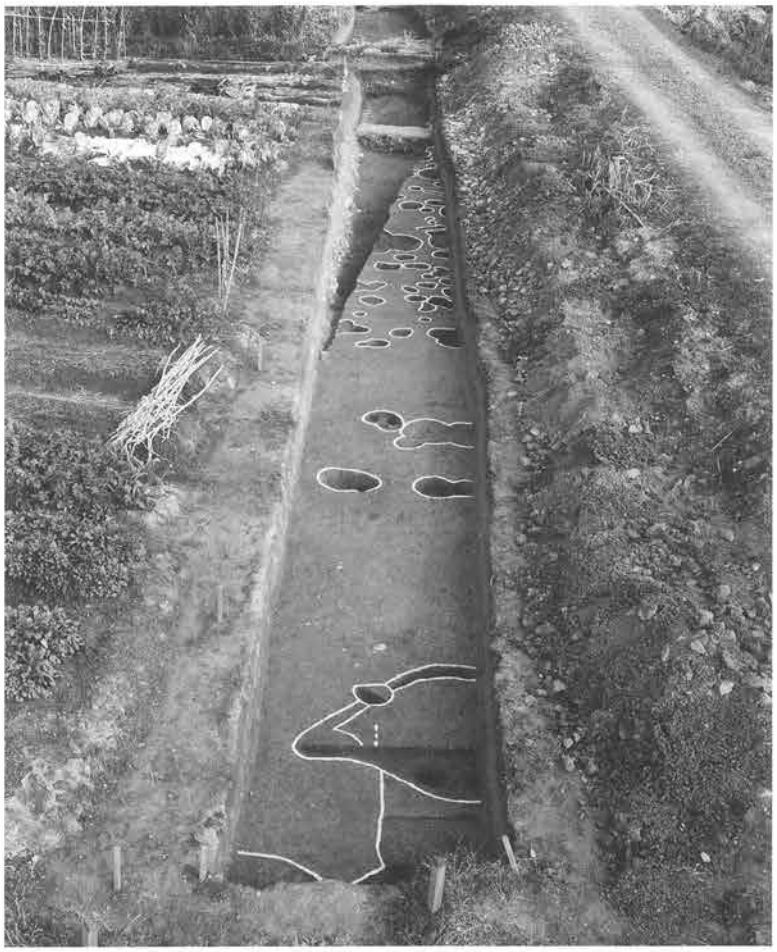


1区　溝状遺構SK129（東から）



1区　溝状遺構SK151（北から）

1区　溝状遺構SK175（北から）



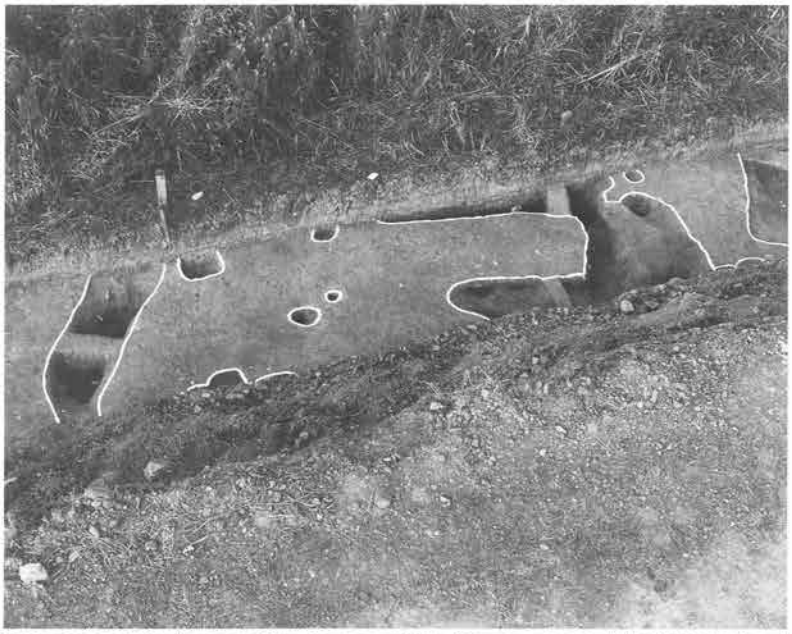
2区　全景（西から）

2区　全景（東から）

3区　全景（西から）

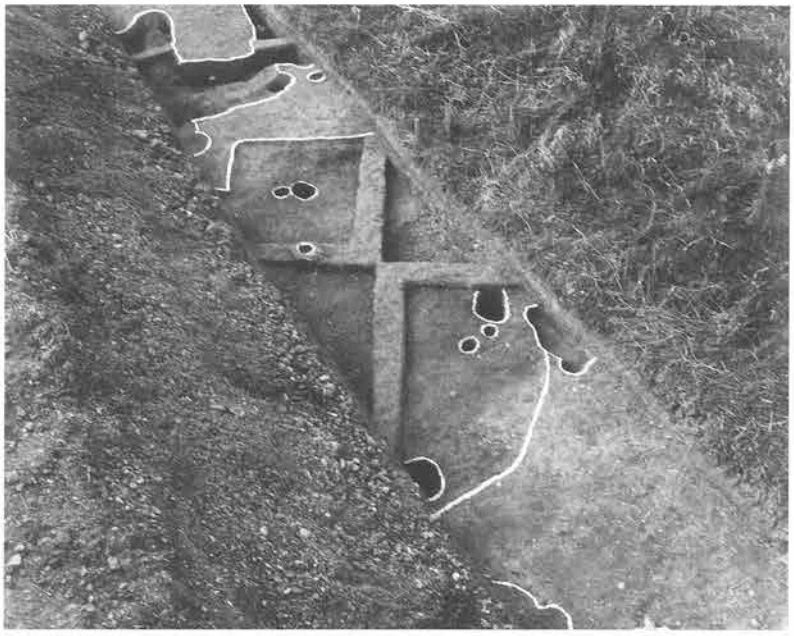
3区　全景（東から）

3区　周溝墓状遺構ST01
（西から）

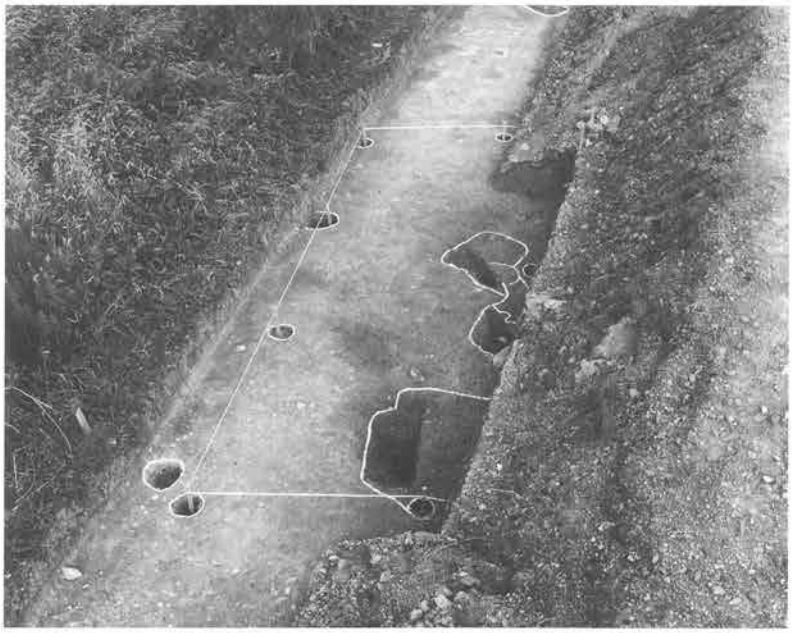


3区　周溝墓状遺構ST02
（南から）

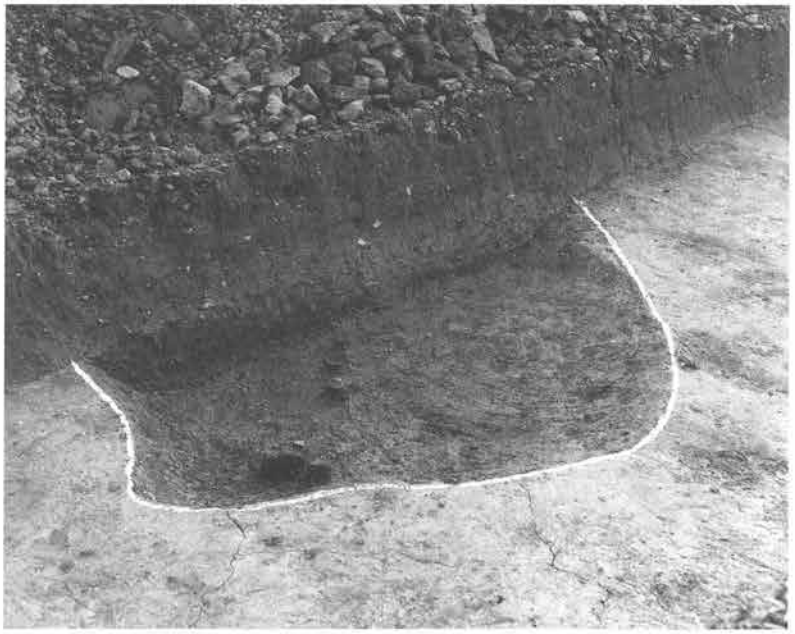
3区　土坑SK303（北から）



3区　竪穴状遺構SX342
（南東から）



3区　掘立柱建物跡SB08
（西から）



3区　土坑SK375（北から）

4区　全景（東から）

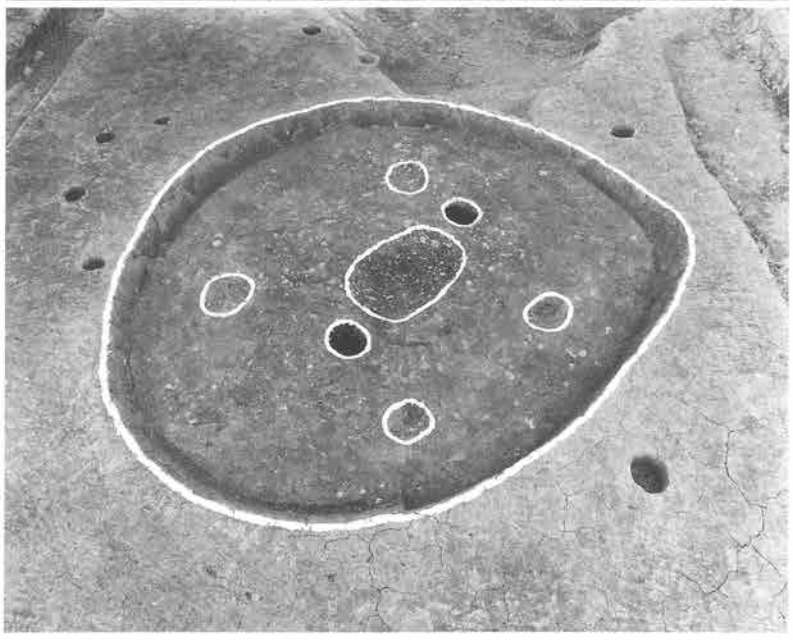
4区
旧野上鉄道の盛土
（西から）

5区　全景（西から）

5区
弥生時代の集落域
（西から）

5区　竪穴住居跡SH07
遺物出土状況（西から）

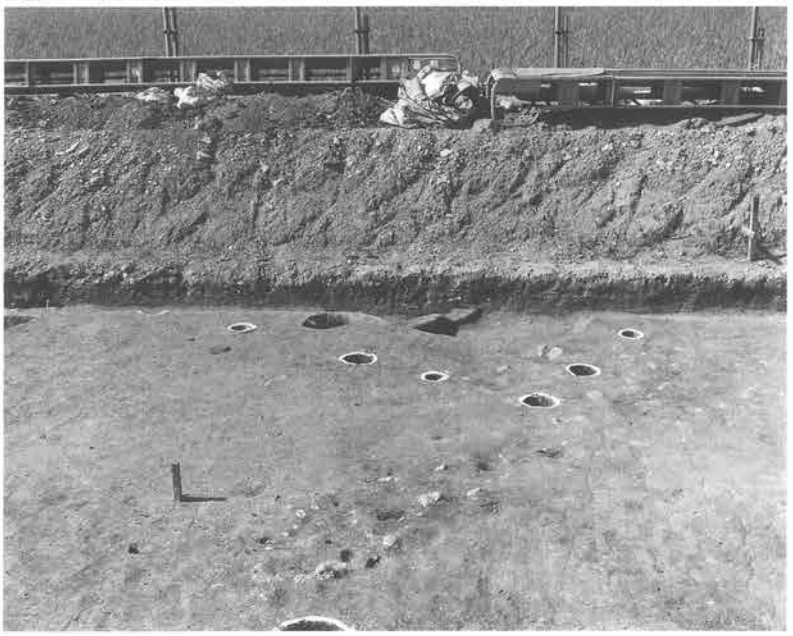
5区　竪穴住居跡SH07
完掘状況①（西から）



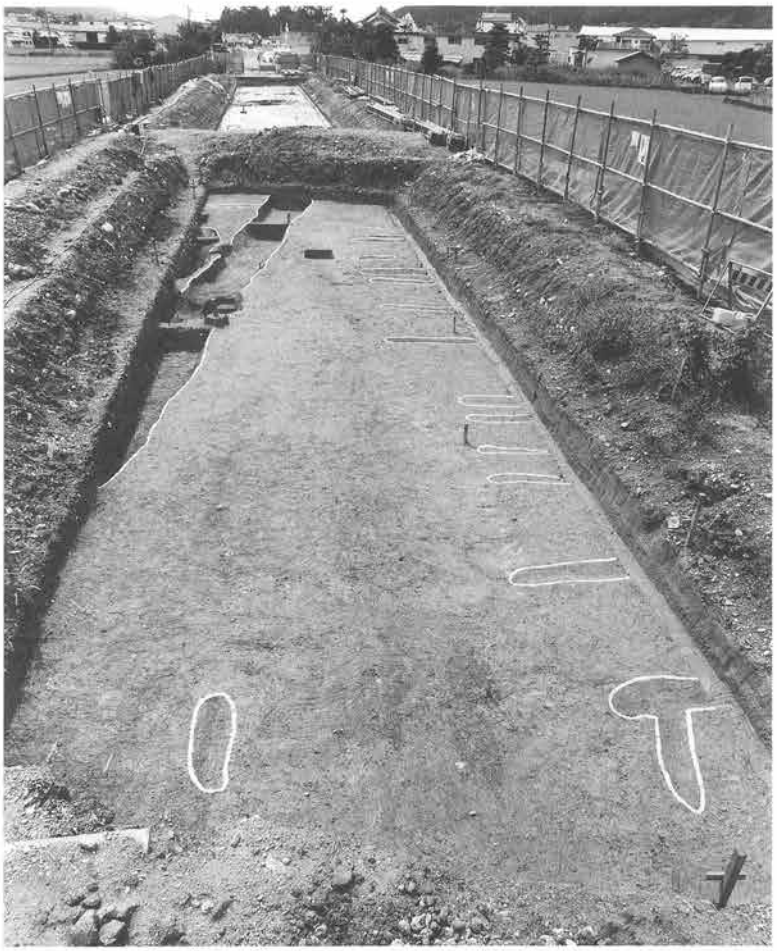
5区　竪穴住居跡SH07
完掘状況②（西から）

5区　掘立柱建物跡SB09
（北から）

5区　掘立柱建物跡SB06北半
（北西から）



5区　掘立柱建物跡SB10
（南から）



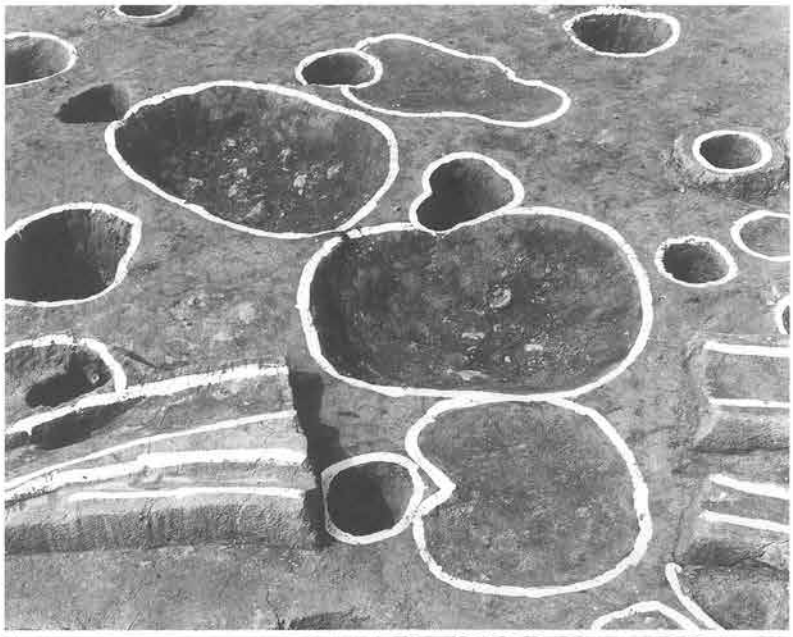
6区　上面全景（東から）

6区　下面全景（東から）

6区　竪穴住居跡SH08
完掘状況（南から）

6区　竪穴住居跡SH09（東から）

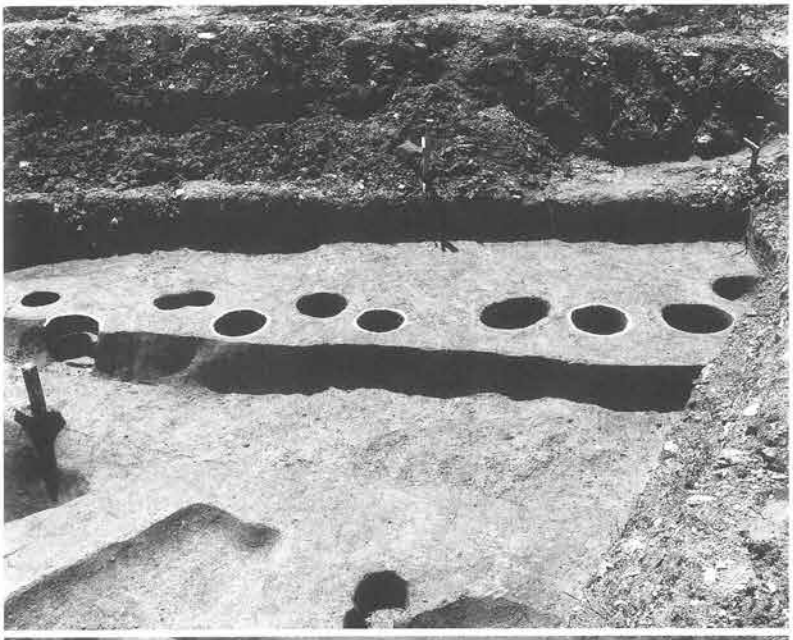
6区　竪穴住居跡SH09（南から）



6区　竪穴住居跡SH09の炉
（南から）

6区　竪穴住居跡SH01北端の壁溝
（北から）

6区　竪穴住居跡SH10（東から）



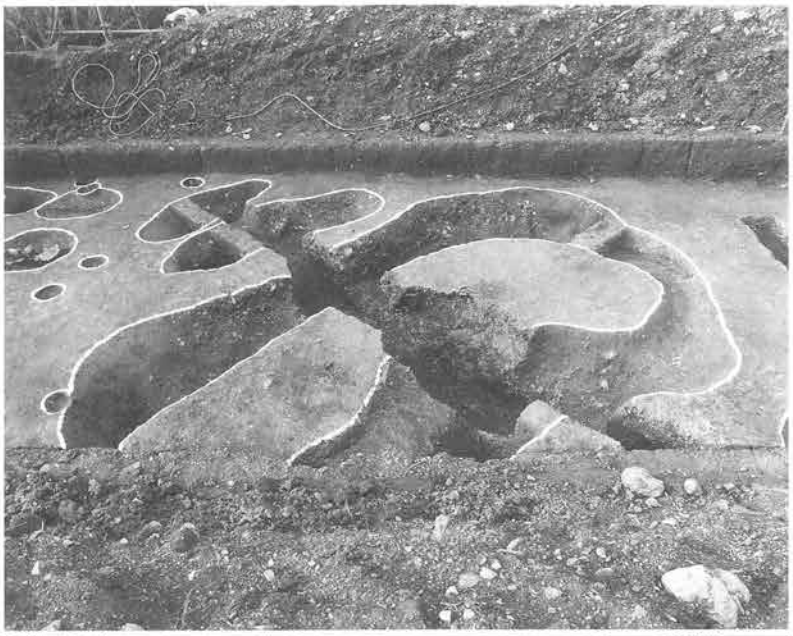
6区　掘立柱建物跡SB03（白線）とSB11（北から）

6区　柱列SA05（左）とSA06（右）（東から）

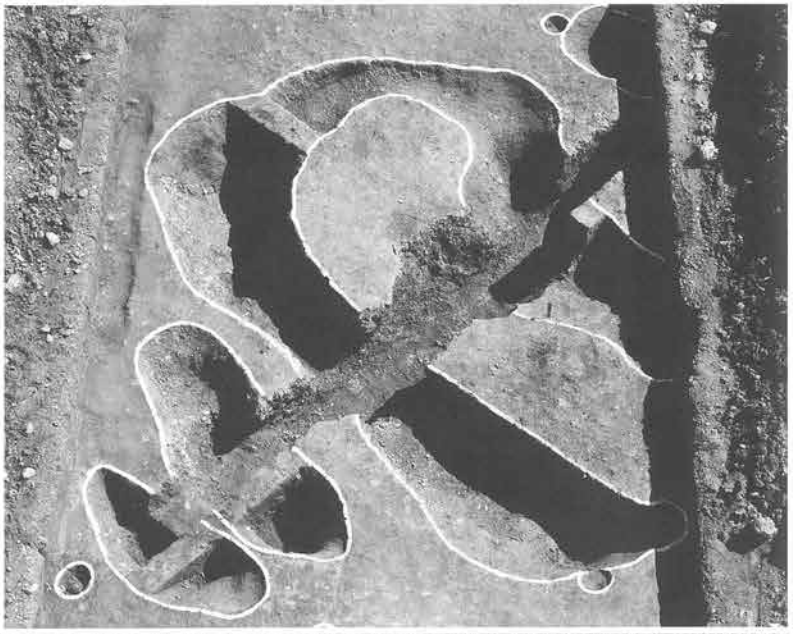
6区　掘立柱建物跡SB11他（西から）

7区　弥生時代の墓域（西から）

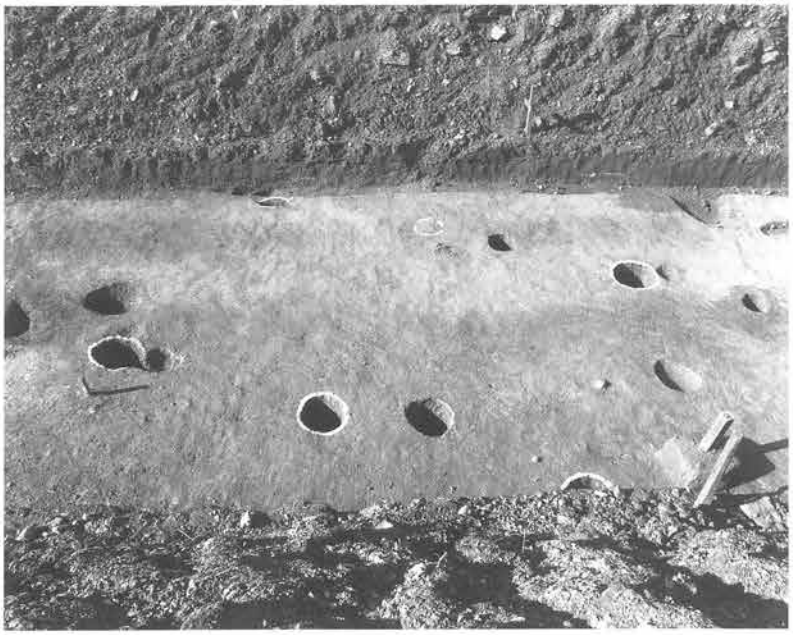
7区　全景　西方を望む（東から）



7区　周溝墓状遺構ST04
（南から）



7区　周溝墓状遺構ST04
（西から）



7区　掘立柱建物跡SB12
（南から）

7区　鎌倉時代の集落域
（東から）

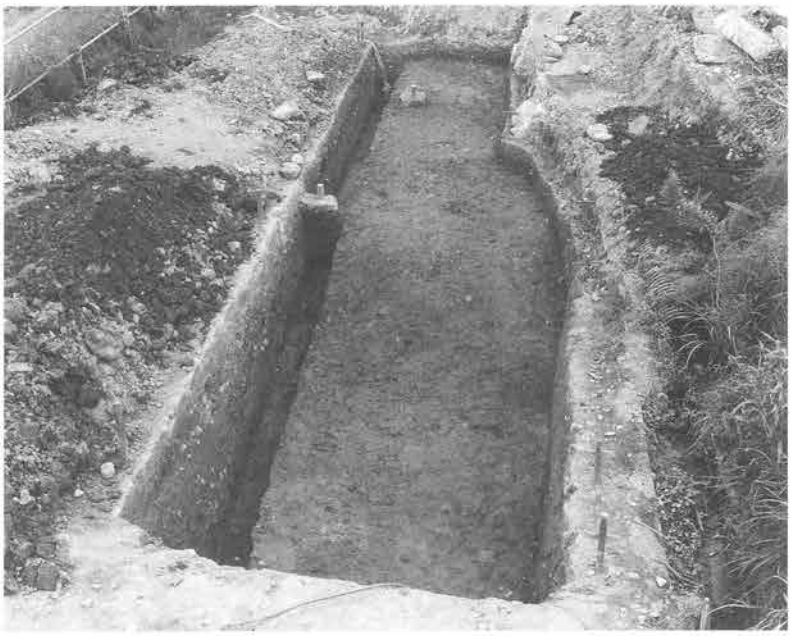
7区　井戸SE01（南から）

7区　井戸SE01の石組（南から）

7区　井戸SE02
遺物出土状況①（南東から）

7区　井戸SE02
遺物出土状況②（南東から）

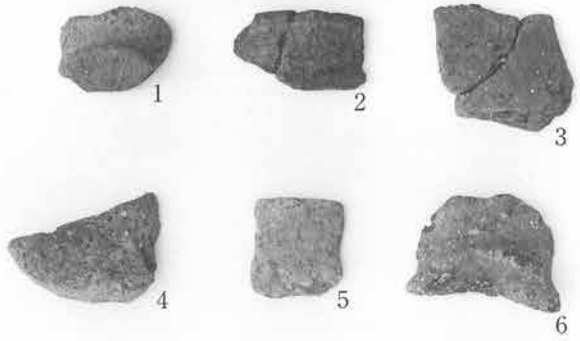
7区　井戸SE02
完掘状況（南東から）

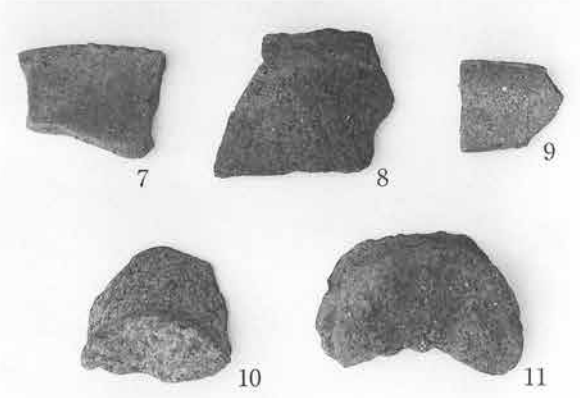


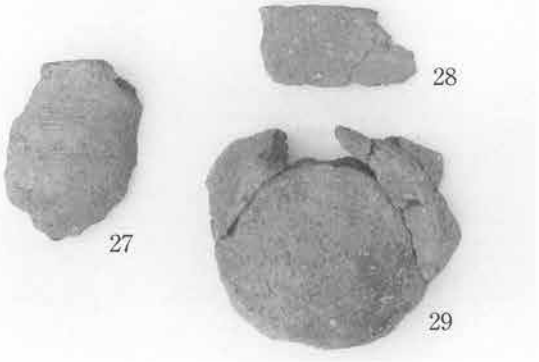
8区　鎌倉時代の状況（西から）

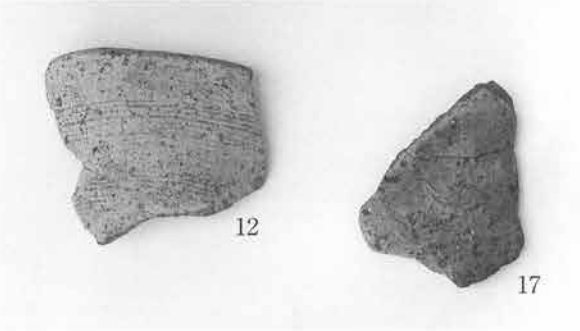
8区　完掘状況（西から）

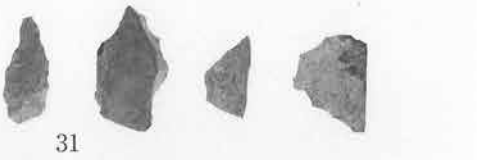
8区　北壁西端部（南から）

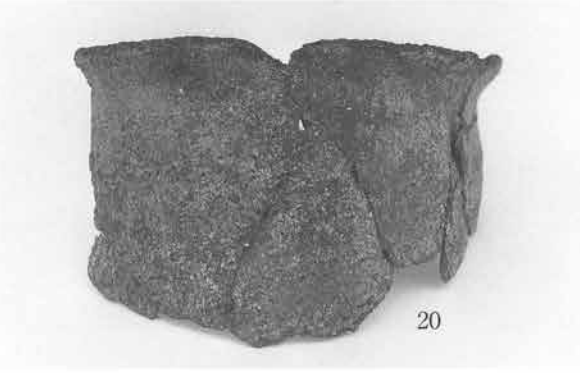




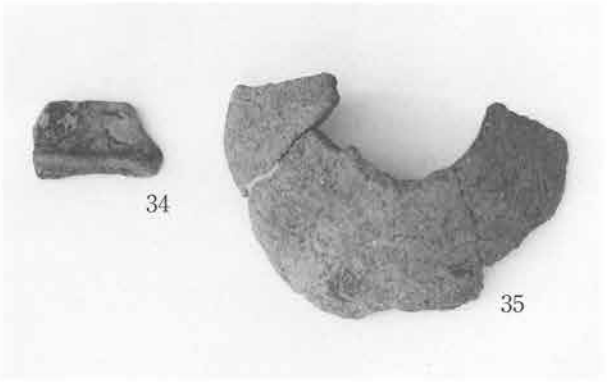



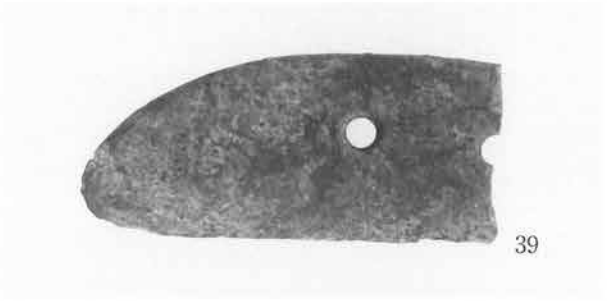



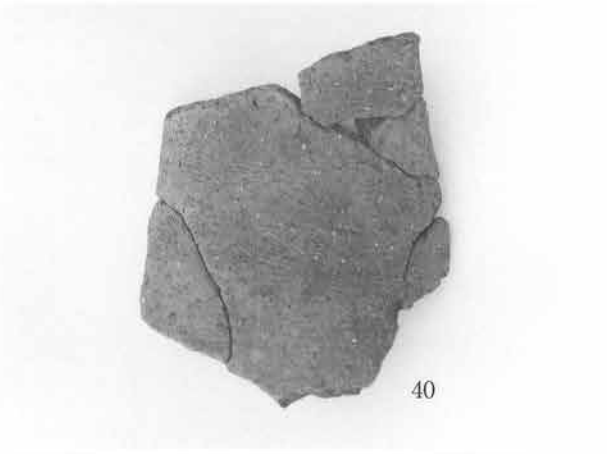



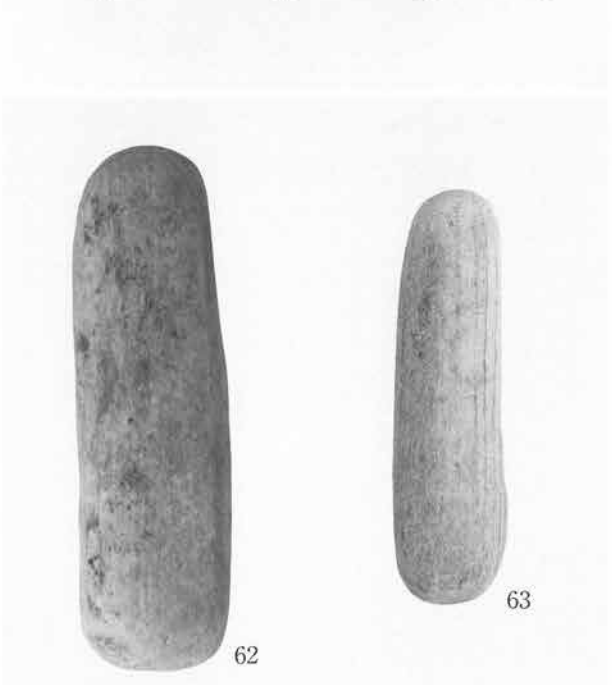



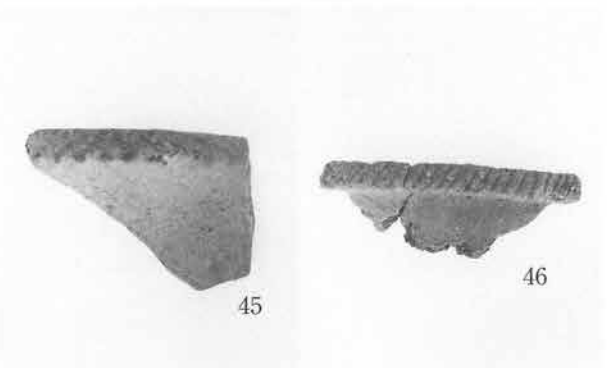
1～5区出土遺物



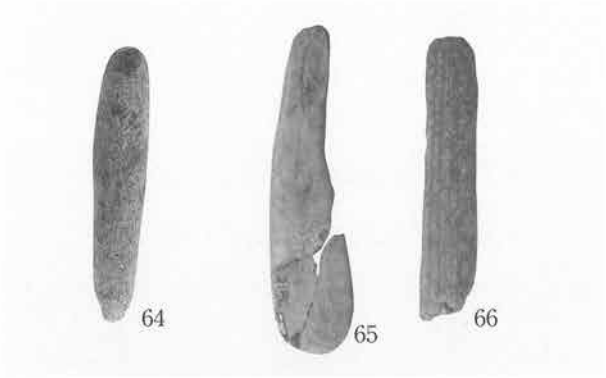




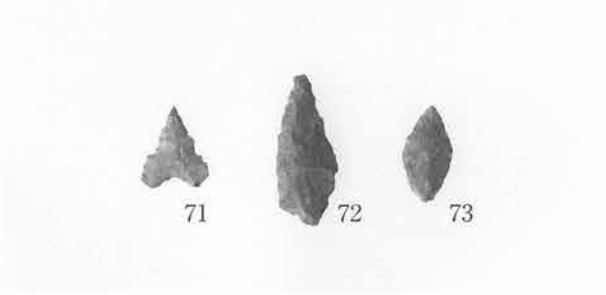



5 ・ 6 区出土遺物

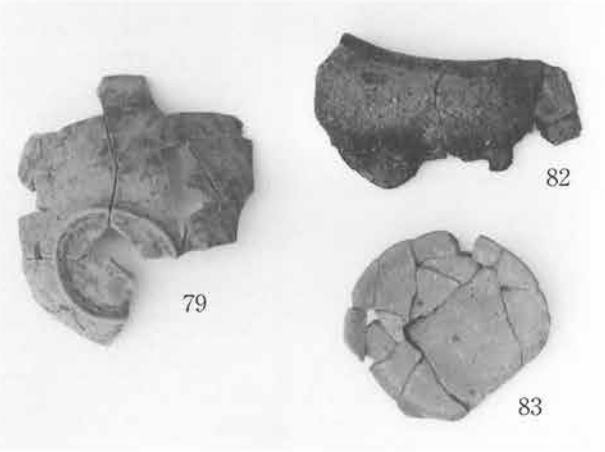

64
65
66

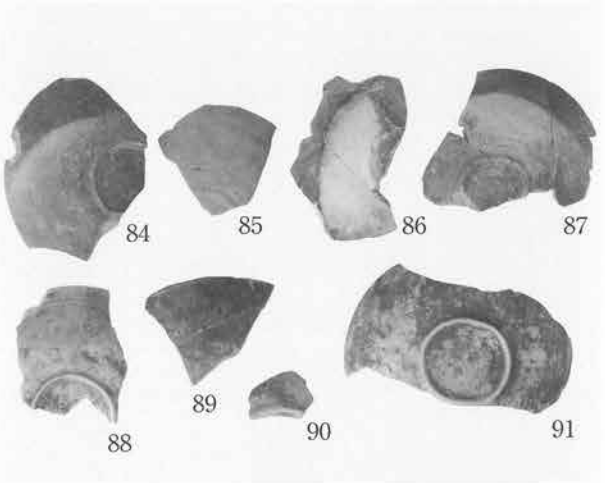
67

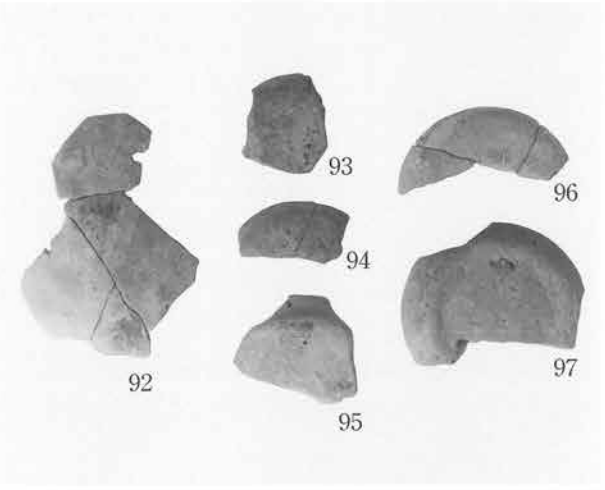

71
72
73

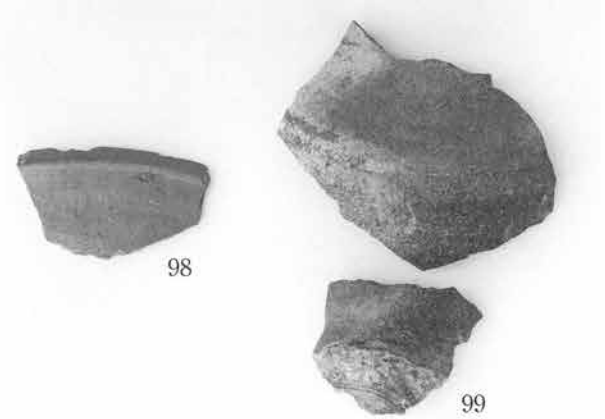
74

75


79
82
83


84
85
86
87
88
89
90
91


92
93
94
95
96
97


98
99

6 ・ 7 区出土遺物

100

101

100

103

102

104

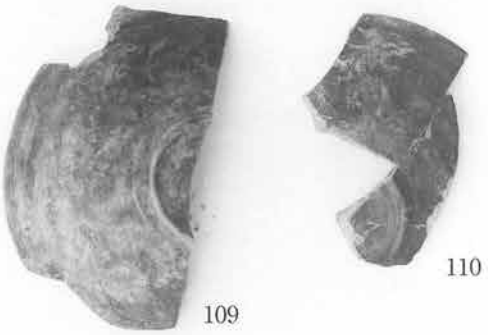
106

105

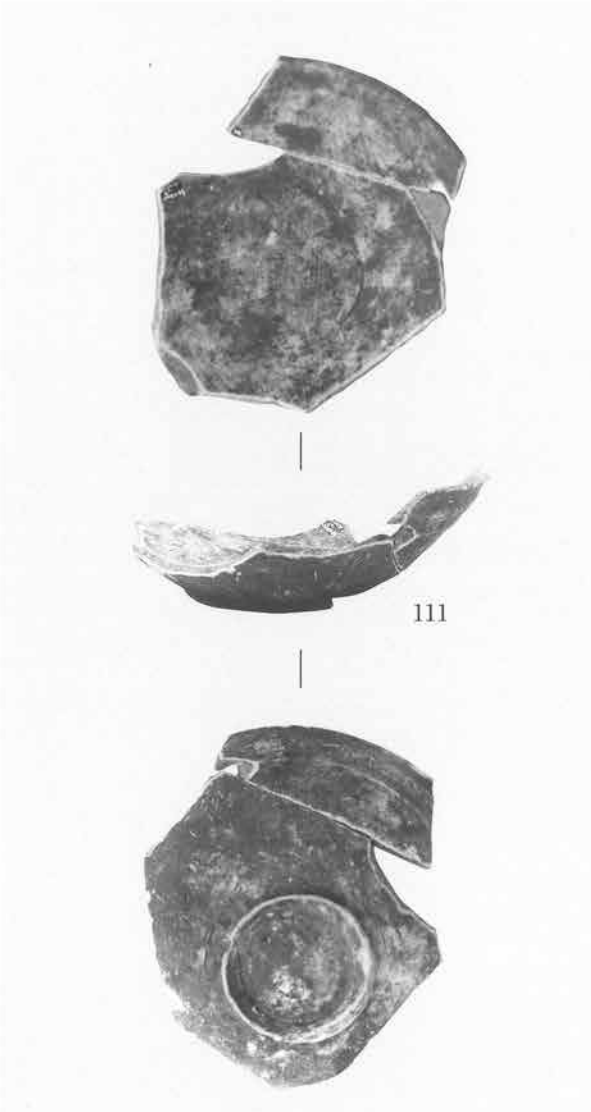
107

7区出土遺物

108


109


110


111

112

113

114

115

116

117

118

7区出土遺物

119

120

121

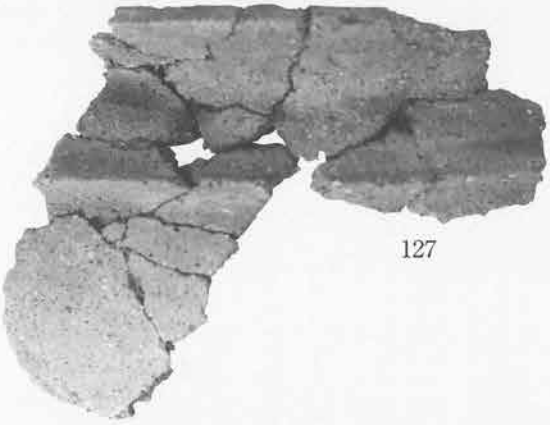
122

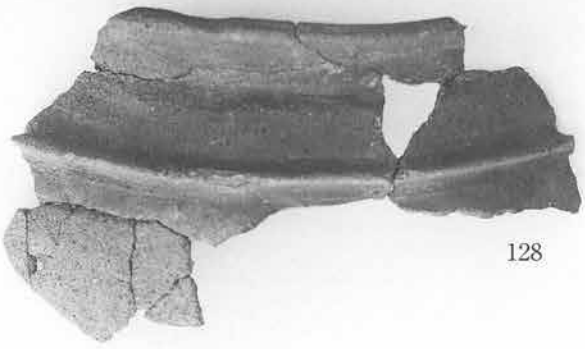
123

124

125

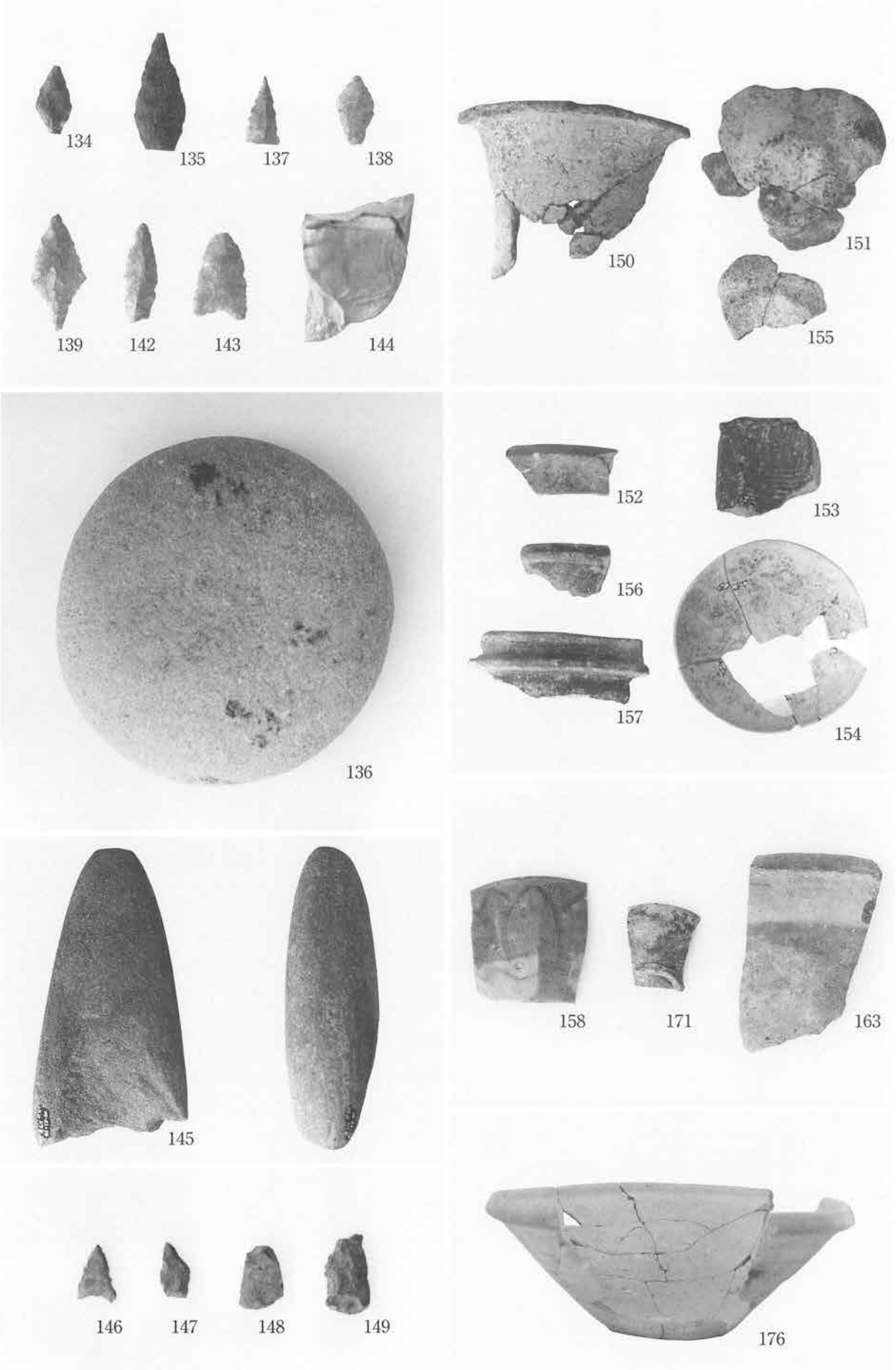
126


127


128

133

7区出土遺物他




4・8区堆積土出土遺物他

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | のかみなかみなみいせき |
| 書名 | 野上中南遺跡 |
| 副書名 | 半島振興道路奥佐々阪井線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 |
| 編著者名 | 丹野 拓・植田 法彦 |
| 編集機関 | 財団法人和歌山県文化財センター（一部を海南市文化財調査研究会が編集） |
| 所在地 | 〒640-8268　和歌山県和歌山市湊571-1　TEL　073-433-3843 |
| 発行年月日 | 西暦　2005年10月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| のかみなかみなみいせき<br>野上中南遺跡 | かいなんしの<br>海南市野<br>かみなかちない<br>上中地内 | 3020230 | 034 | 34°<br>9′<br>46″ | 135°<br>17′<br>15″ | （海南市研究会）<br>1996.11.19～12.18<br>1998.01.05～03.31<br>（県文化財センター）<br>2003.11.04～12.12<br>2004.07.20～10.08 | <br>253<br>577<br><br>338<br>772 | <br>半島振興道<br>路奥佐々阪<br>井線道路改<br>良工事に伴<br>う発掘調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 野上中南遺跡 | 集落<br>墓域 | 弥生時代 | 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・周溝墓状遺構 | 弥生土器・石器（石鏃・スクレイパー・凹み石・石庖丁・磨製石斧・石棒・棒状石製品・石皿・砥石） | 弥生時代中期前半の集落と墓域を確認。松菊里型住居、焼失住居あり。住居跡からサヌカイト剥片が多量に出土。 |
| | 集落 | 鎌倉時代 | 掘立柱建物跡・井戸 | 瓦器・土師器・東播系須恵器 | 鎌倉時代の井戸から、13世紀代の瓦器・土師皿が多量に出土。 |

野　上　中　南　遺　跡

―半島振興道路奥佐々阪井線道路改良工事に伴う発掘調査―

2005年10月31日

編集・発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷・製本　西岡総合印刷株式会社